
一人の世界で

安和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人の世界で

【Nコード】

N7078T

【作者名】

安和

【あらすじ】

——始まりはたった一つの不公平、不平等からだった——

第一王子として生まれながらも10歳まで力が覚醒せず、落胆され、見捨てられ、愛情を受けずに育ったディディアス。それを教えてくれた少女は、不思議な笑みを残して彼の前から消えた。己が弱いために。今度こそ失わない。そう決めたはずなのに「俺は、何度失敗すれば成功するのか……」

ヘタレ？な次期王様×初恋の人×ブラコン兄妹でお送りします。

最初のほうは恋愛色薄いです。後から書く予定。腹黒い彼らが腹黒いと（リア友に）言われた作者に動かされて進んでいくファンタジー！！ ちよつと陰謀アリ？

作者の偏った妄想で書いてます。

だいたい日曜日9時頃更新します

登場人物紹介（前書き）

別に要らないという方は、無視してください結構です。
緑恵から、緑恵の王に変えました。

登場人物紹介

主人公：ディディアス・ジェント・レイサラス

4人兄妹の長男。

次期レイサラス王国国王 現皇太子 19歳

たまにディーンと呼ばれる。でもめったに呼ばれない。

（次期国王様を軽々しくそう呼べる人はいない）

柔らかな金髪をもっており、猫目で目は碧^{みどり}。その容姿から日陽^{サンディヤ}または彼の力から緑恵^{アヘム}の王と呼ばれている。
本人は癖のある髪を気にしている。

本を読むのも好きだが、体を動かすほうが好きなので文官より武官。

自分の意見はあんまりはつきりと言えない人。
しかし芯は強く、これと決めたら押し通す。

ニコニコといつも笑っているため、なめられがちだが、怒ると怖い。

よく言えばお人よし。悪く言えばヘタレ。
家族の前では、これがさらに強くなる。強くでられない。

家族を愛しており、二人の妹のうち、姉のサラだけを可愛がる父王を軽蔑している。でも、嫌いにはなれない。少なからず愛されていると感じているから。

臣下や国民の前では、はっきりとして人気は高い。

器量はあるが力が全てのこの世界では力が弱く、数年前に力が覚醒するまで王位継承権はなかった。

サラ・アゲス・レイサラス

4人兄妹の長女 18歳

真っ直ぐな黒髪と漆黒の瞳を持っている。

父王に偏愛されており、兄弟の中で一番甘やかされて育った。

自分の意見は全て受け入れられると思っており、拒否されることは一ミリも考えてない。

兄や弟に愛されているフリーレージュには冷たい。
自分が一番。

フリーレージュ・ミンド・レイサラス

4人兄妹の次女 15歳

銀の髪と紫の瞳を持っている。

精霊や神と同じぐらい力を持つと言われている銀の髪を持っているので銀の神子姫シルディと呼ばれている。

孤児院や、城下によく行くので、国民からの人気は高い。

愛称はフレル。

父が姉ばかりかまうので、ほっとかれていたフレルをディディアスが可愛がって性格が悪くなることもなく、成長した。

兄妹が大好きで、姉とも仲良くなりたいたいと思っではいるが、何故姉が自分に冷たくするのかわかっていない。

兄と同じく終始微笑んでいるが、何を考えているか不明。彼女の心の中は複雑なので、兄でもわからないことがある。

ウェリアス・ディア・レイサラス

4人兄妹の末っ子。次男 9歳

兄と同じ金髪をもっているが、瞳は兄より色が薄い。

甘えっ子。フレルとディーンが大好きで、よく二人と一緒にいる。よく命令してくるサラは好きではない。

裏表がはつきりしている。親しいものや、彼が気に入った人に対しては天使だが、気に入らないものや、親しいものを害した人に対しては悪魔。容赦しない。

兄弟の中で一番敵に回してはいけない人なのかもしれない。

登場人物紹介（後書き）

とりあえずは、兄妹まで。

考えてたら、これだけしか書けなかった……。

キャラのミドルネーム？には一応英語から意味をとろうと思って、その発音に近い状態で、名前っぽくしました。

ジェントはgentle アゲスはarrogance ミン

ドはmind これはローマ字読み（笑）ディアはdear

彼らの設定を考えてつけました。こんな人って言うのが知りたくない人は調べないでください。それがどうしたっ！！ って言う人はぜひ調べてみてください。

安和と同じ意味で受け取ってくださることを望みます。

望んでいなかった言葉

「もう、いいんだよ」

キミを助けたのは、使えると思ったから。

あの場所から傷つくのを恐れて逃げて来た俺は、

キミを見て、キミの力を使って見返そうと思っていた。

「あの時、助けてくれてありがとう」

だから、お礼なんて言われる立場じゃないんだ。

キミを飼い殺しにして、奴隷のように扱う一人だったのかもしれないのだから。

だからさ、そんなに嬉しそうに、懐かしそうに笑うなよ。

「私、強くなったんだよ。すごいでしょ？」

強くならなかったってよかった。弱いままでよかったんだ。

俺が守るから、守ってあげるから、俺だけを頼ってほしかったんだ。

「もう、無理に私を守る必要なんてないんだよ。だから……………」

無理なんかしてない。俺が守りたかったから。ただキミだけを守りたかったけなんだ。

言われることに衝撃を受けて、何も答えられないまま彼女との距離はひらいていく。

彼女は微笑んだままだ。こんな反応をする俺を、おかしいと思っっているような顔をしているけれど。

離れていくのを感じる心の距離に、彼女の言葉に別れの気配を感じて彼女に向かって手を伸ばした。

「バイバイ」

そう彼女は、俺の大好きな笑顔で、俺の大嫌いな言葉を言った。

風が鳴いて、俺の心の中のように、雨が降り始めた。

望んでいなかった言葉（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

幼い日の約束

フードを深くかぶった少年は、一人ぼっちの少女を見つけた。

少年は、涙目の少女を見つめていた。

少年を見つけると涙目の少女は涙を拭いた。

少女は少年に笑いかけ、手を引っ張って走っていく。

「やくそくだよっ」

少女は、無邪気な声で言う。髪で目は見えない。

「えっ？」

少年は、戸惑ったように聞き返す。

少女は笑って、もう一度言う。

「わたしを一人ぼっちからすくってくれたから。おんがえしするのっ」

少年は、その言葉に少し肩を揺らして止まった。

少女も止まって、少年と向かい合う。

「だから、はなれても。大きくなったら会えるように縁^{えにし}を結ぶのっ」

少年はそんなことを言った少女を驚いたように見つめた。

「もう、ここにこれないのでしょうか？」

無邪気にそんなことを言う少女に、少年はただ黙って聞いているしかない。

「だから、やくそくなの」

繋いだ手が淡い光を発する。光がなくなったとき、繋がれていた手は離れた。

「わたしとあなたはつながっているから」

熱が離れたことに、少年は寂しさを感じた。

少女は少し泣きそうな顔で、精一杯の笑顔で別れを口にする。

「それまで、バイバイっ」

髪を翻して、少女は走っていった。

少年は見つめる、悲しみのオーラを纏いながら。

この世界に数人しかいないとされる、銀の髪を持った少女を。

目を開けると、執務室の机に座っていた。

窓のほうに目をやれば、白んできた空が見える。

夜中までやっていた政務の途中で寝てしまったらしい。体が悲鳴を出している。

治療系はあまり得意ではない。得意なものは、攻撃系と防御系。戦い専門だ。

しかも使うのは、風、火、水。そして近くにある植物を操ること、天候を操ること。

魔法を使えるものは、主に貴族、王族。しかし、たくさん使えるものではない。

だから俺は次期王になる。たくさん魔法と魔力を駆使して。

ストレッチをしながら、夢のことを考える。

最近あの夢をよく見る。確かに幼いころ城下にお忍びで行ったことはあるが、そんなことは覚えていない。ただの夢なのか。夢にしてははつきりとしすぎているが……。

コンッ、コンッ

控えめにノックがされた。

「入れ」

「お早うございます。お兄様」

そう入ってきたのは、フレルだった。手入れされた銀の髪を、後ろで綺麗に結わいている。

「早いな。どうした？」

思った疑問を口にすると、フレルはちょっと恥ずかしがりながら答えた。

「あ、き、昨日っ。お兄様は夜遅くまで政務をこなしていたと聞いたので、その、あっ、お、お部屋に行きましたところ、いなかったの でっ、それで、疲れていらっしやるのではないかと思って」

そつどもりながらも、器用に治癒魔法をかけてくれた妹を見る。

「さすが銀の神子姫シルディだな？ フレル」

笑いながら、そついうと

「お兄様の日陽サテンデイウにはかないませんわ。妹でも心臓に悪いですもの」

そつ言い返してきたフレルと一緒に笑っていた。

夢に出てきた少女と同じ髪の色をもつ妹と、一緒に。

幼い日の約束（後書き）

前回より長くなりました。

毎回長さは違つと思われまますのでよろしくお願いします。

この国と兄妹（前書き）

ちょっとした国の説明が入ってます。

この国と兄妹

レイサラス王国は、3大陸の1つのベーナ大陸にある。レイサラスは特別大きくも無いが、小さくも無い。

しかし、魔法王国と言われるほど魔法が盛んで、世界最強とも言われていた。

ただ、魔力を抑えられたり、使えなくされればただの人。軍には、魔力コントロール、魔法訓練の他に体術を会得しなければ入ることは不可能で、入った後も訓練は続いている。

魔力があればいい、魔力がすべてだ。そう勘違いしたままの貴族が多い。だから体術は必要ないと、言いに来たやつがいるが、俺が話をする前にフレルが返してしまった。

優しい笑顔で毒を吐かれたので、恐ろしかったらしい。相当辛辣なせりふだったらしい。見たかった。バカ貴族がストレスで部屋から出てこなくなり、いきなり出てきたと思ったなら

？皇太子殿下、先日私の意見は一時の感情わたくしでした。申し訳ありません。私は不正に税を徴収しており、民を辛い目にあわせました。どうか私に罰をお与えください！！？

なんて言った時には間抜け面をさらすところだった。ウイリアスに？兄上？？って黒い笑顔で笑われた時は危なかったよ。寒気がきたね。

俺はこの天使の笑みを浮かべている弟が、最後の一手を下したのだろうと思った。

とにかく、レイサラスがあまり大きくならないのは王族の性格による。

俺たちは争いを好まない。腹黒いのは多いが。多分口論になれば、兄妹には勝てないであろう。情けないが。

それが国民にも反映して、おっとりした人が多い。国を守るために騎士になるものが多いが。

それに、この国では真名を名乗る事は出来ない。魔法が発達しているだけに、危険なのだ。8代前の王が、のろいにかけられて以来、名乗っていない。国民も同じ事。知っているのは親兄妹、伴侶だけとなる。結婚すれば、お互いに愛称を決め、それで呼びあう。今までのを使う人も多い。要するに偽名。

王族には通り名が付けられる。俺の緑恵アヘムの王もそうだし、フレルの銀の神子姫シルディもそうだ。サラは、あまり外に出たがらないため決まった呼び方は無い。今のところは？ヒメ？様だ。ウェリアスもフレルについて外に行くからそのうちつくであろう。大臣達が国民意見の中から選り王に報告するだけなのだ。

そう、愛されなければつかない。国民の信頼があって王族が生き、王が立つのだ。

サラはその分だと、あまり良くないのかもしれない。サラは、ひどく我が儘だ。父の愛情を独り占めしているというのに、それを得られないフレルにあたる。

力も、国民からの信頼も厚い、自らの妹を妬んで。

愛情を得られずに、兄弟に依存するしかなかったあの子に。

力があるから、尊敬され、敬われ、慕われて。あるからこそ恐れられて、離れられて、けなされて。

一人だから、フレルは笑った。心配させないようにと。泣くのを止めた。10にも満たない少女が。

正式に王女になって、今までの生活を捨てざる得なかった少女が。

彼女達姉妹と、俺たち兄弟は、半分しか血のつながりが無い。

7年前に、俺の妹になった。

彼女達は父の——愛人の子だった。と言われた。詳しくは分からない。

俺は守らなければならなかっただけ。この弱いものを。

この国と兄妹（後書き）

だんだん長くなっている気がする。

いや、気のせいだ。

神子姫と腹黒弟（前書き）

弟と、姫の話。

腹黒い弟の片鱗。

9歳だよ？

9歳だからね？

神子姫と腹黒弟

「僕も通り名が欲しいですっ。兄上っ！」

「だ、そうですよ。お兄様。朝からずっとこの調子ですよ」

政務の途中で休憩をとっていたところ、困った顔のフレル。目を輝かせたウェリアス。そんな二人が入ってきた。

フレルも途中であつたのだらう、後ろで侍女が困った顔をしていた。

神子姫は、王を支える義務がある。王を支え、共に在らなければならない。この国が出来た時からある掟。神子は100年に一度、世界に一人だけ生まれ、生まれた国に仕える。本人が自覚すれば、どの国に居ても、好きなところに行く事が出来る。フレルは王族なので、必然的にこの国に仕える事になったが……。

「通り名は欲しいと言って、手に入れられるものではない。国民の信頼が無ければもらえない。それに姉を困らせてはだめだらう？」

お茶を飲みながら、弟に注意する。ココには兄妹だけでなく、近衛や侍従、侍女が居るので気軽に名を呼ぶ事は出来ない。？愛称？として使われているはずのウィルと呼ぶべきところなんだろうが……

「良いんですよ、お兄様。わたくし私もちょうど終わったところでしたので」

嘘付け。侍女が困っていたぞ。後ろで。専属侍女を困らすな。そこはもつと自分の意思を持つべきだろう。

遠くのほうから、侍女が呼ぶ声が聞こえる。

「^{シルディ}銀の神子姫様——？ 殿下——？ どちらですか——？」

呼んでるぞ、と視線を向けるとフレルは少し罰の悪そうな顔をした。ウィルにいたってはまだ諦めていないようで、こっちを真剣な眼差しで見つめている。

「……………」

「……………（じ——）」

「……………（目を逸らす）」

「……………（じ——）」

負けるものかと、視線を逸らして黙っているがその場に耐えられなくなってきた。

あと、フレルのキラキラした目線が痛い。断る事なんて考えてなさそうな目だ。痛い。悪者になりきれない。

「あ――」

「お兄様？　どうなんですか？」

ウルウルさせないで欲しい。その目弱いんだから。ヤメテ。本当に。
………… ヤメテクダサイ

結局、俺が折れる事になった。

「…………… 分かった。案を出すよう言ってみる。でも、な
かったら諦めるよ？」

これ以上耐え切れずそう言うと、フレルはうれしそうな顔をし、ウ
イルはニヤッと笑った。

計画道理。見たいな顔をしないで欲しい。勝手に兄を攻略して、
フレルを連れて来るんじゃないや。俺がフレルに弱いと思って
やってるんだろ。お前はホントに9歳か？

兄上はまだ純粋な弟でいて欲しいよ。いつからそんな腹黒くなっ
たのかい。

遠くを見つめるような目で、弟を見ていた。

俺の側近が励ますように肩を軽くたたく。長年、友として、護衛
として傍にいた彼は、弟をみて俺をみて顔を横に振った。
呆れたように。

見捨てないで欲しい。

将来、人をいびっているかもしれない弟を、御する羽目になるかもしれない兄の気持ちも考えてくれ。

「よかったわね。ウィル。お兄様はお優しいもの。でも、あまり困らせては駄目よ。お仕事があるのだから」

利用された事に全然気がつかない良心の塊の妹は、笑顔になって喜んでいるようだ。

人のことより、自分の事だろ。ウィルは素直にそれを聞いている。少しは後ろめたさを感じておけ。

相変わらずな妹に、少し笑ってしまった。フレルは分からずにポカンとしている。

「兄上はお人よしなんだよ。まっ、そこがいいところなんだろうけど」

ボソツとそんな事が聞こえた。多分風で聞こえないようにしたのだろうが、俺の耳には届いた。俺の能力は、？自然？だからな。

そんなに天使のような笑顔を振りまいてもムダだぞ。俺は良く知っているからな、お前が腹黒いつて事を。フレルだけそれを知らないこともな。

とにかく、言いたい事がある場合はフレルを邪魔せずにココに来るように言おうと口を開く。

「ウィル、お前――」

バンッ

その時、無遠慮に扉が開いた。

「あら、お兄様。何をなさっているのですか？ ウィルも」

王族としての振る舞いを完全に無視した態度に、そこにいたものはいつも道理呆れた。彼女はいつもこうなのだ。ノックもしないで入ってくる。まるでそれが普通であるかのように。

フレルの存在を無視して入ってきたのは第一王女サラ。

王が箱入りに、ベタベタに甘やかして育ててしまったがゆえに、ひどく我が儘に育った王女だった。

何って……………ここ、俺の政務室なんだけど…………。

俺の意見は？ 何でココに大集合？ 俺、もう仕事しないと徹夜なんだけど…………

兄としての威厳はそこには存在しなかった。昔から。

在ったものは兄の困った視線と、妹2の良くわかっていない笑顔と、妹1と弟による火花だった。

神子姫と腹黒弟（後書き）

兄の立場が低い……。

皇太子の癖に、大丈夫かこの人……。 周りが悪いんだ！！ 周りが……

何か一人出てきたし……。次回まで待ってけよっ！！ サラのアホー！！

空気読めー！！

姉姫と弟

「何って、ここは兄上の執務室ですよ？ 兄上に用があつたに決ま
っているではありませんか」

いつものようにウィルは笑顔を湛えていたが、俺やフレルに向ける
のより棘が入っていた。

俺は笑うしかない。兄妹げんかをして、勝ったことがない俺には
無理な話だ。

フレルは戸惑っている。どうしたら良いかわからないようだ。

「それよりも、姉上は何しにいらしたんですか？ 知ってますよ、
最近兄上の邪魔をしているのを」

あ、剥がれかけてる。天使の笑みが剥がれかけてるぞ。さっさと姉
様を出して下さいと、顔で語るな。俺もそうしたい。

サラはそれがどうしたとでも言わんばかりに

「邪魔？ お兄様はそんなこと仰っていませんわ。それよりもフレ
ル。何故ここにいますの？ 仕事があるのにきて、お兄様にも皆に
も迷惑をかけているではありませんか？」

自分は、迷惑をかけてないとも言えるのか。こういった時に父を恨む。

常識人に育ててくれ、王族の恥になる。

「申し訳ありません」

「姉様は、悪くありません。僕が無理にお願いしたのです」

フレルが謝ると、ウィルがすぐさま庇った。まあ、真実だしな。

ウィルがフレルを庇ったことが、不満のようにサラはまた口を開く。

「まあ、フレル。弟に庇わせて、ひどい姉ね？ それでも王族なの？」

「なっ……。何故、姉様の所為にするのですかっ？」

「静かにしなさい」

まだ言い合いが続いているのを止めた。

このままでは、ぜんぜん悪くない妹が可哀想だ。

まだそこまで

配慮ができないのか。

ウィルはまだしもサラはまだ成長してないと見える。サラは見た目

だけ成長したただの子供だ。

「全てを、フレルの所為にするな。ウィルの言い分は正しいしな。それにフレル」

フレルは肩を揺らして、不安げにこちらを見た。

不安を取り除くように、優しく言った。

「あまり、ウィルの我が侂を聞いてはいけないよ。その時は、お前はウィルをここの来るように言い聞かせなさい。……お前の話はお前の仕事が終わった後に聞いてあげるから。行つてきなさい」

前半の言葉で落ち込んで、後半の言葉で弾んだ笑顔になって侍女を連れて出て行った。

さて、あと二人は……

「大体いつも姉上は、姉様に強く当たりすぎですつ。姉様が何をしたと言うのですかつ」

「力があるからと言って、大きな態度が気に入りませんわ。庶民と馴れ合うなど王族の恥ですわ」

「この際言わせてもらいますつ。恥はどちらですかつ、態度が大きいのは姉上のほうではないですかつ。国民と親しくするから、人気

が高いのです。安心していただけるのですっ」

「私が恥わたくしですって？　これが当たり前です。　人気取りで馴れ合うなんて私にはできませんもの」

二人の喧嘩は、フレルが退室したことによってヒートアップしていった。

周りの侍女は困ったようにウロウロして收拾がつかなくなってきた。

「殿下。ここは、貴方が収めるべきです」

それが当たり前だとばかりに、友人は言う。

やる気はしないが……。このままでは俺も徹夜だからな。

それに、兄妹仲良くやらなければ。

「お前たち、少し——」

「兄上っ。姉上がつ——」　「ウィルが私に失礼を——」

「黙れ」

無表情で少し強く言うと、二人はビクツと体を震わせて黙った。ディディアスの周りの空気が変わったのだ。

「お前たちは、ここで何をしていた？」

あつ、とウィルは気づいたように罰が悪い顔をした。一方サラはわかっていない。

「ウィルの用事は終わっただろう？ この後、勉強もあるはずだ。お前はここで何をしている」

「ほら見なさい。貴方は邪魔でしたのよ」

サラが勝ち誇ったようにそう言った。それを聞いたディディアスは視線をサラに移す。

「セ^{サラ}ヴィ、お前もだ。ここへ何しにきた。よつぽど重要な用件なんだろうな」

「わ、私は、ただ兄上とお話がしたくて……………」

「相手の邪魔になるとは思わなかったのか？」

ディディアスの声がワントーン下がった。彼は怒っているのだ。それをけしかけた侍従にも止めることはできないし、彼も止める気はない。

「お、お兄様は邪魔だなんてそんなことは仰っては……………」

「言わないとわからない様では、王女として失格だな。品格が問われる」

それを聞いたサラは、涙を浮かべた。誰も、助けようとは思わずただ見ているだけ。

いや、近づくことも意見を言うこともできないのだ。

ここには緑恵^{アベム}の王に逆らうことができるものなど誰もいない。

そこにあるのは圧倒。王の威厳。

「残念だよ。セヴィ」

悲しげな顔でそういうと、彼女は走って出て行った。追いかけるのは彼女の侍女だけ。

ウィルに視線を向けると、慌てて頭を下げた。出て行った。

ディディアスはそれを見送ると、

「さて、続きをやるか」

いつもの笑顔に戻り、何もなかったかのようにしていた。

これが、温和な性格に隠された彼の顔。

包み込むような優しさの裏には、激しい強さを持っている。

人を包むそよ風と、人を襲う嵐が同じ風のように。 見た目だけではわからない

姉姫と弟（後書き）

9歳と同じレベルなサラさん。

やっとな主人公キレたな……なんか上の人っぽいぞつ。

最初からこうやってちゃんとやればいいのに……って思っている人は少くない。そして本人は気付かない。友人もいわない。それがいいたところだと思っているから。

侍従と皇太子（前書き）

周りはこんなヤツばかり・・・

侍従と皇太子

静かになった部屋で、長い間資料と睨めっこしていたが、疲れたため傍に居る友人兼侍従に話しかける。

「俺の代わりに、これやらない？」

「それ、34回目です。殿下。いい加減にしてください」

表情を崩さず、そう答えられた。

そんなに言ったっけ？ 俺。

無言で頷けるあたりはさすがだと思う。俺の表情を読み取れるのはきつとこいつだけだと思う。

「あなたの表情は、銀の神子姫様と同じくつくられたものですかシルデイらね。……姫の方が、負の感情が大きいでしょうね。しかし貴方は、――」

「なんだ？」

言葉を途中で切った友を見つめる。

「……いえ、何でも。何でもありません」

自分に言い聞かせるようにか、確認させるように言って、黙った。
こうなったヤツは、絶対に言わない。一度自分でこうと決めたら
艇子でも動かない奴だ。聞くのはやめるしかない。

「それにしても、セヴィ^{サラ}には困ったものだ」

話を変えるために、さっきの出来事を話題にして振った。それでも彼は黙ったまま。

……ああ。《仕事中》だからか。

「主の名において本日の仕事は無しとし、半日の暇を与える。――
――よし、敬語を崩せ」

そう言ってニヤリと笑うと、ヤツもニヤリと笑って、言った。

「半日の休みを頂けるのならば、愛しい妻のいる家に帰っても良い
んですよね？」

「良い訳ないだろう……」

溜息と共にそう吐き出すと、ヤツは笑みをさらに深くした。

「本当に殿下ってイジリがいのある人ですね。こんなちよつとしたことで、こんな反応をするなんて。しかも親しいものにだけ……なるほど、人気の秘密か」

「俺で遊ぶな。それより人気って何の話だ？」

「それは、侍女達の……。んっ。ごほんっ。……………それよりもセヴィ様の態度が気になりますね」

話を逸らしやがった。

？態度？？ 前から……………ああ。

「自信の事か？」

そう問うと、そうであるというように首を振った。

「いくら王に可愛がられているとは言え、本人に特別な力があるわけではありませんし、王の力も近年は弱まりつつあります。……お体があまり良くないと」

「ああ、聞いた。しかも、最近父の様子がおかしいんだ。いくらセヴィを一番可愛がっていたとは言え、俺たちには、顔見せぐらいは来ていたのにそれもない。ここ近年で、なにか……」

「何かあったのかもしれませんがね」

今度はその意見に俺が頷く。

俺に親しい、一部の重臣からも話は聞いている。

ある時から、性格が変わったかのようになられたと。民思いだった王が、自分主義になってしまったと。誰の話にも耳を貸さなかった。……など、さまざまだ。

「ご命令を」

考え悩んでいると、そんな声がかかった。

「私が探ってきます。ご命令を」

「お前は？侍従？だぞ」

呆れたようにそう返すが、

「殿下は、？俺？をご存知でしょう？」

自信に満ちた顔でそう言われた。

諦めて、話を続ける事にする。……この頑固め。

と、言うより、俺がこの件に関してすぐに折れる事を知っていたみたいだ。

「？侍従？という立場ではそう簡単に動けん。？お前？には5日の暇をやる。その間に調べる。他の者に調べさせる」

そう言うで一瞬目を丸くしたが、俺の言いたい事がわかったみたいでニヤリと悪人顔で笑った。

「はい。調べさせます。そんな面倒くさいなら、どうしてコレにしたんですか？」

「俺の？侍従？は最後の砦だ。一番腕の立つもので、一番信用している者でなくてはならない。殺されてしまうからな」

「信用してただけで、恐悦至極であります」

茶化したようにそう言い、笑った。

そう言ったヤツに向かって、俺は意地悪く笑った。

「俺の？信用している侍従？は、仕事を放棄するらしいが？」

「いやあ、申し訳ないと思っています。たった5日です。他の人で我慢してください」

これでは、俺が我が儘を言ったみたいではないか。しかも、全然悪

いと思っていない顔をしているぞ。ヤツも笑っているのを見ると、分かっててそう言っているのだろう。

ひとしきり笑った後、俺の「さて」に反応してヤツは顔を引き締めた。

そして、始めた。

「本日只今より、コーラス・レイと名乗ります」

名乗った家名に驚くが、これは儀式だ。儀式以外の言葉は言っていない。

最初の言葉に答えるように、続ける。

「これより我が騎士は、我が命により療養し、体調を崩した原因を探るためにレイを派遣する」

「これより我、コーラス・レイは主の命により、原因を探ります。我が主が知る、我が真名にかけて」

2人を中心に魔法陣が展開し、発光した。

これにて儀式は完了。主の命で行動したと証明するには、魔法儀式が必要なのだ。これがあるだけで、正式な探索だと認められ、持ってきた資料の信憑性が高まるのだ。

「無茶するなよ」

心配げにそう言つと

「そのままその言葉を返しますよ。帰ってくるまでに過労死なんてしないで下さいね。ディーン」

「……………早めに戻って来い。コウ」

コーラス・レイ。生まれながらにして、精霊に愛され、孤独を背負ってきた男。預言者でもある神子に《変革者》と言われた男。コイツの真名を知るものは主である俺と、ヤツの妻だけ。

そんな男は友人兼主に笑いかけ、扉から出て行った。

侍従と皇太子（後書き）

ちよつと不穏な空気が漂っています。
とりあえず、1部終了？

もう一人の“友”（前書き）

新章開始。かな？どっちかって言うとエピソード？
ん もうわから

もう一人の“友”

「相変わらず、しけた面じゃのう」

ん？　なんだ？　どこから……

「お前は、わしに喧嘩を売っておるのか。あやつの気苦労が知れぬわ」

ああ……この声は、知ってる。昔から俺の内に居てくれて、支えてくれた人。

いや、人ではないか……

「喧嘩売ってないよ。ただ、寝ぼけてただけだ。風の精霊王」
ゼノウイス

「心配したから来てやったのに……。寝ぼけていたなど、次期王とは言えぬぞ」

来たって、俺の？　夢？　にでしょうが。それにしても

「久しぶりだな。何年か振りじゃないか？　何かあったのか？」

「何かって、お前の――。まさかお前、レーシュを忘れているのか？」

「レーシュ？」

その名に、聞き覚えはない。ただ、胸の奥が疼くだけ。

大切な何かを、忘れているかのように。

それを聞いた風の精霊王は、悲しげに声を揺らした。

「不憫な娘じゃ……縁えにしを繋ぎ、まためぐり合う事が出来たというのに。記憶に蓋をかけられているなど……」

記憶に、蓋がしてある、だと？ 何の、ことだ………？

「我が出て来れなかったのは、お前にかけられた魔術のせいじゃ」

「魔術……」

我々の国で、忘れられた魔法式のことを魔術と言う。忘れられたものには“呪”が多いため、誰も探そうとしないが……

「それが我を阻み、お前の記憶を封じた。本来ならば、お前はもっと強いのだ。欲にまみれたものが権力の為にお前を封じ、人形にしようとした」

明かされた、初めての真実。

そんなものの為に、俺はあんな思いをしてきたと言うのか。

「我慢できなかった我は、お前の負担を無視して力を解放した。…少ししか、出来なかったが」

「いや、そのおかげで今の俺があるわけだから。いいよ」

「相変わらずのお人よしじゃのう。お前には欲が無さ過ぎじゃ」

「ただ………」

欲の無い人間なんて居ない。俺は隠してきただけ。見ないようにしてきただけ。

そんなことを望んでも、無駄だからと。

けど、

「力があつたならば、記憶があつたならば、フレルは幸せになれたのかな」

そう呟くと、息を呑む音がした。フレルに本当の笑顔を見せることが出来なくなつた原因。

「今でも、あの娘は幸せじやろうに。お前のおかげで」

「俺は間違つたことをしたおかげで、一度感情を奪っているんだぞ」

思い出すだけで、今でも後悔している。なぜ、あんなことをしてしまったのか。

「お前は妹とレーシュを、無意識のうちに重ねておつたのだな」

柔らかい口調で、その後悔を拭い取る様に精霊王は言った。

「重ねる……？ 記憶が無いのに？」

「記憶が無いと思うのは、他人の干渉があつたからじゃ。感情は消せまい。同じことをお前が思つたのじやろうの」

感情は、か。では俺は、その彼女にかわいそうだと思つたのだらうか？ あの世界を蔑んでいた時代の中で、俺はそんなことを思えたのだらうか。

「お前は、記憶を少しずつ見ておるのだろうか？ 我が出てこれると
いうことは、この呪も、綻んできておる。大体は我が壊したんだが」
「見ている………？」

って言うか、壊していいのか。 俺としてはありがたいが。しかし
俺への副作用が気になる。
それに、俺の夢を覗くな。

「銀髪の少女にあっておるだろう？」

「あれが！？ レーシュという少女が」

もう、会っていたのか。レーシュという少女。
しかし銀髪ならば、その名はここに届いているはず。
そんな、特別な色をもつ少女ならば。

しかもゼノウィス、まためぐり合えたと言っていなかったか？

「おい、ゼノ——」

「その質問には、答えられん」

俺の聞きたいことが分かっているかのように、そう言った。

「お前自身で思い出し、お前自身で見つけねばならぬのだ」

「俺、一人で見つけろってか！？ 手がかりも無いのにそんなことは――」

あせって、ゼノウイスにそう言う。しかし、

「手がかりはお前の中だ。それにお前は、一人であって《独り》ではないのだ」

そう言ったゼノウイスに呼応するように、記憶の中の少女が、独りはつらい、寂しいと言って涙を流す少年――俺に言う。

『私をたすけてくれたんだから、味方は私がいるでしょ？ それにゼノもいるのだから独りじゃない。独りじゃないんだから、私に、仲間になよっていいんだよっ』

『それに、あなたは私の太陽なんだから、笑っててっ。それはみんなをしあわせにするものだから』

そう、澄んだ青空とやわらかい陽の光をバックにして微笑んでいた。

ああ——キミは俺の初恋の人。
どうして忘れることが、出来たのか。

そして、意識が浮上するのを感じた。

閑話・レーシュの望み（前書き）

ちよつとした、作者の息抜き

閑話：レーシュの望み

彼は、私に強さを求めました。

人々に認めてもらうつ為に。

私は、彼に救いを求めました。

孤独から逃げる為に。

時がたち、私達がもう一度出会ったときには

彼は、私を忘れていました。

彼を望む者によって。

私は、苦しみました。

今更自覚した恋心によって。

こんな思いをする為に、

こんな事をする為に、

縁を結んだわけじゃないのに。

望んだのは、

貴方の本当の笑顔だけ。

偽りだけでは、苦しいよ。

自分自身を否定するその笑みを見るのは。

ゼノが、言うては駄目だというから、私は待つよ。

だから、見つけて。

その瞳に、
『私』を映して

壊れたもの

体をむくりと起き上がらせて、状況を確認する。今度はちゃんとベッドで寝ていたようだ。

コウが調べにでて、4日がたった。あの有能な側近ならば、早めに帰ってこれると思っていたが、そうでもないらしい。

「5日はキツかったか？」

そうばやくと、コンッ、コンッとノックがされた。

「殿下、こちらに署名——うわぁっ！」

コウの代わりの、侍従が入ってこようとして部屋を出た。

「お着替え前だとは知らず。す、すみませんでしたっ。今日はこちらでやると伺っておいりましたので、てつきりもう……」

準備が出来ていたと思ったわけね。そして俺は寝起きだったと。

「すぐに終わる。しばし待て」

俺は着替えに侍女は使わない。誰かに触られるなど、嫌だからだ。

だから大体のことは一人で出来る。

「いいぞ」

「失礼します」

許可を出して入ってきたのは、侍従ではなくフレルだった。

おいおいおいおい……。姫に書類を持たせて消えるやつがあるか……。侍女長に言っておこう。

俺の呆れた顔を見たのか、フレルは眉毛を下げて

「書類を持って震えていたので、変わって差し上げましたわ。ちょうど用がありましたし」

その侍従が、「何だあれ、何だあれ、何だあれっ！！男なのにあの色気は何だっ！！」と震えていたのは、二人の知らぬまた別の話である。

そんな自覚の無い次期王は、自覚の無いままあたりに迷惑を振りまいているのである。

男でさえこうなのだから、女が見れば――言うまでも

ない。

「用、とは？」

フレルの髪を見ながら、先ほど会った精霊王ゼノウイスの事を思い出していた。

覚えていたのなら、フレルに何かしてやれたのかという、意味の無い問い。

力があっても、時だけは戻せないのに。

やり直せない、のに。

『どうして、兄様はそんな事をするのっ！！ 嫌だっって言っているのっ』

怒りながらも、そこには笑顔があった。

くるくる変わる表情。親にかまってももらえない寂しさなんて、その時には無かった。

その時間の終わりが近づけば、少し寂しそうであったけど、そこには表情があった。

作られたものではない、本当の表情が。

悲しい顔は見たくないと、欲した結果。幼い俺は、手段を間違えた。

『そんな事はしてはいけませんよ。お兄様。困ってしまいますわ』

そこに、昔のフレルは居なかった。表情を抑えた、模範解答しかしない人間のように。

——操られた、人形の様に。

「——様。お兄様？」

「えっ？」

ふっと、前を見ればフレルがクスクスと笑っている。

「お兄様が上の空になるなんて珍しいですね？」

口を引きつらせて、フレルを見つめる。

口調こそ変わってはいないが、前よりも表情がでるようになった。

「で、用は？」

「ですから――」

笑われているのが耐えられなくて、そうもう一度聞けば、キィ……とドアが開いた。

「デイディアス」

そこに居たのは、王、だった――。

「お久しぶりですね。こちらに来たのは」

久しぶりに会った父にそう言うが、父はそれに構うことなく続けた。

「騎士の為に、調査をしているのであったな？」

「そうですが……？　それが？」

話が見えずそう聞くと、今までの父には無かった見下すような表情で、少し口角を上げ言った。

「北のベルディナの反乱で、騎士が巻き込まれたらしい」

「はっ……？」

「たしか……コーラス・レイ。とか言ったか？」

それは、それが誰の使いか分かっているようで、感情のこもらない目で俺を見ていた。

驚きと、——それがどういう意味をなすのか——と言う恐怖で固まっていると、父はとどめをさした。

「……生きていると良いな？」

廊下に響く、バタバタとした足音が、急に遠ざかっていく気がした——。

世界は壊れたのではない。

すでに壊れていたのだ——

ただそれに、気づかなかっただけ。

壊れたもの（後書き）

やっと王様出てきました！！

ちよっと、安和としてはいい展開かなあ

動揺の中の、光（前書き）

前作の最後に、ディディアスが「世界が壊れた」発言をしていますが、彼にとっての世界は、父であり、家族です。

ここで付け足してしまって、スミマセンっ。

動揺の中の、光

バタバタと走る音が、遠くに聞こえる。

――殿下っ、北のベルディナにおいて暴動です!!

ああ、さっき聞いた。

――けが人が増えていますっ。ご指示をっ。

――早く鎮圧しなければ、広がってしまいますぞっ。

知ってるさ。少し静かにしてくれないかなあ。

――たった一人の騎士ごときで、そんなに動揺しては先が
思いやられますな

――そうですぞ。そんな事よりも、はやく……

ごとき、そんな事、だと？

貴様らが何を知っているというのだ。命令ばかりをして、戦う
事を知らぬ馬鹿が。

ディディアスの怒りがかつていとも思わずに、でっぷりとお腹に脂肪をまとわせた恰幅のいい貴族達が、額に脂汗を浮かべながら話し合っていた。

「ごときなんて……、貴方方は騎士を何だと思ってらっしゃるのですっ」

「姫、これは我ら男の仕事であり、男の関係。貴女様には分かりませんまいっ」

「早々に、鎮圧してくださいませ。貴女の魔力なら簡単でしょう？」

「私の力は、貴方方を楽させるために在るものではありませんっ。それに、お決めになるのはお兄様………っっ」

フレルがこの部屋の主の力を強く感じ、息を詰まらせた。
こんな力、どこから――

「楽などと、そんな事は――。っっ！　で、殿下………？」

フレルに遅れて、貴族達が気がついた。
いくら表面上に変化が見られないからと、怒らないわけではないのに。

与えられた情報だけを見て、その人の見た目だけで判断する。
そんな判断しか出来ない彼らには、人の感情や、表情を感じ取る
事なんて出来ないであろう。

そして彼らは気付かない。自分達の浅はかさに。

風が、荒れる。木々が大きく揺れ、葉が舞う。天候は、急激に悪
くなり、外は大降りの雨である。

その原因であるディディアスの後ろにある窓は、ひびが入り、今
にも割れそうだ。そこから隙間風が、ヒューヒューと静かな部屋に
入ってくる。

「お兄様っ。落ち着いてくださいっ」

フレルが声を出す、ディディアスには届かない。
しかし貴族達の声は聞こえているようで、彼らが悲鳴を出すたび
に風は強くなっている。

ビリビリと感じる、この鋭い気配は、殺気なのだろうか。

戦場に出た事がない、部屋にいるものたちは、この鋭いものが何な
のか分からなかった。

『お前達から、殺そうか。』

ディディアスから出たその言葉に、そこにいたものが驚愕した。
視線も表情も変わらないまま、ただ抑揚のない声でただ【殺す】
と言ったのだ。

「で、殿下っ。我々は、な、何もしておりませぬっ。た、対策を練
っておっただけでっ」

『しかし』

あまりの恐怖で、舌がまわらなくなった貴族達は、やっとの事で
自分達の言い分を言った。だが、

それを何っているんだという仕草をするように——しかしまだ
無表情のまま——首をかしげてディディアスは言った。

『我が騎士を愚弄したのは貴様達であろう？』

自分達が何の失敗をしたのか気付いた男達は、ごくりとのを鳴
らした。

目の前にある、先ほどよりも膨らんだ殺気に、彼らは無意識に【死】
を覚悟した。

「っ、お兄様っ。そんな事している暇はありませんわっ。こんな事
後でも出来ますっ」

ディディアスはその言葉に、ピクリと反応を示した。

「今すべき事はっ、騎士を探す事ですわっ!!」

その言葉で、殺気が少ししぼんだのを確認すると、フレルは自分の力でディディアスの力を封じながら近づいた。

ディディアスに直接触れる事が出来るところまで力を押さえ込むとフレルは、体制を崩して膝立ちしているディディアスをそっと抱きしめた。中で、力を貸してくれた精霊王^{ゼノウィス}ごと。優しく、そしてしっかりと。

「お兄様、抱え込まないで下さい。私がいいます。独りではありませんせん」

その言葉にディディアスはピクリと体を動かすが、フレルはかまわず続ける。

「彼は、貴方を支えてくれるといってくださいたのでしょう？ お兄様には、お兄様のやるべき事があるはずです」

フレルがそうゆっくりと諭すように言う言葉で、彼の力によって嵐のようになってしまった天気は、回復し始めた。

「貴方の内の方もいます。大丈夫です」

ディディアスの目から、熱い雫が一粒、床に落ちた。

「それに、お兄様の笑顔は皆の太陽なのですから、曇らせてはいけませんよ？太陽があれば、幸せになれます。………もつと妹^{わたし}を、部下を頼ってください。兄様」

フレルの口から、何年かぶりに聴いた【兄様】で、ディディアスは正気を取り戻しかけてた。

彼女の言葉で思い出した光景を、何も考えぬまま口にした。

「レーシュ……………」

力の反動で、夢うつつな状態の彼は、笑顔で手を振って走っていく彼女の幻影を見ていた。

そのおかげで、その名を聞いたフレルが、体をピクリと振るわけたのには気がつかなかった。

彼女の体が、少し震えていたのにも。

そのままディディアスの意識は、暗闇の中に落ちていった。

優しい闇に、抱かれながら――

動揺の中の、光（後書き）

何とか言わせたいところまで、言わせました。

ネタ切れなので、当分は更新しないかも……

未定です。何分気まぐれなもので……

いやあ、ネタの神様も、気まぐれだから……。

次期王につく者（前書き）

お久しぶりです。 やつと更新です。

次期王につく者

ディディアスが意識を失うと同時に、鋭く冷たい魔力は薄まりはじめた。

しかし、また同時に発生した濃度が濃い、質の高い魔力。

同じ人から発せられるとは思わないこの違い。この部屋の中で、フレルだけはこの気配を知っていた。

『さつさと動かんか、愚者め』

普段のディディアスを見ていればありえない言動、そして嘲笑。ありえないくらい恐ろしい雰囲気とその場にいたものは感じていた。フレルだけは動じずに、ドレスの端をつまんで淑女の礼をする。

「お久振りにございます。ゼノウイス風の精霊王様」

そんなフレルの行動、発言を聞いて、男達はざわめいた。

「精霊王、だとおつ……!!」

「誰に向かつて口を利いているのですか。貴方方の言う男の仕事と
いうものは、頭を使う事も知らない力だけのもののですか？」

「なっ……！ ひ、姫であろう方が、我らを愚弄するのかつ……！」

「先に愚弄したのは、貴方方のほうではないのですか？ 私に対す
る発言は王家に向かつて言っているのと同じ事です。わきまえなさ
い」

「ディディアスには見せる事のない冷徹な笑みを男達に向け、諷め
た。」

「それに、領土にいる国民から不正に税をとり、大きなことしか言
えない貴方方には、そんなことは考えられませんでしたか？」

「な、何故……。……。それを」

「露見する事はないだろうと、自身の力を過信していた彼らは、咄嗟
に嘘をつくなど出来るはずがなかった。それも相手は、王家の姫。
しかも、すべてを知るとされている銀の神子^{シルディ}姫なのだ。彼らに反

抗など、無駄である。

『暴動を止め、騎士の手がかりが見つければ、今回の件は不問としてやろう』

ずっと黙っていた精霊王は、急にそう言った。冷たい笑みを浮かべながら。

『しかし、二度目はないぞ。愚か者が』

その言葉を聞いた男達は、逃げるように部屋から出て行った。無表情のまま、その男達を見ていた精霊王だが、視線を感じてフレルを見る。

「あんな者達に任せて、よろしかったのですか？　本当に騎士は見つかるのですか？」

良くも悪くもディディアス至上主義のこの兄妹は、あんな貴族よ

りも、精霊王よりも兄に関することが大事らしい。

それに弟と共に、ディディアスに害なすもの、不安の種を影から摘み取ってきたフレルにとっては、腰抜け貴族はチヨロいのかもしれない。

そんなことを思っている精霊王も、なかなかひどい奴であった。

『無理であろうの。あれらには、そんなことは出来ぬ』

「ならばっ」

何度も言うが、フレルは今、ディディアスに見せないような、ひどい剣幕だ。いつもニコニコ笑っている彼女の面影はない。そのおかげで、必死さが伝わってくるのだが……

――我が友にも、その表情を見せれば安心するというのに――

表情を変えない妹がフレル悩みの1つである事を、彼女は知らない。

それはどうしてなのか、精霊王には分からない。彼はその身のうちにある精霊王に気付かれないようにしている想いがあるのだ。

知られたくないことが人にはあるという事を知っているので友である精霊王は訊かなかった。

知りたくないわけでもなかったのだが。

『緑のから、連絡が来た』

「っ！！ 緑神からですかっ！！」

『緑神？ ああ、人間はアレをそう呼んでおるのか。しかし、お前は本来の名を知っているであろう？ 神子よ』

「…………… 緑を支配する神【グリアルーレイ】。お兄様を愛し、守り、優しさを届けるもの。又の名を慈愛の神【アフレ】。と、私は認知しておりますが」

『さすがのよう、神子。我はアレに言われてここに来たに過ぎぬが、これに惚れたのもまた事実。そんな怖い顔をするな、神子よ。アレは我の大切な友だ。しかし——』

「？」

『何故アレが人に神などと呼ばれておるのが分からぬ』

精霊王の言葉を聞いて、フレルは困った顔をした。

確かに、ゼノウイス 精霊王と神は同じ力の大きさを持つ、最高位の精霊なのだ。しかし、グリアルーレイ 精霊王はディディアスの中におり、神はフラフラと人間に関与している。そんな違いではないかとフレルは思ったが、もちろん言わなかった。

『ああ、あと——』

「はい」

精霊王も、人と変わらぬところがあるのかと思っていたところに言葉をかけられ、気持ちを正して向きなおした。

『縁^{レシユ}を結びし者を、夜、ここに呼べ。以上だ、仕事に戻るが良い、神子』

「……分かりました。このことはお兄様には……」

『言わぬ』

その言葉を聞くとフレルは、一礼をして部屋から出て行った。口角を上げたまま。

部屋に一人になった精霊王は呟く。

『人間とは面倒くさいのう。だが、面白い』

クツクツと笑いながら、邪悪な笑みを浮かべた。

『我と友を苦しめ、我を閉じ込めようとした愚か者を、どうしてくれようか』

次期王につく者（後書き）

一回書いたのに、すべて消えてしまったために書き直したため、
安和としてはこれでいいのかすら分からなくなってきました。

でも、何とか納得のいくものが出来たかなあ？と思っております。

密会

夜。ディディアスを身の内で眠らせておきながら、ゼノウイス精霊王は待っていた。

そしてコンコンツとノックがされた後、返事を待たずに一人の女が入ってきた。

『そなたはまだ、これに教えておらぬのか』

精霊王の言葉に女——レーシュ——は、悲しげに笑った。

「ディーはまだ、完全に思い出したわけではないでしょうから」

ディディアスをディーと呼んだレーシュは、どこか遠くを見ているようだった。

『そなたは、我が友を好いてはいないのか？』

「分かりません。あの頃はただ、あの方と笑っていたかっただけなのです」

本当は、答えは出ているであろうに、はぐらかすようなその言葉に、精霊王は何も言わなかった。

それをわざと、話を逸らす為に、本題を言った。

『我を閉じ込め、記憶を奪ったものは、誰だかわかったか？』

「はい、——ですわ」

その言葉を聞いた精霊王は、目を見開いた。

『気に入らぬとは思っていたが、まさかな。我が友は、悲しむであらう』

「ええ。ですから言いません。それに、良くない未来を見たのです」

予知——。それは、選ばれたものに与えられし能力。

神ではなく、選ばれた人でなければ継承できない能力。

言わないといったことに疑問を覚えながらも、考えを持って言うて

いるレーシュをさえぎらずに、精霊王は次の言葉を待った。

「私は、その未来を回避するために接触すべき人物と接触をはかり、方法を教えられました」

『それは、何だ』

レーシュは笑いながら、あくまでも笑いながら言った。

「私は、ディーから離れます」

『なっ。そなたは何を言っておるっ』

怒る事はあっても焦る事はなかった精霊王をみて、レーシュは笑みを深くした。

「別に今すぐではありませんから、落ち着いて、ゼノ」

『それで、それを我に言ったという事は、何か協力して欲しいのだからっ？』

「ええ。正確な時期はわかりませんが、私がいなくなった後、【サクリガーテ・ミステイ・グラウディア】という者が現れるはずですから彼の側近としていられるように取り計らってください」

『我に、出来る限りの事はしよう。しかし――』

ゼノが何を言おうとしたのか気付いたレーシュは、少し意地悪な顔になり

「ありがとう、ゼノ。私の復讐は、その人の発案だから。そこからよ」

ずいぶん物騒な事を言ったが、ゼノは安心した。
アノ者は、やり返さなければ懲りないと知っているからだ。

ほっとしてから、訊いてしまった。後悔する事になるとも知らずに。

『その良くない未来とは何だ？ 回避を失敗するとそなたはどうなるのだ？』

その質問を受けたレーシュは、やはり微笑んだまま。他人事のよう
に言った。

「わたし、レーシュは、この世から消えますの」

ゼノは聞き間違いがないか、いい間違いではないかとレーシュを
見ていたが、彼女は微笑んだままだった。

『そ、それは――』

「【死】という事でしょうね？」

やはり彼女は、笑っていた。

密会（後書き）

うーん。レーシュも謎めいた人なのに、新しい謎の人がでてきたなあ……。アノ人が活躍するのはだいぶ後です。

更新は、また止まるかもしれません。

来週、テストなので。

動き出した、闇（前書き）

まだ、ディディアスは眠ったまま。と言っか、レーシュとゼノが密会しているのと同時刻。

動き出した、闇

闇が深まった夜、薄暗い中、そこに居た人々はこそそと動き回っていた。

まるで、見つからないように、している様に。

「何ですって？」

そこにいる、リーダーとも思わしき女がそんな声を上げた。女は不快感を隠そうとせず、眉間にしわを寄せ、怒りをまとわせている。

落ち着いた声だったようにも聞こえなくはない、少しあせったような声。長い間一緒に居るこの男にしか、分からなかったであろう。この男は、その怒りに若干押されながらも、もう一度、同じことを女——主——に伝えた。

「はっ。現皇太子緑恵アベムの王様の身に宿りし精霊王が、目覚めたそうです」

それを聞いた女は忌々しそうに、ここから少し離れたところにある王宮を睨み付けた。

男は微動だにせず、女の発言を待つ。今何か言葉を発したら、不本意なことになりかねないことを男は知っている。

「忌々しい。せっかく金と魔力をかけて封じましたのに、でて来るなんて……。人を大切になさる緑神様、慈愛アフレの神様と違い、馴れ合わないアレはあの方以外に真名を教えてないと思っていきましたのに

そう悔しそうに唇がかみ締めた。少し血がにじんでいる。かんでいた唇を離すと、ギリツと齒軋りをした。今の顔は般若のようだと云ってもさしあたりは無いだろう。それほどまでに、女は怒っていた。

その怒りの矛先は――

「おのれ銀シルデイの神子姫っ。どうして真名など知っていたっ。どうして真名を呼ぶのが許されているっ。精神干涉など、出来るものなど国に3人も居ないと言うのにつ。あの方が、私わたくしのものになったかもしれないのにつ!!」

「落ち着いてください。我が主。術が消えてしまっただけで、我らはまだ失敗をしております。早急に次の手を考えなければ」

冷静に返された女は深呼吸をして、先程よりは幾分は落ち着きを取り戻した。

しかし、まだ目に鋭さを保ったまま男に言う。

「また、同じ手をやらなければ……………」

「今回の術がかけられたという事は、おそらく露見しているでしょう。ですから……」

「もういいわつ。私が自分の手であの方を私わたくしに向かせます。必ずや女王の座を……」

「では、僭越ながらわたくしめがお手伝いを」

男が意地の悪い顔をしたのを、女は見逃さなかった。女と男の付き合いは後数年もすれば10年になる。お互いに、お互いのことをよく理解していた。

「何をするの？」

「殿下の周りを調べている際に、分かったことがあります。殿下は幼少期に城を抜け出し、女——といっても当時は少女ですが、会っていたようです」

「何ですってっ？ 私わたくしはそんなことは存じていませんわっ」

「殿下の幼少のころに居り、今は隠居しているものに金を持たせ言わせたことから間違いないかと。名は、“レーシュ”。自分しか知らないのだと豪語していましたが、言ってしまったては意味が無いでしょうに……」

クツクツと馬鹿にしたように男は笑った。「殿下もおかわいそう

に」と男は続けたが、顔は笑ったままだ。悪いとは思っていないだろう。馬鹿にしたような言葉は不敬罪にあたるが、ここに咎める人は存在しない。そのまま男は続けた。

「きっと殿下のお心にはその女性が居るのでしょう。今でも。ですから、私がその邪魔者を――」

「消すのね？　邪魔者と言えば、フ…銀の神子姫シルディも邪魔ね」

女は物騒な言葉をいい、男はその言葉にうなずいた。軽い話をしているが銀の神子姫シルディは王族であり、その者を殺すなど反逆罪へとなりうることだ。しかし、そんな計画をとめることができるのも、また居なかった。

「【レーシュ】の行方は、殿下にも分からないようですから、先に神子様シルディでも狙いますよ」

「ふっ……分かったわ。貴方も見た目に反してやることがえげないわ。前の暴動も弟を狙ったんでしょう？」

「お褒め頂光荣です」

「褒めてなどいません」

楽しげに言った男を、女は呆れたように言い返す。しかし男はご機嫌な顔から、少し残念そうな顔になった。

「しかしアレは偶然でしたよ？ それと逃げられてしまいましたので、結局は殺れてないんですよえ」

「口を慎みなさい」

「失礼しました」

やはり男は、悪いとは思っていないようだ。

「きつと精霊王の前に、そばに居る侍従、今はコーラス・レイでしたか？ 彼が邪魔をするでしょう。たとえ兄弟であつても容赦してはなりませんよ。リヴェムンド伯爵。いや、我が僕ロウ」

男は、コーラス・レイの兄であるロウ。本名ロークウェル・リヴェムンド伯爵はニタリと笑った。

「はい、我が主。必ずや、ご期待にこたえて見せましょう」

男はそう言うと、姿を消した。その数分後にはその場には誰も居なかった。

動き出した、闇（後書き）

望んだものはあなただけ

それ以外は何も望まない。

お互いに何か理由があつて、協力しているようです。

神子姫の決意（前書き）

ディディアスはまだ出てきません。

最近影薄くなり、主人公。

神子姫の決意

城の敷地内にある、城から少し離れたところにある灰色の塔。

それは、王が強すぎる力を持った王女を外から守るためのものだった——そう、表向きは。

実際は、王位を脅かしかねない力と、自分の息子である皇太子の愛情を一身に受けてきた為の次期王国に対する影響力を恐れたため。そして、サラが彼女を疎んだために造られた塔だった。

そう、ここは監獄。彼女は常に監視され、囚われ続けていた。王宮に娘として来て、二年も経たずに。

それだけでは兄の愛情は変わることなく、兄はずっとここに来てくれた。父である王と違って。

その住人の銀の神子姫^{シルディ}であるフレルは今までのことを思い出し、これからのことを考えていた。

そこからある机から取り出したのは、一枚の手紙。封筒の裏には差出人の名が入っていない。

そしてフレルはもう一度その封筒をあけ、手紙を開いた。

そこに書かれていた手紙の内容、その一番下には今度は名があった。

【サクリガーデ・グラウディア】と。

この手紙は、レーシュが言っていた連絡だった。

フレルは手紙を見て、誰もいない部屋の中扉をひそめた。

「あなたがこの方法を送りつけるといふ事は、あなたもこの方法を選んだことになりますね」

悲しげにそう呟いた。

フレルが思い出すのは、兄の優しさ、笑顔。

王に疎まれた自分を差別することなく接してくれた、唯一の人。

弟は、ただ力がある自分を利用したいだけ。　ウイルとは、兄関係の話以外に話題なんて無かったから。

「きっと私がこの方法を選んだら、貴方は悲しむでしょう。こんな選択をした私を、憎むかもしれませんね」

優しい優しい兄上様。　私がここに居るのは、生きていられるのは、貴方のおかげです。　だけど、私はこれをしなければならぬ。　全ての原因は私にあるのだから。

たとえ貴方が悲しんだとしても、私にはこれしか方法はないの。

貴方には、生きててもらいたい。　幸せになってほしい。　これが、私の出来る恩返し。

そして、絶対貴方を守ってみせる。

「……………これでいいのよね？　サク……………」

小さく小さく呟かれたその声に、こたえるものは居ない。

「守ってあげてくださいね。ゼノ、グリア」

その声に反応するように、木々が揺れた。

フレルは塔にある、小さな窓から空を見上げた。あるのは綺麗な星と大きな月と小さな月の親子のような月だけだった。

翌日、騎士の所在を調べようとしたところ、門の方が騒がしくなった。城よりも塔のほうが近いのだ。

「何事ですか？」

この国を補佐するのも私の役目。

そこに居たのは、ここでは珍しい黒目黒髪の少女。実際はこの国の成人である16歳を超えているらしいが、そうも見えない風貌の持ち主。

「銀^{シルディ}の巫女姫様っ!!」

門兵に抑えられながらも、彼女はそう叫んだ。

「放してあげてください。彼女は、私と皇太子の友人です」

門兵は不審に思いながらも、彼女を解放した。

彼女は駆け寄って、泣きそうな顔でフレルを見つめた。

「コウはっ！！……無事なんですかっ」

「昨日の昼、確認されたわ」

安心させる為に優しく言ったが、彼女の顔は青いままだった。

「昨日の夜から連絡がつかないんですっ」

そう言った彼女の言葉を一瞬で理解する。

彼女とコウには不可視の絆——縁——が結ばれている。

彼女の名はミレイ・リヴェムンド。彼が今名乗っている家名は、彼女からとったと思われるほど、愛妻家な彼の本名はコーディアス・リヴェムンド。

この二人には、いや、彼女には不思議な力がある。大事な相手との思念通話が常に可能という。

その理由として、お兄様は異世界人だからと、笑顔で言った。ミレイのあちらでの名はミレイ・サイキだそう。いつたい何時お兄様が異世界への扉を開いたのか分からない。でも、そのときのお兄様の笑顔が、嬉しそうで、それでいて哀しそうで、羨望が入っている気がした。

そのころのお兄様の記憶は封じられていたはずだから、無意識だったのだと思うのだけれど。

昨日、ゼノはグリアから連絡があったと言った。でも、それが嘘だったら？　しかし友を第一に考えているあの方がそんなことをするはずが無い。やはり昨日何かあったのでは？！

私が、手紙の通りに行動したときに、支えるのはコウ様しか出来ない。お兄様が狂ってしまったように支える相手は、私ではなくあの人なの。

フレルは冷静に、門兵に指示を出す。実際は焦っているのだが、それはおくびも出さずに。

「この御方をを縁恵^{アヘム}の王様の元へ、私は陛下に謁見を申し込んできます」

「フイー様っ?!」

私のことをフィーと読んでくれるレイに、大丈夫だと微笑みながら、私は城内に向かって歩き出した。

私を疎んで閉じ込めた、私を化け物と罵った男の元に向かって。

神子姫の決意（後書き）

ディディアスは次回登場。

王様は国民にはあまり好かれていません。

理由：今何もしてないから。 早く隠居しろよと思っている人がいるとかいないとか

召喚・・・？（前書き）

やっと、主人公のターン

召喚・・・？

陽が目にしみて、ディディアスは目蓋を開けた。

——あれ、俺、どうしたんだろう……

昨日、コウが行方不明になって、なっ……て、で？！

どうなったんだっ！！

ガバツと起き上がると、眩暈がした。頭を抑えてじっとしていると、身なかから返答があった。

——あの男ならば、無事だといっているだろう覚えておけ、アホめが。

いや、寝ているときに言われてもね……。それにゼノがでてきたときには、無理に起こした力の副作用で意識が沈んでいたから、さらに無理な話だよ。

そんなディディアスの正当な言い分はもちろん無視された。完全なスルーである。

——アレが、伝えてきたと言っただろう？

アレ？ あ、グリアのことか、相変わらず仲悪いんだな、お前ら。

——アレは、あやつが——

口論？ をしているとドアが控えめに叩かれ、返事を待たずに人が転がり込んできた。侍女や部屋の前にいる騎士が何かを言っているが、当の本人はまるで無視。そんなこと出来るのはこの世で一人だろう。旦那の方は分からないが。

「殿下。実、は——。し、失礼しましたっ——！」

今の俺の状態に気づいたらしく、慌てて外に出ようとした瞬間ドレスの裾を踏んでこけた。頭から。

周りの人間は何か起きたのか理解できず、ポカンとしている。だからあれほど慌てるなど言っているのに。そのうちお前の旦那に軟禁されても俺は知らんぞ。

「取りあえず、そのまま良いから落ち着いて、はつきりとゆっくりと話せ」

「コウと昨夜から連絡がつかないのですっ。そしてフ——」

連絡が、つかない？ グリアが嘘をつくわけが無い。何があったっ——！俺が身なかにいる間につ。

ごちゃごちゃと考えていたため、部屋に入ってきた人物に気がつかなかった。レイが切った言葉にも。

「こんな朝早くから、失礼します。殿下」

「っ……。ロウ、か」

一瞬ヤツに見間違えた。この兄弟は見た目がそっくりだ。しかし
雰囲気が違う。ロウの方が雰囲気は冷たく、コウは暖かい。まるで
太陽と月みたいな兄弟だ。

しかしこれはディディアスの視点であって、実際に国民からは緑
アベム
シルデイ
恵の王と銀の神子姫が見た目と雰囲気が相まって、そう呼ばれてい
ることをディディアスは知らない。

ロウが入ってきたときにレイがビクツと体を震わせたが、ロウは
それを一瞥しただけだった。

「愚弟が、見つからないそうですね？ 銀の神子姫様のお力を頼つ
シルデイ
た方がよろしいのでは？」

「なっ！ それを行うのにフィー様がどれだけの力が必要か存じて
言っているのですかっ！！」

「黙ってください。たとえ異世界人で愚弟の嫁だとしても、これは
王宮内の話です。貴女は部外者だ」

レイは、唇を噛んで黙った。
夫を探すことも出来ず、友の負担になることをとめることのできな
いわが身を悔いているのだろう。

そんなことはさせない、とディディアスは思った。

コウも大事だが、フレルも同じぐらい大事な人だからだ。

「ロウ、それは――」

「貴方も部外者でしょう？ リヴェムンド伯爵。これは、我ら王族の決め事。一伯爵である貴方に言われる筋合いはありませんわ」

そう言って部屋に入ってきたのは、さっきの話に出てきたフレルだった。しかし瞳が曇っていて、感情を読み取ることが出来ない。

無言の圧力でロウを追い出し、部屋には俺とレイだけが残された。

邪魔しないでください。とフレルは前置きをしてから、詠唱を始めた。

『光よ、望みの為にそれを照らせ』

風よ、木々を沈黙させそれを捕らえよ』

フレルが行っている詠唱は、信頼の置ける騎士を強制的に呼び戻す召還魔法。ただし、体に大きな負担がかかるため、緊急時にしか使わない。銀の神子姫はお互いに知っていれば召還は可能である。そして、彼女は他人が使うよりも負担が少ない。それがロウが推奨した理由である。

しかし、負担がまったく無いわけではない、他より少ないという

だけなのである。

フレルの目には、光が灯ってなかった。それがディディアスを不安にさせた。

それに気づいたレイが、声を上げた。

「先程、王に謁見を申し込むと。きっとそこで――」

謁見だとっ！！ フレルを化け物と言い塔に閉じ込め、視界に入れる度に侮蔑の目を向けていた相手につ？！
バツと見たときには詠唱は最終だった。

『我、神子の名の下に許可する』

全ての生命よ、我と同化し、手足となれ』

閉じていた目を開けて、フレルは最後に一言

『召還』

膨大な風が部屋に発生し、その下に発生した召還陣が光った。
げほげほと咳をする男の声が聞こえる。風がやみ、そこにいたのは

「げほっ、アレ？ 殿下、銀の神子姫様？ あ、ミレイがいる」
シルディ

間拔けな声を出したコウと、そのコウに抱かれた黒髪の少女だった。

召還したフレルも、不思議そうな顔をしている。ミレイなんかは現実が受け入れられないといったように。

どうやら召還だけでなく、召喚も起きていたらしい。

現実を受け入れにくい3人と、間抜け面の騎士、その腕に抱かれて眠っている少女というなんとも奇妙な光景だった。

レイが悲鳴を上げるまであと、3秒

召喚・・・？（後書き）

召還と呼び戻すこと、召喚と呼び出すこと。

彼女はいつたい誰？

少女、王道とはいかに（前書き）

暴走してるとか言わないで……

少女、王道とはいかに

力を使つて体力を消耗したフレルはふらつき倒れそうになった。それを見たディディアスは、慌てて駆け寄つて支えた。

何故だか不安になつて抱きしめようとしたのを、何とか堪えた。それはあまりにも、無意識な、しかし意識された故の行動だった。

しかしそれに気づけるほど彼を見ているものも、冷静なものもここにはいなかった。

黙っていたミレイが、何かを言うために口を開いた。

それに気づいたフレルは、ディディアスに言おうとするがそんな体力も残っていないので被害を受けた。

「い、いやああああああっつー!!」

レイの悲鳴は、部屋に響いた。神子の言葉を聴いた風の精霊王が周囲の風をいじつたお陰で城には響かなかったが、優先順位を城に固定したために部屋では意味を成さなかった。

ビリビリと部屋が揺れ、レイの封印が開放されかけ、コウにいたつては顔面蒼白である。少しの事でも動じない男が、悪く言えば人を殺しても平然と立っていられるような男が、たった一人の娘によつて恐怖を映さない顔が引きつっているのである。

たとえ鈍いディディアスであっても、この状況は良くないことは分かる。フレルも微小ながら苦笑していた。ディディアスは、もう

笑うことしか出来ない。

女性は怒らずと怖い。初めて彼ら夫婦の喧嘩を見たときに思ったことである。ディディアスにとつて女とは娼館にいる娼婦だけで、ただの性的衝動を鎮めるだけの道具に過ぎない。

もつとも、次期王妃や国母の地位を狙う女たちもいたがことごとく排除されていたためにディディアスは知らない。それを決行していたのがお兄様^{ブラコン}至上主義によることだと言うことも。彼の知っている女性の中で、彼の腕にいる女性がもつとも恐ろしいことも。

「う、浮気だああああ」

「まっ、待てミレイっ。これには理由がっ」

「いいもんっ。荷物もってルーの所に行ってやるっ。コウはついでこないでねっ」

コウはガンツと口を引きつらせて固まった。ミレイが言うルーとはひいきにしている商家の青年の名である。彼女曰く“友達”らしいが、相手がどう思っているかは不明。それを見たコウが1週間自分の妻を外出禁止という名の軟禁をしたのは、王宮内では有名な話である。コウが常に目を光らせているので、ミレイに手を出すやつはいないが、コウの目を盗んで声をかけたヤツは微笑んだコウに連れて行かれ、その後その男を見たやつはいないと言う。レイが間に入ったときは、後日姿は見られたが性格が180度変わっていたらしい。

ミレイを狙う男、また王宮内で“リヴェムンド^{コウ}侍従長の奥方様に

は手を出すべからず”というのが回ったらしい。皆、命が惜しかった。

「話を聞けっ。これには理由があるんだ」

「女の人をこれって言っちゃ駄目なんだよコウちゃんっ」

「何で、昔の呼び名に戻すっ。じゃなくてな!!」

よく分からない言い合いをしている二人を、王族二人は生暖かい目で見つめていた。フレルに至っては敬愛する兄に触れてもらえないに至福を感じていたために、感謝の念があつたのかもしれない。
グリアルレーイ
緑神が囁いたのを感じて、ディディアスはコウの腕の中の少女を見た。瞼がふるふると動いている。

「起きるぞ」

そう言葉を発すると、二人は話すのを止め、少女を見た。

その少女はゆつくりと目を開くと、最初に視線の先にいたディディアスを見た。少女は理解出来ていないというように、目をぱちぱちしていた。いささか瞬きの回数が多い気がするが。

「大丈夫？ 貴女を抱いている男は変態だから離れたほうが良いわ」

「おいっ!!」

「別に間違っていないでしょう？」

レイは困惑しているであろう少女に声をかけ、変態と言われたコウは抗議の声を上げたが、笑顔で言い返された。

レイは順番にディディアス達を紹介した。それに続き本人たちが、言葉をかける。最後にディディアスを紹介したときに、少女は初めて声を発した。

「王子様……………？」

「そうよ。見た目も申し分ないけど、この国の皇太子であられる方よ」

「カッコいい!!」

少女の声に、その場にいたものは驚いた。声に出した言葉の中で一番ハキハキとしていた。そして、目がキラキラと輝いている。

「これぞ正に王道ファンタジー!!　王子様と結ばれる取り柄の無い娘っ!!　くう~~~~」

「婦女子ならぬ腐女子…………？」

「私は腐ってなんか無いわ。ただ、小説が好きな色々なシチュエー

シヨンに萌える乙女よつ。王子様つ。これは正に王道！！ 誰もが夢見るシチュ！！」

「……………（それを腐女子と言うのではないのでしょうか）」

異世界の二人以外に理解できない単語を使いまくる黒髪の少女二人。一人は呆れ、一人は興奮している。いや、暴走、が正しいのかもしれない。こちらの世界の二人が啞然としている。コウは変態発言が効いたのかうつろな目をしている。帰って来い。

「オウドウ？」

二回出てきたこの単語をとりあえずディディアスは口に出した。口に出しても分かるものではない。

やっとこちらの世界に戻ってきたコウは、異世界に行った際に学んだのか心当たりがあるようで、虚空を見つめて笑っていた。

その言葉に反応した少女はディディアスを見て笑った。何かを含んだように。

ディディアスは命ではないが、何かの危険を感じた。彼女は色々想像（妄想？）しているのであろう。彼が彼女の中で遊ばれているのであろう。さもあらなん。

フレル首をかしげてたが、何か不穏な空気を感じたのか睨むように少女を見ていた。

この少女は、王宮に嵐を巻き起こす。

そして忘れられていた、故意に自覚しないようにしてきた恋心にも嵐を起こす。

そして、時代は動き出す。国の行き末を決める選択は、ここから始まる。

少女、王道とはいかに（後書き）

この腐女子の観念については安和は良く分かっておりません。細かい突っ込みは無用ですぞつ。

暖かく見守ってください。

彼女は濃い……。個性的な人ですね。書いといてなんですが。

誘惑・嫉妬（前書き）

嫉妬を表現できたかは、ノーコメントです。

誘惑・嫉妬

翌日から、黒髪の少女の攻撃は始まった。
物理的意味ではなく、精神的意味だったが……

「王子様っ。わたし木之下瑠音きのした りゅおんと申しますっ。見た目は日本人ですが生まれはアメリカ。おそらくここでは、リュオン・キノシタとなると思います。よろしく願います」

名前以外は、太陽系第三惑星たけいせいの世界の事を知らなければ名前以外よく分からないものであったが、興奮状態にある少女は気がついていない。

蒸気に当てられたように頬を赤く染めた少女リュオンは、宣言する。ミレイが思った通りの事を。この夫婦が予想した事を。

「わたし、貴方ディディアスを誘惑して、幸せになりますっ。覚悟してくださいっ……」

普通は本人に向かって言わないだろう、とか思っている言われた当人とその妹、その親友夫婦以外にその場に運悪く尋ねてきてしまった侍女は後にこう言った。

——タカが獲物を狩るような目をしていたと

この世界のタカは全長2メートルから3メートル弱もある大型の

野生生物である。知能が高く、国家に祭り上げている国もあることから、人に危害を加える【魔物】とは言われていない。この城にはいないが、相棒としてその背に乗って旅をしているものがいるらしい。主に商人で。

その食事風景は、そうとうなもので、好物を見つけた際の顔（…顔？）が目の奥が鋭く、そしてキラキラと光り、くちばしからは涎をたらしていたそうだ。

まさしくそんな顔を（さすがに涎はたらしてないが）していた、リユオンは侍女達の中で恐怖の代名詞になったらしい。

そして現在。

「殿下？ ご機嫌麗しゅう。いつもお忙しいのですね？ 私に伝える事があるのならそういつてください」

「あ、いや、とりあえず腕を……」

「嫌ですわ殿下、私の好意を否定しますの？ ……悲しいですわ」

「いや、そういう意味ではなく——」

「そうですね？ 殿下は見ず知らずの私の好意も受けとって下さるのですね？ 優しいのですね。私は感激です」

「……………」

「うふっ、素敵ですわ。殿下」

そんなやり取りが、ディディアスの執務室で行われていた。

ほんとのことを言うと邪魔。この一言に過ぎるが、彼女は国にも兄妹にも迷惑は掛けていないので、邪険に出来ない。そんなことを思っているのがディディアスだけという事を本人は気がついていない。あくまでもこの人は他人主義であり自分の事は一番最後に考えるのである。

——好意というより、厚意のほうがいいな。ま、別に仕事が出来ないわけじゃないし。

無視という手段に出たディディアスは、ある意味一番ひどいのかもしれない。

ミレイからお仕置きをされたコウは、ただ可哀想にその光景を見つめているだけである。彼は最愛の妻から言われた『瑠音ちゃんにかかわらないで下さいね』と笑顔——目は笑っていない——でと言われたため何もいえないのである。

しかしそこに天の助けがやってきた。

「リュオンっ。お兄様のお仕事の邪魔はいけませんわっ。お兄様から離れなさいっ」

痺れを切らして入ってきたフレルだった。その美しい顔にはしわがよっている。

ディディアスは人知れずにほっとした顔をした。ほんの一瞬だった

ために、誰もわからなかった。

た、たすかった……

そうディディアスが思うのも仕方のないことだと思われる。

そう言ったフレルに何を言われているかわからないと言ったようにリユオンは返した。

「別に殿下は邪魔なんて仰っておりませんわ。殿下なのだからそこははっきりとお言いになるでしょう？ たえ邪魔に思われていたとしても、何も仰らないという事はそこまで邪魔と思われていないのではなくて？」

前半はサラと同じような言いようだったが、【殿下】という彼の立場を理由として正論をたててきた。彼女の言う姿は《正論》なのだろう。本来ならば。

この国は穏やかである。国自体も、国民も、王族も。危機に関しては、他の国には出来ない素晴らしい能力、才能を発揮するが、もともとは争いを好まない性質だ。それ故に、少しの争いごとを起こさない様にしてしまう。その国民性が色濃く出たのがディディアスである。そのため、その《正論》がこの方に正しくないという事は国民全員が知っていることである。

最近、兄の近辺で騒がしくなったため取り繕う事が出来なくなってきたフレルは冷たい視線を浴びせながら、言った。

「それは貴女の世界では一般的なことなのかも知れません。しかし、ここはあなたの知ってる世界と、国と違うのです。その台詞は、この世界を理解し、特にこの国の、この国自体の性質を理解したうえで言っていたきたいですわ」

フレルのその言葉に、リュオンはグツと詰まった。言い返そうとしたそのときにフレルに言葉を被せられた。

「それに今貴女は国に保護された形です。それはこの国を何も知らぬ貴女を守るためです。だいぶ落ち着いてはきましたが、自分の事しか考えぬ下賤な輩は多いのです。ですので勝手に出歩かれては困ります。出かける、もしくは我々に用がある場合は侍女に言ってくださいませ。……迷惑ですわ」

鋭い殺気もどきを発しながら《迷惑》と言い切ったフレルに、リュオンは悔しげに唇をかみながら部屋を出て行った。走らずに歩いて出て行ったのは、何かしらのプライドがあつたのか分らない。しかし、その場にいた者の視線はすべてフレルに向けられていた。彼女が出会って数日のものに、このような態度をとるのは初めてだからである。それぞれが驚愕の視線を彼女に送っている。

それに気がついた彼女は、ハツとした顔をし、困った顔をディディアスに向けた。

「申し訳ありません、お兄様。わたし、我慢できなくて……。お兄様は何も仰られていないのに勝手な事を……」

「いいよ、フレル。むしろ助かった。言えなかったんだ。駄目だな俺」

「お兄様は駄目では――」

「ありがとうフレル。お前がいるから俺は皇太子でいられるんだ」

「もったいなきお言葉ですっ。お兄様」

ディディアスはしゃがんでいるフレルの頭をなでてやる。フレルは照れて赤くなりながらも、うれしそうに目を細めている。

はたから見ても、「お兄様」なんて言葉がなければ恋人同士に見える。それほどディディアスの目は慈愛に満ちていて、フレルの目は近親相姦でも起こりそうなほどディディアスしか目に入っていない。ディディアスが望めば、本当にそうなりそうで怖いというフレル付きの侍女の話を聞いていたコウは、二人に、

「あなた方は恋人同士みたいですね？」

爆弾を落とした。

その瞬間フレルは誰が見ても真っ赤に見えるほど顔を赤くさせ、ディディアスは不思議そうに首をかしげた。

「な、な、何でそうなるのですかっ！　わ、私が兄様とこ、こ、恋

人などと……」

「面白い事を言うな、コウ。確かにフレルは見た目が美人なのに可愛い性格をしているが」

「に、に、兄様っ!!」

「フツ、顔が真っ赤だぞフレル？」

「~~~~~」

顔を赤くさせて黙ったフレルの反して、ディディアスは楽しげだった。それは何年ぶりかに見る二人共の素の表情だった。コウはそれに驚きながらも、優しげに見守っていた。

その頃リユオンは部屋に戻っておらず、廊下で話を聞いていた。

「負けませんわよ~~~~」

その話を聞いて、余計に闘志を燃やしたのは言うまでもないが、次からは邪魔にならない程度に大胆な行動をとるようになったというのは、また別のお話。

誘惑・嫉妬（後書き）

何書こうとしたっけ……。あ、HPのほうに友からいただいたフレルの絵を公開しています。そちらもよろしくお願いします。

フレルの言う近辺は兄に直接かわるような事で、かわるうとした周辺はとくに追いやっていたから近辺なんです。

一応理由です。

侵攻してきた闇（前書き）

ちょっと長め

侵攻してきた闇

あれから、リュオンの攻撃回数は減ったものの、一回のダメージが大きくなってきた。

今日は仕事を終えて執務室を出た時に襲撃されたのだ。

心身共に疲れていたのにさらにダメージを負ったのだ。ため息もつきたくなる。

猪突猛進……………よく言えば真っ直ぐ。今までこんな女性と関わった事がないデイドィアスはうまくあしらう事が出来ず、妹に頼るしかないのだ。

しかし、腹黒い貴族、その子息、令嬢（フレル達の防御は完璧ではない）としか家族以外で話すことがなかったデイドィアスには新鮮だった。その自分に正直な真っ直ぐさが、思いのまま行動できる、自由さが。

そして羨ましかった。自由さえあれば彼女を探しに行けるのにと。しかし自由だったのならばあんな所行かないし、彼女にも出逢わなかっただろう。

そんな思い出に浸っていると

《今日も疲れたようだな。我が友よ》

当たり前だ。アレは俺の精神衛生上良いものではない。

《我は慌てているのを見るのは楽しかったがな？ 実は嬉しいのではないか？》

……ゼノ。それを俺以外に言ったその日には殺されるぞ、フレルに。

《我を害することが出来るのは我が友と我が同士だけ……》

違う。

《ん？》

殺されかけるのは俺だ。

《……否定は出来んな》

だろう？ そうなったら俺はきつと執務室しつむしやから出られなくなる。1
週間ぐらいの間、俺の寝食を共にする相手は大量の書類だ。

《……我は手伝えぬからな。気をつけるとしよう》

そうしてくれ。

最近のフレルは元来の性格が出ている気がする。リュオンが絡むと俺に遠慮が無くなる。いい事なんだが、外に向けられていたあの怒気を向けられると結構な被害だ。今まで受けたやつが普通ではなくなっただのが理解できる。いや、むしろよく耐えたといふべきか。怒ったフレルを見てクスクス笑えるコウは相当な精神力を持っていると思われる。奴の過去に比べれば、軽いだけなのかもしれないが。

デイディアスが風の精霊王と話し、考え込んでいる時に自身が展開した結界に何か反応したのを感じた。
ピリツとした何かを感じた瞬間

《頭上だっ。避けるっ》

サツと右に避けると床には炎を纏った短剣が刺さっていた。デイディアスは目に力を込め、視線をソレに移しただけで消した。

「誰だ」

いつもより低い声。デイディアスはいつもの気が抜けた雰囲気^{ヘタレな}を消し去っていた。これは本人も意識していない、デイディアス元来の性質。彼の守護者^{ゼノとグリア}、コウ、レーシュは少しだけだが、彼らしか知らない。デイディアスは自分の周りに被害をもたらしたものを容赦なく、かつ冷静に始末できることを。笑みを消したデイディアスは危険だということを。

「さすがですネ緑恵^{アベム}の王様。風の王がいることは知っていましたが、まさか水の加護まであるとは」

「何しに来た。ここがどこか分かっているのだろう」

陽気な、軽い物言いデナイフを送りつけた男が入ってきた。口は余裕の表れなのかペラペラと話しているが、全体的に隙が無い。

——プロだな

直感的にそう感じた。部屋の近くの護衛がやられるのはわかる。しかし、どうやってこの城を包むフレルの結界の中に入って来……、なっ……。

そう思った瞬間、弾かれる様に結界が消えた、すぐに持ち直したがそれは頼りなく弱い。

——あちらも襲撃されたか……持ち直したということは無事か

目を鋭くさせたディディアスに何を思ったのか、闇^{はんにん}の住人は笑みを深くさせた。

「妹が心配か？ 生きていたとしても玩具にされるとおも……」

「話すな。黙れ」

ディディアスは静かに相手の首に剣を近づけた。知らぬ間の抜刀、知らぬ間の接近。少し前まで30メートル離れていたのが一回の瞬きの間に3メートルまで近づいてきている。

男は何故こうなったのか分からない。しかしそれは彼の家族への侮蔑が地雷だった、男には分からなかった。男にはそういう感情は残っていなかったから。

男はこの仕事をする様になっ^{あんさつ}てから、初めての感覚に驚いた。いつも自分は武器を突きつけている側だった、命を握っている側だった。

た、それを楽しんでいる側だった。

しかし何だ、武器を突きつけられ、命を握られて、なのに目の前デイドの男は表情を変えない。普段の民の前に見せる顔ではない。これは、支配者の顔だ。次期王に必要な冷酷さ。

男は初めて恐怖を覚えた。そして同時に諦めを感じた。自分は逆らってはならないものに逆らったと。圧倒的な力の差に。

「光の裏には闇がある。美しいバラには棘がある。とは言ったが……」

男は小さく呟いた。あいにく小さすぎて聞く人は居ない。王ゼノの守護者グリアは聞いていたが。

男は小さく笑う。自分に商人と暗殺者うづがあるように、この御人にも優男おもてと残酷さがあるのだと。

「なにがおかしい」

ディディアスは顔を顰め、さらに剣を近づけた。

「いや。なんでもない。上には上がいると感じただけさ」

「そうか。……依頼主の名は？」

「いえねえな。まさか俺が失敗するなんてな」

「残念だ」

そう言ってディディアスはそのまま剣を横に動かした。ゴトリと落ちる音がして、目の前の男は生命を絶たれた。ディディアスはそれを一瞥すると、興味をなくしたように視線をそらした。

妹のところに急ごうと、普段使わない膨大な魔力を使って禁術に近しい扱いの転移を発動しようとしたときに、強い魔力を感じた。

サッと魔力壁を張ると、飛んできた直径50センチメートルの火の大玉（通常は10センチ程度）を弾いた。

「チッ……………」

ディディアスは小さく舌打ちをした。魔力反応に気をとられて、物理攻撃も防ぐ防御壁ではなく、魔力のみを弾く魔力壁を張ってしまったせいで、ナイフが腕に刺さってしまったのだ。

ディディアスはそれを見ると血が流れるのを厭わずにぞんざいに抜いた。そこまで重症ではなく利き腕ではなかったのでそのままにする。

「魔力を弾いてなかったことにするとは、さすがですね緑恵の王様」
アベム

侵攻してきた闇は、まだ止まらない。

闇に侵食されたように、空に浮かんでいた二つの月は雲に隠されて

見えなくなっていた。

侵攻してきた闇（後書き）

前話の比べると、ディディアスのキャラが違います。コウがい
おうとしてやめた部分の一端です。

たとえ頭が落ちていてもまだR15ではない、はず……。

誰か教えて……

疑念（前書き）

前話よりも長くなってしまいました。

次回はたぶん短くなるからねっ？ 切れなかったただけだからねっ？

疑念

ディディアスは血の付いた剣をもう一度構えて、入ってきた男たちを見つめた。

「お前の妹はもう終わ^{……}ったぜ。後はお前だ」

その言葉にディディアスは片方の眉をピクリと動かしたが、もう一度結界があることを確認し息をついた。彼らはきつと神子に【幻^ダ惑^{ジリフラ}の夢】を使われたのだろう。これは彼らの一番の望みが終わったように思わせる魔法だ。という事は、彼らの仕事は神子^{フレル}姫の暗殺。こいつは足止めだったか。

そこに転がっている人だったものを見てみると、風化して砂になり、どこかに流れていった。

「さすが、自然の全てを操る落ちこぼれだった王子様。こんなことも出来るんだ？」

入ってきた2人の男たちは馬鹿にしたようにディディアスを見たが、彼は眉ひとつ動かさない。

——そんなことで傷ついていた時期は済んだんだよ

荒くれだっているディディアスの本音に気づかずに男たちは続け

る。彼のリミッターが切れる地雷を押すことになるとも知らずに。

「銀の神子姫シルディもたいした事無かつたなあ」

「ああ、今の王もな。王が一番雑魚つて、この国も終わりだな」

「だよな？ こいつが一番反対してたが死んでるし。怒られねえよ」

「だな。さあ落ちこぼれの第一王子。楽しませてくれよ？」

王が、死んだ？

こいつらは、何を言った。死んだ？ 床に臥していると聞いていたが、先日俺の前に来たではないか。それが俺を試すようなことだったとしても。動いていたではないか、生きて……。

生きて……？ いや、おかしいと本能が告げている。何故だ？ この違和感が、違和感ではなくなった時は何時いつだ？

俺の知っている王は、父は、落ちこぼれだった時でも優しかった。どれだけ周りから落胆されても、卑下されても、出来損ないといわれても、励ましてくれていた。父は――

――ちちうえ、わたしはだめな子なのですか？

『いや、それは違うぞディディアス。お前は出来る子だ』

——だ、だけど、みんなが、僕はだめな子だって

『そんなことは気にするな。グラウディアだって言っていないだろう。あと、ディーその口調は二人のときだけだぞ？』

——だけど……しかしっ。みんなの言つとおりわたしには力が

……

『ふう。大丈夫だよ、ディディアス。なぜならお前は——』

お前は？ 父上はなんと仰っていたのだろう。そこだけ曖昧だ。

ただそれを俺に言つたときの父上の顔が羨ましそうに、誇らしそうだったことは覚えている。父上から頭を撫でて頂けた、最後の記憶。

まさか父上は誰かに操られて……？

そんな疑念が出てきたときに攻撃を仕掛けてきた相手を軽く流す。剣をただ淡々と受け流し、魔法を風で跳ね返す。ドアの外に来た援軍とおもわれる者は植物でくるんで捕らえた。

ディディアスは無意識に行動していた。父の仇、フレルを傷つけた敵、自分が始末すると。

無表情のまま、汗ひとつかかず、息も乱さず、ただ雑魚を相手にしているディディアスを見て、男たちは恐怖を感じた。

そして、その気持ちに支配された男たちは戦意をどんどんそがれ、不安をそのまま口にします。

「だ、誰だよつ、落ちこぼれだといったやつはっ」

「こんなに強いなんて、き、聞いてねえぞっ」

「じ、じゃあ、さっき言ってた王の言葉はっ……」

「王の、言葉？ 父上が何か仰ったのか？」

ディディアスが王という言葉に反応し、そう男たちに問いかけた。男たちは狼狽しながらも、恐怖にがちがちと歯を鳴らしながらも答える。

「さ、最初は、強がってて、俺たちに負けそうになったらい、命乞いしてきたんだ」

「で、俺たちは、“さすが落ちこぼれ王子の親だな”って言ったんだぞしたら、」

「『あの子は落ちこぼれではない、噂だけで判断する貴様らでは勝てん。私の息子を見くびるなよ。あの子は愛されているのだから』って言って、笑って死んだ。それまでの表情や行動が嘘のような言

葉だった」

ディディアスは、驚いて目を見開いた。それは先日あつた王ではなく、自分が良く知る、記憶に残っていた父の言葉遣いそのものだったから。優しい父の顔。変わってしまった^{なか}まで、この城で唯一表立って守ってくれた人。力がないと言われてから冷たくなった母に代わって、忙しい政務の中愛情を注いでくれた大事な親。あの人は、王である前に自分の親だった。日陽^{サンデイウ}と呼ばれるのは太陽^{サンシャル}の君と慕われた父の息子だから。そうだ、あの時は、

『お前は、生命^{いのち}を司る神に、精霊神とも呼ばれるあの方に愛されているのだから』

精霊神。精霊の力の下成り立っているこの世界での最高神。全てを統べる者。違う国では創造神とも呼ばれていると、笑いながら教えてくれた。ディディアスはそれを思い出して笑った。何の含みも無く、素で。ここから逃げようと、植物で抑えられて開かないドアをガチャガチャしていた男たちは変わった雰囲気を感じ、その目に映った次期王がやわらかく笑んでいるのを見て、その笑みに魅了されて動きを止めた。

「親愛なる父上の想いに、答えようじゃないか」

ディディアスはそう言っ
て風の力を纏わせた剣を振り上げた。男
たちは無意識にその裁きを受け入れようと目を閉じた。ディディア
スが剣を振り下ろそうとしたとき、男たちの後ろにあったドアが何
かの力を含んだ足によって蹴破られた。その扉からフレルが飛び
込んできて

「かの者を捕らえよつ、
【ライトチェーン光の鎖】」

フレルから放たれた光の鎖が男たちを捕らえ纏めた。ディディア
スは無表情に戻ると、フレルを見た。剣を持ち上げたまま。その目
は、何故と訴えている。

「お兄様、まだこの者達の首謀者を突き止めなければなりません。
それに、その者が王を操っていた者かも知れないでしょう？」

それを聞いたディディアスは力をといて剣を仕舞った。一度目を
閉じると困ったように微笑んだ。

ディディアスがいつもの表情に戻ったのを見て、フレルも微笑んだ。
ドアを蹴破ったコウも安心して息を吐いた。

「私は大丈夫です。お兄様もご無事で何よりです。……お怪我はあ
りませんか？」

それを聞いたのか、廊下にいたらしいサラも飛び込んできた。

「そうですわっ。お兄様なんともありませんか!」

それを見てディディアスは笑った。弟もそれに続いて走って入ってきたのをみてさらに笑った。

大事な父を失ったが、まだ自分には宝物きんぶつだいがあると安心して。

「大丈夫だよ。……………ありがとう」

その言葉を聴いた兄妹はディディアスにくっついて泣いた。よほど心配したらしい。

そんな暖かい光景を、他の人とは違う目で見ている男がいた。

「さすがですね。このままではきっと私だと露見してしまうでしょう。あいつらはともかく精霊の眷属に調べられれば分かっていますからね」

それを逃げ切れると信じてくださっている我が主のためにも逃げ切りたいですね。と男は小さく笑った。

「それにしても、この光景は私から見ても白々しく感じますよ。我が主。周りは皇太子の無事が嬉しくて、気が付けませんけどね」

そう呟いた男は、周りで王族の兄妹の無事を喜んでいる使用人達の間をぬって出て行った。

それをコウが横目でずっと見ていたことに気づかずに。

先程の襲撃者との会話で気づいた違和感を、疑念を、それを知らないはずのフレルが王は操られていたと前から知っていたように言ったことの不自然さに、ディディアスはこの時気が付かなかった。

そのディディアスは、ナイフの傷を兄妹に見つかり怒られていた。それ故に、すぐに気が付くことができなかった。

疑念（後書き）

怪しい感じがちらほら。

王は優しくったんです。でもディディアスは記憶を封じられていたから……。

そうでなければ、さすがに争いを好まない国民性だろうが反乱起きますよねえ。

ある孤児院のお話・前編（前書き）

襲撃前のお話。 デイ・ディアス達は出てきませんが、今後のお話
に必要なお話です。

ある孤児院のお話・前編

「では、本日からこの子をお頼み願いますか？」

「はい。貴女様にはお世話になっております。この子は責任もって大事に育てますので」

外で遊んでいると、園長先生と綺麗なお姉さん——銀の神子姫シルディ様の声が聞こえた。

「特別扱いしないでください。……と、言いたいところですが、あの子は当然あの部屋から出て来れないでしょうから」

「まだ、安定しない？」

「ここで何か見つければ、あるいは……」

その後の二人のお話しは聞こえなかった。銀の神子姫様は少し寂しそうな顔をしながら、馬車に乗って帰って行かれた。

「園長先生おはあちゃん、神子様どうしたの？」

「新しい子連れて来られたんだ。魔力の強い子を」

その言葉にビクツとした。ここは孤児院である。ここに来ると

いう事は、その子は……………

「森に捨てられていたんだそうだ。この歳になるまで一人で生きてきたらしい」

「その子は？」

「魔力の制御をするために部屋にいるよ。あまり出てこないだろうけれどお前と同じ12歳だ。仲良くするんだよ」

そう言っおほおほやんて園長先生はご飯を作りおほおほやんに食堂に行ってしまった。

ここはレイサラス国の王都にある孤児院の一つ。メグラナ孤児院と呼ばれている。ここは生まれつき魔力を持った子や強いために捨てられたと思われる孤児が集まる場所。銀シルデイの神子姫様が魔力を持った私たちを守るために一番気にかけてくださっている孤児院。その身に持った魔力を利用されないように。

成人前の身寄りのない子供は孤児院に預けられる。この国の成人は16歳。神子様は誕生祭を3ヵ月後に控えてはいるが、まだ15歳だ。成人していないのにしっかりしている。これが王族との差なのか、選ばれた人みじゆんとの差なのか。

結局その日、そういう子が来たと伝えられただけで、その子は私たちの前に現れなかった。

それから1週間、そのことも会わずに私は幼いこの世話をして過ごした。

ある日の夜、眠れないと言う子をやっと寝かしつけていたら深夜になつてしまつていた。布団は一人一つになつており、場所はその部屋に人数分しかないので自分の部屋に帰らなければならなかった。真つ暗な廊下を帰らなければならぬかと思うと、ちよつと怖かつた。

そろり、そろりと音を立てないように、それでも動く最速の速さで廊下を動いていた。

コトンツとした音を聞いた瞬間指に発動していた光の魔法をその人に向かつて突きつけてしまった。この魔法には攻撃性はないが、真夜中に顔にギリギリまで突きつけられてしまったら目が痛いのは確実である。

人と認識した私はサツと距離を置いてすぐに謝つた。

「ごめんっつー！」

「……………べつに、いい」

少し間の空いた、感情のこもつてない声色で返された。高い女性のような声でもなく、低い男性のような声でもない。その間を取つたようなその人は、黒に近いような茶色の髪を持っていて、やはり中性的な顔立ちをしていた。しかし、長いまつげ、傷がついたことがないような綺麗な白い肌、すつとした鼻、目は髪で隠れていて見えなかったが、髪から少しだけ見える細そうな、鋭そうな感じを察する事が出来れば、冷たい印象を受けるような人だった。目が隠

れていても、近寄るなというようなオーラが出ているような気がする。しかし、確実に【美】がつく人だということは分かった。

惚けていた私に何を思ったのか、相手は

「……………私、話すの、苦手。気、悪くしたら……………ゴメン」

「あ、い、いやっ、そのせいじゃないの気にしないで、ははは……………」

トンチンカンな答えに焦りながらそう答えると、相手は首を傾げた。

「待つてっ」

そのまま、部屋に帰ろうとするその人を私は止めた。何故だかわからないけど、止めなきゃいけないと思った。見たことのない顔であったから、きつとこの人が園長先生おばあちゃんが言っていた、魔力の多い子なんだろう。

「私は、リーミア。みんなはリィ、またはリィリィって呼ぶわ。あなたは？」

「……………サクリガーテ……………。神子様、は、サクって、呼んでた……………」

ボソツとだけどちゃんと返答が来た。そして今まで髪に隠れていた瞳が見えた。薄い、薄い、紫。その瞳の色を持った人は、濃さはあっても私は一人しか知らないし、いないはずだった。だから神子様は、ここに連れてきたんだ。

私はにんまりして、サクリガーテに、サクに手を差し出した。サクは不思議そうにその手を見ている。

「お友達になりましたよ？ 私、あなたのこともっと知りたいわ」

「……お昼は出てこれない。夜か、手紙、なら」

「じゃあ、手紙を書くわ。先生に聞いてちゃんと部屋に届けるから、お返事頂戴ね？」

了解といったように頷いたサクを見て、そのまま帰っていた。それぞれの部屋に。

これが、私リイリイと生涯の親友になるサクとの出会いだった。

ある孤児院のお話・前編（後書き）

前回（っていつだ？）に出てきたサクリガーテが出てきました。

この人にも過去はありますが、大体で。ディディアスが主体です
から。

この後編との間に、複線話ではない、本編？ を挟みます。

更新は多分、来週あたりになると思いますが。

宿題なんて……

新しい王

父上が、この城が襲われて、2日がたった。城はやっと落ち着きを取り戻そうとしていた。

結局、真の依頼主が誰かは判らなかった。しかし、王がいない国は不安定になる。依頼主については国直属の隠密達に任せることにしたが、コウの表情が気になった。

「失礼します。そろそろお時間です」

侍女が着たのと同時にディディアスは立った。

一度目を閉じ、開いた。その瞳にはいつもの優しげな色はなかったが、襲撃された際の残忍な色もなかった。そこにあるのはただ、強い決意のみ。

一人でも賊を倒すことのできる強さ。揺るがない姿。揺るがない想い。全ては、国の為に自分にできる事をする。

そんなディディアスの姿に、城の者は心を打たれた。その真っ直ぐな信念。人を信じることのできる優しさ。それは城の中で育った者としては、あり得ないものだった。しかし、精霊に愛される強き心。妹弟による援護によって、今のディディアスはできている。

ディディアスはもちろんそれを知ってた。欲深い貴族から送られ

る欲深い女性から守られていると。そのためか自分に言い寄ってくる女性は自分ではなく、皇太子の妻を狙っていると思っている。しかし、次期王妃の座ではなくディディアスの妻になりたい、という女性は、王妃を狙っている女性よりは少なかったが、一般男性よりは数多くいた。

だが、そんな純粹に王に好意を寄せる女性もお兄様至上主義フロンによつて排除されていた。お前など認めるかつ！、と。そんな理不尽な理由で、出会いを奪われていたディディアスを想うと不憫だが、お兄様至上主義フロンが恐ろしくてディディアス本人に伝える事ができる強者はいなかった。……コウでさえも。

ディディアスの初恋が美化されるのも仕方ないと思われる。そう仕向けられたかもしれない。その心理は、その本人しかわからない。

尊敬となんとも言えない生暖かい視線を受けながら、ディディアスはそれに気が付かないまま、バルコニーに出た。

「城が襲撃されるという前代未聞の事件から2日。あなた方を大きな不安にさらしたと思う」

ディディアスが話始めた時、話をしている人はいなかった。ただ、ただ新しい、若い信頼できる王の言葉を聞いている。

「しかし、大きな混乱も無く、収束を迎えることが出来たのは、あ

なた方冷静な判断をしてくれたおかげだ。感謝する」

ディディアスはこの前置きを行ってから、本題を言う。

「そして、これからも私に協力して欲しい。一人一人にできる事が限られている。この国の為に一緒に頑張りましょう」

その言葉に、集まっていた国民はわああと盛り上がった。この国の国民性ならば、良い意味でとらえてくれる人が多いであろう。しかし、そんな良い人ばかりならば、襲撃は起こらないだろう。

「甘い王だな。だが、都合がいい」

そうやって笑う、貴族がいた。その貴族の周りにいる貴族である男達も、悪い笑みを浮かべながら頷いていた。

「貴方もそう思われますよね？ グラウディア公爵」

笑わずに、ただ見守っていた男に貴族の男は話しかけた。この話しかけた貴族の男は位の大きい貴族に馴れ馴れしく話しかけることも出来ない、ただの一侯爵である。しかし、悦に入っている侯爵には自分の無礼には気が付かなかった。

話しかけられた方の男、グラウディア公爵はその無礼に不快そうな顔をせず、人好きの良い笑みを浮かべながら答えた。

「私はまだ様子見ですね。いったい何を引き起こしてくださるのか」

「相変わらず慎重ですね。ではそう決めた際は、私に言い付けください。では、失礼」

侯爵は取り巻きを引き連れてどこかへ去っていった。国民はまだ熱気が収まらず、出て行く男達を気にする様子が無かった。

「……………これでよろしいのですよね？ 我が君」

公爵は城を見つめながら、呟いた。自然な笑顔だった。ただ、少し悲しげであったが。

「グラウディア公爵様、陛下がお呼びです」

知らぬ間に現れた騎士に是、と答え用意された馬車へと進んだ。乗る前に城を見上げて呟く

「上手くいけば良いが……………」

騎士はその言葉を聞く事は無く、公爵は馬車に乗り込んだ。

「上手くいっても、いなくても、いずれは……。これも運命、必然なのでしょうか……。……神子様」

悲痛な表情を浮かべ、そう呟いた公爵の表情と小さな声で言った悲痛の叫びを聞いた者は誰もいない。

新しい王（後書き）

次話は前話の続きです。

ちょっとお待ちを。

ある孤児院のお話・後編（前書き）

王就任後。時系列はあっています。

ある孤児院のお話・後編

あれから2年、サクとはその間ずっと文通をしていたが、ここ2ヶ月はお昼に外に出てくるようになった。

サクをはじめてみる子達は驚いたようだったが、私が普通に接しているのを見て、害が無いと思ったのか、サクと関わりはじめた。サクも満更でもなさそうで、最近言葉に詰まることはなくなってきたし、笑うようになった。

だけど、私がサクと初めて会ったときの見た目とは変わっていた。紫だった目は海の色を移したような群青色で、あの時わからなかった髪の色は数少ない金髪だった。

ここでは魔力の高い順に瞳の色が群青色、空色、橙色、赤色、茶色、といった感じで分かれていて、髪の色は遺伝という説があったが実際には分かっていない。レイサラス王家の者が持つ碧の瞳は創世時より精霊神よつてもたらされた。神から愛された証である碧の瞳を持つものは、このベーナ大陸においてレイサラス王家だけである。少しでも碧が入っていれば、先祖にレイサラス王家の者がいたということだ。

生まれたときに魔力が決まるが、大体その両親の平均の魔力を持って生まれる。稀にとても強い力を持って生まれたり、弱い力をもって誕生することがある。ここに来る子供は魔力の強くない一般家庭に生まれた前者である。制御できない子供を制御できない親が子供を預けに来たり、捨てる。自分達が生きる為に。ここにこれるのはほんの一握りである。

一際目立つのが銀と黒をもつ者である。銀の髪をもつ者はこの世の全てを司っている精霊神の巫女姫であるメッセンジャーとされ、必ず紫眼で生まれる。そして誕生するのは世界に一人だけ。最も高貴な色とされている。神の力をほば行使できるとされているので神子と呼ばれている。そして、黒髪。この色の色を持つ者には二種類のものがある。一種類は、稀に落ちてくる異世界人の末裔のもの。最近は頻度が高くなってきている気がする。そしてもう一種類は――

「おい、サクつ。我らが城が襲撃された時、おまえ魔力がふくらまなかったか？」

その声にハツと思い振り返ってサクを見た。サクは少し考えるような素振りを見せてから

「膨らんだ……？ 何かに引きずられるような感覚があったけどそれの事かな？」

「何かって？」

「夜だったから、闇かもしれないね。生きてて良かったよ」

ハハツと笑っているが、これは命の危険にあったことを示す。誰かが使役するのか発生したものかわからないが、闇は上等な魔力を好むとされている。闇にのまれた者は死ぬか、黒に染まり操り人形にされる。本人に操られているという自覚を持たせないまま。それを逃げ切ることが出来るのは本当に稀で、運が良かったか、闇が吸

収しきれないほど抵抗が強く、膨大な魔力でなければありえない。良質な魔力は取りすぎると毒なのだと私は聞いた。

部屋からあまり出ないサクは後者なのであろう。こんな人は異世界の者のように異常だ。規格外、だ。羨む者から【怪物】、【人外】と言われて傷ついて壊れてしまったため、国にはそんな人はいないはずだった。

このとき私はサクの心を私が守るんだと、何故かそう思った。

「時代の節目だ」

「節目？」

空を見上げながら、サクはそんなことを呟いた。周りが聞き返してもそちらを見ることも無く答える。

「王が変わったからね。何かが起こる」

「え？　じだいのふしめだと何かがおこるの？」

そう言った女の子にサクは笑いかけると、また空を見ながら言う。少し、寂しげに。哀しげに。

「時代の節目、終わりと始まりには騒ぎがつきものさ。何かを終わらせなければ次のことは始められない」

平和であればいいけど。と空を見上げながらサクは微笑んだ。しかしその周りでは争いがあるの？戦うの？誰か死ぬの？と軽くパニックになっている。ここ何十年大きな戦争は起こっていないのだ。サクの言う騒ぎがどう言う事か、その重大性が理解できない。この予言じみたことが。

「だから私は平和を守る為に騎士になろうと思う」

いきなりそんなことを言うサクに、周りのちびっ子達はまた騒ぎ出す。サクは微笑んだ状態で私を見ていた。私に話しかけるように。

「騎士い？サクは女だから無理だろ」

「女？サクって男じゃないの？髪が短い女なんて聞いたこともないぞ」

「どっからどう見ても女だろ」

「男だ！！」

「女だ！！」

「男！！！！」

「女！！！！」

本人を差し置いて、しかも本人の前で喧嘩である、よく分からない内容で。サクは驚いた顔をしながらも、何か思案顔でうなずいている。

確かにサクの顔は中性的で顔だけでは分からない。体もまだ成長しきれていない為、分からない。頼りになるのは髪形だが、女にしては短いし、男にしては長い気がする。どちらにしても中途半端なので分からない。痺れを切らして私はサクに問いかけた。

「サクって女？ 男？」

サクはその質問に驚きながらも、ニヤツと笑った。

「どちらに見える？」

「え？ ……分からないから訊いているのよっ」

その言葉に目をパチパチしながらも周りを見た。周りのちびっ子達もどっちだ？！ という顔で待っている。

「……………ないしょ」

そう意地の悪い顔でサクは笑った。

「お、教えなさいよおおおお」

リイリイの叫び声が響いた。

その日から、何度訊いてもサクは教えてくれなかった。「いつかね」と笑って。

ある孤児院のお話・後編（後書き）

私の中でリイリイの将来は決まっています。

ディディアスの最後は決めてないけど（笑）

前話からの年月を変更しました。 11/25

二面性（前書き）

ディディアスの裏の性格？

二面性

「陛下、グラウディア公爵がお見えになりました」

「通せ」

ディディアスの執務室に、一人の青年——年齢的にはもう40を超えている——が入ってきた。

「久しぶりだな。レア」

「お久しぶりでございます。陛下」

ディディアスとグラウディア公爵は約10年ぶりの再会を喜び合った。

このグラウディア公爵は学問に秀でたことで有名であり、ディディアスの教育係であった。

王によって教育係を外され、この二人がその間会うことは無かった。

しかし王が亡くなり、阻むものが無くなった。だが、理由なしに王宮には呼ぶことは出来ない。来ることもだ。

この度グラウディア公爵が呼ばれたのは——

「汝、【レディア・リル・グラウディア】は只今より、国家重臣に任命す。」

汝の名の下、許可の無い情報漏えいは処罰に値する。ここに誓いを立てよ」

グラウディア公爵は光とともに現れた水鏡に誓いとして血をささげた。

水鏡は血を受け取ると、水が凝縮され球体となって浮かび上がった。しばらくすると球体が弾け、中から【契約の証^{コンフロウ}】が現れた。【契約^{コン}の証^{フロウ}】は役職によって異なり、さまざまな機能がある。グラウディア公爵が受け取ったのはカフスボタンであった。

それを受け取ると、グラウディア公爵は頭をたれ、

「私に出来る全てをなしましょう。我が真名にかけて」

と言った。ディディアスもそれに答え、言う

「これから頼むよ。グラウディア宰相殿。期待している」

「宰相とは、重い役目ですね。私の力には限界があるので、陛下にはもつと威厳を持つていただけなければ。何を考えているか分からない狸にやられますぞ。教育をしながら差し上げましょうか？」

「おお、怖い。確かに優しさだけではこの国をまとめられないな。そういう人間だけでもないのだから」

「そつでございます。もっと自覚を持つてください」

二人とも声を上げて笑った。冗談を言っているように見える。上からならば

二人の口は笑っているが、目は真剣そのもの。部屋に居れば気がついたであろう、部屋の温度が下がった事に。視ている者は己が力を過信しているために、露見している事に気がつかない。

争いがなかったために、己の力量が分かっていない者がほとんどだ。まわりに比べて出来るか出来ないか、それだけで判断しているに過ぎない。周りの人間に勝ち続け、優秀だと褒められ続け、失敗を知らない。この要素がひとつでもあれば、この過信は生まれてしまう。特に貴族はそうだ。そして上であることに強く執着する。

世界を知らない彼らは、上には上がいるということを知らない。おこがましくも自分は王より勝っていると思うものもいるのだ。彼らの狭い世界では気がつくことすら出来ない。いや、その世界が世界ではなく、世間であるという事を認めようとしないのだ。

ディディアスは一度目を閉じ、少し考えてから、急に口を開いた。

「1つだけ問う」

「何でしょうか？」

「お前は、暗殺について知っていることはないな？」

「え？ ええ、ありません」

いきなり変わった話題のないように困惑した表情で公爵は返したが、ディディアスは満足げに頷いた。

「そうか、では。――キミには消えてもらおう」

そう言っで自分達を【遠視】^{ヴィデン}で見ている者の方に向いて微笑んだ。

もう情報はあげないよとディディアスの口が動いたかと思うと、
【遠視】^{ヴィデン}を使っていた魔法師の女は急速に意識が遠のいていくのを感じた。もう意識がはつきりしていない。どうなっているのかと女は思いながらも、手に入れた情報を依頼主に送った。そして女は絶命した。王都から遠く離れた小さな村で、その村の有名な魔法師は死んだ。突然死だった。その話が、王都に流れてくる事はなかった。

視ていた者の気配が消えたのを確認すると、ディディアスはグラウディア新宰相に視線を移した。

「俺を、王位の座から降ろそうとしているものがある」

「陛下を？………ああ、王妃はともかく側妃でさえも王族二人に認められなければなりませんからね。権力を手に入れるために、次の方法をとったというわけですか」

「ああ。だからお前にはその者達の証拠を見つけ、集めてきて欲しい」

その言葉にグラウディア宰相はニヤリと意地の悪い顔で笑った。

それをみたディディアスもニヤリと笑った。そんな二人に、空気に徹していたコウは顔を引きつらせた。そして、諦めたように溜息をついた。

「行け」

「御意」

一瞬でグラウディア宰相はその場から姿を消した。グラウディアが消えた瞬間ディディアスの笑みも消えた。周囲の気配を感じないことを確認して、コウはディディアスを見た。

「陛下、少しだけよろしいですか？」

「なんだ」

「何故、隠密達に調べさせている事を公爵にも命令したのですか？」

滅多に仕事中に話しかけないコウがした質問。そこには、する必要があるのかという意味合いが含まれていた。それにディディアスは無表情のまま抑揚のない声で答えた。

「知らないはずの事を知っていたから、だ」

「知らないはずの事……………、ですか？」

いったいあの短時間で何が分かったのだろうか？ 自分が思う不自然な点はなかったはずだとコウは考えを張り巡らせた。そんなコウをデイディアスは片眉を上げて見た。そしてそのまま続ける。

「暗殺だ」

「暗殺、ですか？それが………いった………い」

「気がついたか。俺は、城が襲撃された事しか民に話していない。これはどんな有力貴族も然り。王族が、俺が暗殺しかけられた事を知っているのは俺の側近と、フレルの側近だけだ」

デイディアスが返した言葉に、コウは無意識に緊張してのどをごくりと鳴らした。王の口からすらすらと述べられている内容は、反乱クーデターを起こそうとしている人物をあらわしているようなものだ。カラカラと渴いてきたのどを唾液で潤しながら、コウはデイディアスの言葉に続けた。

「しかし、公爵は知っていた。暗殺という言葉聞いてなお、それが当たり前のよう^ににしていた。………そこですね？」

デイディアスはその答えに満足して、「本当、お前は優秀だよ」と冗談交じりに笑った。コウはその笑顔に違和感を覚えた。これはまるで――

「知らないはずの情報を持っている。情報を手に入れる特別なパイプがあるのか、襲撃者たちに関係があるのか、それとも――
――こうなる事が分かっていたのか。の、どれかな？」

まるで、玩具を見つけた子供のような顔だった。しかし、そこに無邪気さはない。暗い闇を持っていた。公爵と再会したときに見せた人懐っこい笑顔も、今は影を潜めていた。

コウは恐怖を感じた。この友人に。王としての仮面をかぶった、優しさと冷酷さという反対の二面性をもった親友に。コウは笑えなかった。これは賭けだ。今王を暗殺しようとした関係者かも知れない人物を、国の重鎮としたのだから。なのにディディアスは笑っている。しかし、コウはそれを諷める事はしなかった、その瞳は自信に満ちていたのだから。

「さて、国の未来を選ぶか、私服を肥やす事を選ぶか………楽しみだ」

ディディアスは不敵に笑った。しかし、さっき見た闇はディディアスの瞳からは消えていた。

すべてを見透かすような、精霊王の愛され子の象徴である綺麗な碧の瞳が光に反射して、キラキラと、ただ輝いていた。

二面性（後書き）

一回全部消えた時は泣けた……………。

やっと納得できるものが書き直せたぜ……………

でも、書きたかったものがかけてない気がしてもやもやして意味わかんない……………

王と親友（前書き）

長くなりました。切れませんでした。

王と親友

その日もディディアスは執務室にいた。ここ10日間、ここに籠りつきりである。そして例によってここにいるのはコウだけである。たくさんの書類の押印をした後、ディディアスが視線を動かさずにじっと見つめていた紙には『騎士団再編成』の文字が並んでいた。

現在王国にある騎士団は魔法師団【マジシュ】と武技団【マーチャル】の二つで成り立っている。二つの団にはそれぞれ何隊か分けてあり、【マジシュ】の中にそれぞれの特性に合わせたところにいる。全て一つの系統魔法を特化させようとした者が多い為、相性が悪ければ太刀打ちできないのだ。たくさんの属性を持ち行使するものもいるが、少数である。一つあればいいという者もいる。平和な中で生きているこの時代には向上心が欠けている。

【マーチャル】にも同じことが言える。剣技に優れたスウオード隊、体術に優れたヴァディア隊などがある。それぞれに特化しているのだが、それぞれに高いプライドがあるのか体面を気にしているのか“協力”ということをあまりしない。

お互いに必要性を感じていないということもある。争いが無いために。フォーメーションの編成で、最強になれる可能性だつてあるのに。現在は騎士団に属するということが一種のステータスになっていた。強弱を問わずに。そして魔法大国の騎士団という知名度を利用するものが増えてきた。

そして、最近騎士団の試験で弱冠12歳の少年が受けて良い成績を残したが、自分の地位を脅かす存在として、その地位にすがり付いているものたちによって落とされた。

そのために何か改善したいと思っているのだが、如何せんアイデアが出てこない。コウも俺もお手上げだというように目を閉じていた。

しかし不意に目を開けた。

「来た」

「なにが………」

「こーちやー………ん!!」

パンツと勢いよく開けられるとレイが入ってきてコウに抱きついた。コウも難なく受け止めて抱きしめ返した。

——いや、だからここ俺の執務室しごとへやなんだけど………

「……………」

「え？ ああこれは、その、えっと」

恨みがましい目でコウを見つめる。視線を動かさないとコウの顔に汗が伝いはじめた。

「陛下」

「何だ」

「あのですね……………」

コウが何も言えずに、しかし何か言おうとしているとその腕の中のレイが声をあげた。

「コウが家に帰って来ないんです」

「仕事だろ」

「だから会いに来たんです」

「……………」

ディディアスが籠っていた間、護衛であるコウも同様にここに居たと言う事である。レイの寂しさは分からなくもないが、仕事なのだから割り切ってもらわねば困る。

臆することも無く堂々と言い切ったレイにディディアスは口を引きつらせた。

「少しでも良いので二人の時間をください」

そう言ってディディアスを部屋から追い出そうとする。留まろうとすれば出来たが、そうするとレイが転んでしまう（それがコウなら遠慮なくやった）。

「おいっ。レイっ」

「その間陛下は散歩でもしてきてください。あんまり根を詰めると、いいアイディアが出ませんよ」

そこで二人の意図に気が付いた。俺に気分転換をさせようとしているのだ。……強引ではあるが少し笑顔になるとレイも微笑んだ。

「いい案が出ましたらコウをこき使うなり騎士団に突っ込んで驕おごった人の精神をぶっ壊すなりしてください。当分返さなくてもいいですから」

「………なんだか物騒だな」

「俺は生贄か？ そうなのか？ あのときの恨みか？」

コウの言うあの時はどういうことか知らないが、笑顔で送り出されたので喜びをかみ締めながらドアに向かった。

後ろでは「俺が生贄ってひどくないか？」「自業自得ではないですか？」「俺はっ………なにも」「詰まるということはやはりやまし

「い事があつたのですね」「違うんだ、信じてくれっ」などと口論が開始されていた。

しかしドアを閉める前に見た二人は顔を近づけ口付けを交わす寸前だった。

俺の部屋で……二人は俺に恨みでもあるのか？ やっぱり最近会えなかった原因の俺に怒っているのではないのか？

そう思いながらデイディアスが出て行ったのをコウは気配で確認すると

「気分転換になるんかねえ？」

「コウがさっさと休めと言わないからでしょう？」

「俺にも立場つてもんが……」

「へえ？　じゃあ親友としての立場は？」

レイのその言葉にコウは黙り込んだ。最近俺はアイツと話したかどうか？　俺はずっとデイディアスではなく陛下としてみて、接していたのではないか？　本音を押し殺すしかないアイツの立場。その休みどころになるという傍にいたはずではないか。俺は……

「苦しみに気が付いてあげるのが親友でしょ？　コウまで一緒に苦しんでどうするの。助けてあげないと」

「……………お前は良く見ているな」

「幼少期の賜物？」

その言葉にコウの表情が一瞬で険しくなるが、レイが「コウちゃん
が助けてくれたし」の言葉で和らいだ。二人はこの部屋ディディアスの主が帰っ
てくるまで、他愛の無い話をしていた。二人は笑顔で帰ってくると思
っていた。この結果がそうなるなんて想像も出来なかった。

そのころ追い出されたディディアスは中庭に向かうために廊下を
歩いていた。そこで、フツと見知った気配を感じてそちらに視線を
向けた。遠くにフレルと、フレルと話す男を視界に入れると風をい
じって少し話を聞こえるようにした。

普段の彼ならそんなことはしないが、フレルと話していた相手が
宰相だったからだ。関係者の証拠を頼んだ宰相がフレルと話してい
たからだ。魔法を使えば神子に気付かれるが、小規模で、自然に流
れる風を利用したために気付かれなかった。

「では……………を……………します」

「それ……………いいんで……………か？」

「この……………為に……………す」

遠くにいて、小規模の力のためとどころが聞こえない。だが雰囲気的にフレルが宰相に頼んでいるようだ。気付かれないように気配を消して近づいていくことにした。

「後悔……………で？」

「迷惑を……………に……………から」

「別に……………ですよ。何故……………まで？」

「私は、……………が大事なんです」

「……………になっても？」

「はい」

話しているときのフレルの顔が悲しそうで寂しそうで、人形じみた笑顔しか最近見ていなかったディディアスは衝撃を受けて止まった。それを引き出したのが自分じゃないことに何故か腹が立った。

衝撃で気配を現してしまった俺をみて二人は驚くと、宰相はこれにて失礼します、と挨拶をして帰っていった。

「フレル？ 何を話していたんだ？」

「メグラナ孤児院のことですわ」

ディディアスが訊くと、フレルはいつもの完璧な笑顔に戻って答える。ディディアスにはそれが苦痛だった。

「騎士団を志願した子がいたので、そのことをお願いしたんですの」

ああ、さっきの書類の。そう納得するが、ディディアスはさっきの光景が頭の中に残っていた。

その光景を思い出すともやもやする。考えていると、それは宰相に頼んだことが関係していると分かった。そう分かった、もやもやが晴れた気がした。

しかし、孤児院のことを頼んでいたとしても二人は親密な感じがした。二人の関係はそれだけではないはずだ。考える。最近フレルはどう行動していた？ いや、俺の大事な家族がそんなことをするはずが無い。疑うなんて――

『お兄様、まだこの者達の首謀者を突き止めなければなりません』

なんだ？ これはフレルが父上を殺した奴を手にかかけようとしたときに言った……。まで。その後フレルはなんと言った？

『それに、その者が王を操っていた者かも知れないでしょう？』

操^{さう}って？ 確かにあの後父上と、その部屋から闇の気配がした。精霊達が感じ取ったのだから間違いない。その精霊達も、注意深く調べるまで分からなかったはずだ。

何故あの時フレルはすでにそのことを知っていた？

些細な疑問は新たな疑念を生んだ。これが真実であるはずが無いと心で思いながらも、頭が可能性は高いと心を否定する。ドクドクと血が体をめぐり、不安が体を駆け巡った。

部屋に戻り、送り出してくれた夫婦を見つめる。二人はデイディアスの表情をみて目を見開いた。そして二人はさらに驚くことになる。デイディアスの言葉によって。

「フレルの身边を、調べる」

感情の籠らない声が、静かな部屋に響いた。

王と親友（後書き）

ネタ切れで2時間ぐらい考えました。

言い訳はありません。来週は出来ないかも……

だって私は見切り発車をしてしまったのだから
→前から

神子姫の真実

ディディアスがフレルを調べると言って3日後、コウが報告に来た。

「……………分かったぞ」

「何故父上の事よりもそちらが早いのか分からないが、言え」

ディディアスは机の上にある書類から目を離さないまま、コウに命令した。

コウは持っている報告書を見て少し悲しげな顔をした。すぐに気を取り直して、仕事の顔に戻した。

さっきの悲しげな雰囲気を一掃してちよっとおどけた様に話し始めた。

「向こうは隠し方が巧妙かつ、情報操作が一流だ。黒幕まで探していると時間がかかるんだ。文句は言わないでくれ」

「それで？」

少し話をずらしても、ディディアスはソレを知りたがった。コウからは彼の顔は見えなかった。コウは笑みを消した。

「神子様は、最近よく会っていたそうだ。王宮や、孤児院で。親子のように仲が良かったとメグラナの院長……園長殿か？ その人が

言っていたそうだ」

「……………そうか」

「ッ……………なんでお前はっ」

ディディアスが返事をする、コウは苦しげに言葉を吐き出して、ディディアスに詰め寄った。

そのとき初めてディディアスは部屋にいるコウを視界に入れた。自分よりも苦しんでいるような顔のコウを見て、ディディアスは目を見開いた。コウは感情をそのままディディアスに吐き出した。

「何でお前はそこまで冷静なんだっ！ どうして頼ろうとしてくれないっ！ 俺はお前に助けられたのにな……………」

「そこまで冷静ってわけでもないんだが」

「その口調もだっ！！ 王としてそうしなければならぬのも分かる。気を張りすぎると駄目になるぞ！」

「口調といえば、仕事なのに敬語じゃ……………」

「こんな時に敬語なんて使ってられるかっ！！」

ガンツとコウは机を力強く叩いた。その振動で数枚の書類がパラパラと床に落ちていく。コウはまっすぐとディディアスを見つめた。意志の強い瞳が、ディディアスの逃げようとする心を止めた。ディ

ディアスは笑うのをやめてコウをみた。碧の瞳には、何かを耐えるような色が浮かんでいた。

「……………つらい。そう言えれば楽なんだろうけど、一度楽を知ってしまったら俺は帰ってこれないだろうから、まだ、言えない」

「言え。公の場以外ではこの顔でいてやる。^{友人}ガス抜きも必要だしな。……………報告に戻るぞ。神子様が頼んでいらっしやったのは一人の魔力質の高い子のことらしい。サクリガーデという子だ」

風が一瞬止んだが、二人は気がつかなかった。そのままコウは続けた。

「疑うのも、疑いたくないのもわかる。とりあえず話せ。夕食後に時間をとっておいた。俺がいるから内緒話は出来ないが、お前の思った通りにしろ。……………家族には遠慮せず、周りのことも考えるな。 “王”ではなく “ディーン” として、な」

「ああ」

最初と比べて、柔らかい表情に戻ったディディアスをみて、コウは満足げに微笑んだ。その顔をみてディディアスは自分が友人を苦しめていたんだと知った。優しさを感じながら、フレルのことを不安に思いながら、もう一度仕事を始めた。

——ただ杞憂であれば言いと願った。

「失礼します。陛下」

夕食後、フレルは執務室に現れた。身内で疑う事は混乱や、争いを生む可能性があるのでコウには緘口令をだした。レイのもだが。そしてこの部屋の声が漏れないように、ゼノに風をいじって貰った。そ万が一の場合はコントロールが出来なくなる可能性がある、このコントロール権はゼノが持っている。ディディアスは己の不安に蓋をして、口を開いた。

「お前がグラウディアと最近頻繁にあっていたらしいが、何をしていた？」

「ですから、孤児院の……」

「子を一人だけ頼むというのは？」

ディディアスはその質問を口にする、フレルは笑顔のまま一瞬固まった。笑みを消して、貴重な——今はフレルしかもたない——紫の瞳に哀しげな色をにじませながら、真剣な顔になった。

「王家の為、この国の未来のためです」

「未来？ この国の為とは？」

「それは今ではありません。きつと4〜5年後だと思われます。その為にあの子には後ろ盾が必要になるときが来るのです」

フレルの言葉にディディアスは反応が出来なかった。神子——未来を見ることが出来る者——と言ってもフレルはそのような事をディディアスには言わなかった。きつと、ずっと王だけに伝えていたのだろう。今になって背負う重い責任。皇太子とは比べ物にならず、少し慣れるまで辛かった。なのにフレルはずっと背負ってきただというのか。自分の一言で世界が変わってしまうという、危うさをもつ予言とずっと向き合っていたのか。

ディディアスがぐるぐると考え込んでいるとも知らずに、フレルは話を続けた。

「それに、私は頼れる貴族はお父様しかいらっしやいませんから」

「そうだ、どこでグラウディアと……………お父様？」

フレルが爆弾を投下。ディディアスは驚きで動きを止めた。フレルはそのディディアスの様子を楽しんでいるように声を立てて笑った。ディディアスはその笑顔に既視感を感じた。フレルはそのまま爆弾を落とし続ける。ディディアスにとっても、この国にとっても、世界にとっての爆弾を。

「ええ。私は、前王との血縁関係はありません。……もちろん貴方方兄弟とも」

「サラ、とは？」

「存じておりませんが……恐らくは無いでしょう」

フレルはそこだけうつむきながら、答えた。ディディアスは急に言われたことに戸惑いを隠せないでいた。今まで信じてきたものがガラガラと崩れていく気がした。呆然としてみると、フレルがディディアスの頬に片手を添えていた。笑みを湛えて。

「私は望んでここに居ります。貴方にもう一度会いたいと願ったのは、紛れもない私ですから」

「……もう一度？」

ディディアスはその言葉に救われた。彼女は望んでここにいた。俺の傍に。嫌々でない事がないことがこんなにも嬉しかった。しかし、彼女のもう一度という言葉が気になった。さっきからずっとフレルははつきりと何かを言わない。最初から、何かを隠している。ずっと淡く微笑んでいる。何かを覚悟して、何かを我慢している。

「何を、隠している？」

その言葉にも、フレルは動揺しなかった。ただディディアスをみて微笑んでいた。

「物事には順序があります。まずは私と、貴方のお父様とのお話をしましょう」

「父上の？」

「ええ。貴方のための、約束を」

月の光を浴びながら微笑むフレルは、フレルの持つ銀の髪が淡く輝いていて神々しかった。

一人の為の、約束

フレルから聞いた話は、到底信じられるものじゃなかった。

彼女の目は嘘を言っていない。それはわかった。俺の目に、碧の目を持つものに、嘘は通じない。ちゃんと確認もした。でも、心は分かっているのに、今までの知識を否定するようで受け入れることが出来なかった。

それは、神子姫の歴史を覆すものだったから――

「貴方の為の、約束を話しましょう。約束、と言うより密約、でしょうか？」

フレルは微笑んだまま、静かに語り始めた。

「私と貴方が初めてあった頃から、王が長くない事は分かっていた。それは、決められたレールの上のことでした。あの時までには」

「あの時……?」

「お金に目がくらんだお母様が私を連れて家を離れ、唆した者達によつて殺され、言葉を発しない私を路地に捨てるまでのことです」

フレルの過去に驚くディディアスに対して、フレルは微笑を崩さなかった。血がつかがってない事を先ほど知ったのだ。自分が母親の事も知っていなくても当然なのに、何か不思議な気持ちが残された。

自分は、彼女をどこまで知っていたのだろうか。ただ、知っている振りをしていたに過ぎないのではないかと、この言葉だけで思った。

「過去の神子は太陽の光が、貴方と私があの時出会うなど予言していなかった。神子は、たとえ他国に使えていようと王族に関わる事は必ず視ます。特に、次期神子との接触ならば。しかしなかった。本当は貴方と私が出会う事はなかったのです。王の意を汲んだ精霊たちが動かなければありえないことでした」

王の意を汲んだ精霊。それは、聞いたことがなかった。父上は秘密主義者だった。その点に関しては、家族に共通している事なのかもしれない。俺は、家族の事を知らなさ過ぎる。改めて、視野が狭かったのだと、自分の世界が狭かったのだと気がついた。これを直さなければ、王としてもやっていけない。ゼノがいるから、生きてはいけると言う状態だろう。

王の意。父上は何を思っただけ俺と彼女を引き合わせたのか。

「私は私で貴方に会ったとき、貴方の目を見て、心を見て、もう一度会いたかったです」

フレルは一度月を見て、ディディアスを見た。フレルの表情を見て、何かを発する事をディディアスははばかれた。

「貴方は本来ならば、10歳まで生きられないはずでした。神の愛子であるのにもかかわらず、精霊王の一人を身に宿すことのできる貴方の強い魂の力、魔力に、器である体がついていかず、暴走して命を落とすはずでした」

「……………それならば、何故俺は生きている？ 死んだとしてもウィルが王位を継いでいたはずだろう？」

「……………予言の道から外れるためには、それ相応の対価が必要な時があります。世界に与える歪みの大きなものであれば特に。小さければ問題ありません。選択肢がありますから」

ディディアスの質問に答えず、フレルは違うことを話し出す。そういうことが聞きたいわけじゃないと言おうと眉をひそめると、フレルは少し困ったように笑った。

「この国は後継者を失くし、戦火に包まれるはずでした。国がなくなるわけでもありませんが、おそらく規模が小さくなっていったでしょう。しかし王は、自らの子を見殺しにしたくはなかった。それは決まっている事で、対価を支払わねば助けられないと知っていても国を犠牲にする事もできない王は、二つの代価をその身で支払う事を決めました。先代の神子は、きっとこうなる事が分かっていた。あの方が愛した一族なのだから」

フレルは苦痛な表情を浮かべると、目を閉じた。フレルは着ているドレスをギュッと握りこんだ。何かを絶えるようにこめられた力は握りこぶしだけでは足りず、ブルブルと腕を震わせていた。

「王は、貴方のお父様は、魔力暴走で生きられぬ貴方と、流産でこの世に生きて出てくる事も出来ないウィルの為に、賢王として残るはずの名を愚王に落とし、長く生きれたはずの寿命を手放した。

あの人は、王は、自分の子の為に、自分の全てを捨てたのです。我が子に生きていてもらう為に。その第一歩が私でした。まだ、覚醒しきれない私を傍に置いたために、自らの子とするしかなかったのですが」

それを聞いたディディアスは自分が思ったよりも冷静に受け止めていた。フレルのこめられたこぶしを解き、椅子に座らせた。手は、赤くなっていた。また握りこんでしまわないように両手をつかんでフレルの前に座った。

フレルはその繋がれた手を見て、ディディアスの手を見て、ほっとしたような顔をした。

「貴方を助けるためには、程よい魔力の放出が必要でした。沢山の魔力を持ち、器の大きかった神子と縁を結ぶのが良いとされたのです。私はそんなことも知らずに、結んでしまいましたけど」

フレルは恥ずかしげに微笑んだ。多分コレが、『望んでここに居る』と言う意味なのだろう。縁を結んだものは、離れてもまた必ず出会う。知らずに、ということは、そのときフレルが俺にまた会いたいと望んでくれたことになるのだから。

「私がこの城に来たときの約束は、貴方方兄弟の行く末を見守って欲しいと言う事と補佐の事でした。これが私と王の約束。密約。いえ、秘め事。この世界に対しての」

何事もないように言ったフレルだが、こんな事は今までありえなかったし、許される事ではない。神子は強制してはならないし、何より国に使えるのだ。個人に、兄弟だといっても、決められた人につくと言う事は許されない。国々との均衡が崩れてしまう。ただでさえレイサラスは、神の愛子という、特別な部分があるのに。

混乱しているディディアスにフレルは、「最後に、私のことをお伝えしておきます」と言っでディディアスを立たせ、膝をついた。

「我はレディア・リル・グラウディアが父、レーシュ・フィーリア・グラウディアと申します。この真名を我らが主に」

捧げます。と言っでフレルは妖艶に微笑んだ。ディディアスはそ

の聞いた事のある名に瞳を揺らし、「レーシュ……」と低くかすれた声を出して一度手放してしまった少女の名を呼んで引き寄せた。その声には、少し熱がこもっているようにフレルは感じた。人のぬくもりの心地よさを感じた。

フレルは羞恥なのか何なのか分からないが、顔にも体にも熱が集まるのを感じると、慌てて口を開いた。

「こ、これで私の命はお兄様に預けましたっ。も、もう遅いので失礼しますっ。お、お休みなさいませっ」

そういつてフレルは、部屋から出て行った。出て行くときに言った言葉がディディアスを固まらせた。

フレルがレーシュだと知った時の喜びは消えていた。その言葉で。

自分は彼女の事が好きだった。もちろん変わらず今も。彼女はさっきの言葉でそういうのを拒んだのだ。『お兄様』そうディディアスと呼んだ事で、【レーシュ】ではなく【フリールージュ】として居るのだといわれた気がした。

ディディアスは彼女は『お兄様』と呼ぶ事で、自分を拒絶したのだと思った。

一人の為の、約束（後書き）

ディディアス。自分の事で頭いっぱい、フレルの気持ちとか考えとか、理解し切れてないようです。

ゼノとの密会はフレルだったわけで。あの時呼ぶといったのは、誰かが聴いていたとしても、後で誤魔化すことが出来るように。という事です。

“格好良い”は必要ない

拒絶？ 自分は何故そう思った？ 出て行くとも、嫌われたとも言われてない。それは好意的だったはずだ。

俺は、何を望んだ？ 一度離してしまった手は、人は、自分のもとに帰ってきた。……厳密に言えば、ずっと傍に居たわけだが。

混乱していた。その言葉だけで片付けるにしては、胸の痛みが酷かった。

“好き”を拒絶されたわけでもない。いや、俺がアイツに望んだのは親愛じゃなくて、もっと別の……

「陛下？ 今、神子様が出て行かれましたがお話は終わっ……って、なんて顔をしているんですか」

ノックもせず、返事も聞かずにコウは部屋に入ってきて、そう言っ

た。自分は、そんなに酷い顔をしているのだろうか。自分では、分からない。

コウは溜息をついて、扉をしっかりと閉めた。俺をみて、眉毛を下げる。

「ちゃんと話せたんだろ？ 出したってことは何もなかったんじゃない

ないのか？ お前は どうして そんな――」

「わからないんだ」

「ん？」

「自分の気持ち」

こんなに混乱して、自分の心が見えなくなるのは久しぶりだった。記憶をたどれば、そうなる時は全て彼女がかかわっていたのだが。

ボソボソとさっきの顛末を話した。国家機密級のものが多数あったので、俺が死ぬ予定だったとか、本来は神子はこの国に居なかった、と言うことは伏せて、俺の力を抑えるために神子を傍にということにした。しかし、ちゃんと話せたかは分からない。

今の俺は、はっきりしない心に振り回されているのだから。

それを聞いたコウは、啞然とした表情で聞いていたが、いきなりガシガシと頭をかいた。そして、ディディアスに向かって、バツサリといった。

「悩むな」

「え？」

静かに、強い声で発せられたその言葉は、大きな声で言われたわけではないのに、何故か部屋に響いた。コウがもつ、魔力が少ない

証である茶色の瞳は、目を逸らす事が出来ないような、強い力がこめられていた。

「正直になれ。気持ちなんかにはつきりとした答えなんて存在しない」

「……………」

「所詮、その気持ちに人が名をつけたただけだ。人殺しにも、嘘をつくのにも、何故それをするかなんて明確な答えなんてない。そこには、それぞれの信念と感情が入っているからだ。説明なんて出来るものなら、それは作られた感情か、作られた答えだ」

コウの言い方は少し極端な気がしたが、理に適っているのかもしれないと思った。

“明確な答え”なんて存在しない。それぞれに、その人の思考、感情が交じり合い、違う答えとなっていく。少し心が凪いできたが、不安は残った。

「お前は、どうしたい？」

「……………」

「それを聞いて、お前は何がしたいと思った？ 何を望んだ？」

「お、俺は……………」

—— 兄妹じゃなく、神子でもなく、ただ、傍に居てほしい——

その言葉が口に出る事はなかった。でも、言いたい事は伝わったらしい。コウは、不器用な弟を見るような目で笑ったあと、言った。

「その筋の先輩から、ありがたい助言をしてやろう」

「偉そうに。」

「気にするな。整理したら、すぐに行けよ？ 時間が経つと、いけないものだ」

「早く言え」

「はいはい」

二人は笑いながら、楽しげに話していた。どこにでも居る、若者のように。

そして、コウは真剣な目になると、はっきりと、ただ、口元は笑いながら、言った。

それを聞いた、ディディアスはフレルのもとへ急いだ。

あの、塔へ

少し長めの階段を上がり、ディディアスは、フレルの部屋の前にたどり着いた。

夜も遅いため、回りには人の気配はない。そもそも、この塔の中には、この塔の主人しか居ない。

ディディアスの気配に気がついたフレルは、部屋から顔を出した。

「どうかされたのですか？ お兄さ……………」

ま、と続く前に、ディディアスは、フレルを胸に抱きこんだ。

フレルは驚いて、抵抗する事も出来なかった。ただただ、強く抱きしめられていた。

フレルは、その力強さに、息苦しいと伝えたが、その腕が離れる事はなかった。二人は向かい合ったまま。お互いに、お互いの稀な色をの瞳を見つめていた。

「俺は……………」

「兄^{にい}様？」

「俺は、お前に、傍に居てほしいんだ」

かすれた様な声から、熱がこもった瞳から、フレルは逃れるすべを持たなかった。ただ、自分の中で、決めていた言葉を返す。

「傍に居ますわよ？ 私は神子ですから」

「違っつー!!」

ディディアスは、叫んだ。大きな声で否定した。獰猛な肉食獣のソレに、ギラギラと力がこもった瞳に、腕に、フレルは息を呑んだ。

「俺は、“神子として”のお前にも、“妹”としてのお前にも支えらたくはないっ。俺は、ただ、お前にいてほしいんだ」

「っ……………」

縫りつく様に、しかし、まっすぐに瞳を見つめて言ったその言葉に、フレルは言葉を発する事が出来なかった。

その中でディディアスは、感情のままに、叫ぶように言ってしまったことを、少し恥じた。心の中の冷静な自分が、格好悪いとも言った。だけど、気にしなかった。

それは先程、コウに言われた言葉

『自分の気持ちを伝えるのに“格好良い”は必要ない。必要なのは、自分の気持ちを相手に伝えられる勇気と潔さ、真剣さだ。』

『たとえ、それが惨めでも、格好悪くても。後悔はするな』

一番最後に付け加えられた言葉は、自分に自由がないことへの言葉だろうか。

ディディアスは昔言えなかった、伝えられなかった言葉を、今、口にする。

「好きだ。俺の傍に居てくれ」

フレルは、紫の瞳を大きく開いた。わなわなと震える口で、震える声で、その言葉に答える。

「陛下は、私の仕える精霊神の気にあてられただけでは……」

「愛子である俺が、あてられるか？」
まなこ

「……わ、私は神子で。幸せを与えるもので、自身は高望みしてはならぬ……」

「高望み。それは、諦めているから、そんな言葉が出るんだ」

「へ、へいか……」

「信じれない、か？」

腕をズルリと下ろすディディアスにフレルは「そんなことはない」と言うように、ディディアスに手を伸ばした。ディディアスはその手をつかみ、自らの頬に運ぶ。

「傍に、居てくれ。おまえが居ないと駄目なんだ。神子じゃない、妹じゃない、お前が」

腑抜けてしまいそうだとディディアスは疲れたような顔で笑った。

フレルの体は、細かく震えており、その表情は切なげだった。

「わたしが、陛下の情人として、そばに……？」

「ああ」

「よろしいのですか？」

「ああ」

「本当に？」

「断られたら、腑抜けになって俺は使い物にならん」

そのデイディアスの言葉に、フレルはふんわりと笑った。まるで、花が開くように。それから「それは、困りますわ」と苦笑した。

そして、捕まえていない手も、デイディアスの頬に伸ばして、触れた。

「ずっと、言う機会はないと思っていました。私が“神子”になつてから、私が死んでしまうまで。諦めていました。

しかし、貴方が歩み寄ってくださると仰るのならば、私も、伝えましょう」

「フレル……………」

「初めて会ったあの瞬間から、私は、貴方に惹かれました。私も、貴方のことが好きです。……………傍に、居させてください。貴方の、一番近くに」

それを聞いたディディアスはフレルをギュツと強く抱きしめた。フレルは、その熱い抱擁について、今度は何も言わなかった。ただ受け入れ、抱きしめ返した。

ただ、その告白とは裏腹に、フレルの顔は不安げだった。悲しげ、ともいうべきか。

それに気がついたディディアスが表情を覗う。それにフレルは、

「すこし、先行きが不安になっただけです。表向きは兄妹ですから」

と苦笑した。それには、ディディアスも同意せざる得なかった。

そして二人は、そのまま顔を近づけ合った。

二人しか居ないこの塔で、長い、長い口付けを交わし、ただの「ディー」と「レーシュ」であつた頃を思い出すように、確かめ合うように、二人は何度も口付けを交わした。

“格好良い”は必要ない（後書き）

……ハッ フレルにディーンって呼ばせるのを忘れた。
まあいいか↑

この回のコウがカッコいい（笑） この台詞言わせたかった。それだけのために登場。予定なかったのに。

恋愛ものって難しいね……。これで書けているのか、不安すぎる。

趣味で、ノリで書いているから、駄文って言われようと、見てくださっている方のために頑張りますが、恋愛小説、かけているのかな

……（遠目）

王弟殿下の心情（前書き）

王弟となった、ウエリアスの視点。

注：姉様Ⅱ フーレルージュ

姉上Ⅱ サラ

王弟殿下の心情

王になった兄上に呼ばれ執務室に呼ばれて行くと、中から兄上の護衛であるコウ殿と、姉様の声ねえが聞こえた。ドアの外に聞こえると言う事はおそらく外に出るので、少しはなれたところで、二人が出てくるのを待った。

「おや、これはこれは王弟殿下。失礼しました」

流れるような動作でコウ殿は礼をした。そこには洗礼された動きがあった。笑顔にも、言い方にも、嫌味は存在しない。

姉様ねえは、まだ兄上と話している。それを見ながらコウ殿は言った。

「あの御二人、喧嘩ねえなされたと思いましたが、今度はものすごく仲が良くなっていますね？」

「喧嘩ねえなされたのですか？　姉様ねえと兄上が？」

信じられない思いで、コウ殿を見上げると、「あー……」と何かバツの悪い顔をして「ちよつとした意見の相違ですよ」と笑った。

それでも、すぐにそれを信じられなかった。幼い頃からずっとあの二人を見ていたが、喧嘩ねえをしているところなんて見たことがなかったからだ。

しかし、今も言い合っているような様子をみて、本当にあつたのだと思った。といっても、今は兄上の言葉を姉様ねえが呆れながら聞いて

いると言っ事だけだ。

「騎士団の再編成を行うと言っ事で、神子様が私と行く事のなりましたので心配なさっているのです。あの方がお強いといつても、気になるのでしよう。おそらく殿下は、私たちのする事の見学及び神子様がり過ぎないように見張る監視、といったところではないでしようか？」

心配性の兄上ならば、その理由は理解できた。しかし出来ない事がある。それは、二人の表情だ。何かが違う気がする。特に（兄上に纏わりつく女の件で）かわる事が多かった、姉様の表情と雰囲気だ。

「なにか、姉様ねえ、優しくなられたと言っていますか、やわらかくなつた気がします。前までは、呼びかけると、話しかけると、困つたように笑つていらしたのに、今は、なにか………ねえなにか、ただ、何かを包み込むように微笑んでいます。私は、姉様のあのお顔は初めて見ました。何か、あつたのでしょうか……私の知らないところで……」

そう言つてフレルを見つめるウィルは、寂しげで、悔しげだった。

兄上が、何かしたんだろうか？

そう思つと、何故か漠然とした不安が沸き起こつた。

「何といたしますか……、あの仲の睦まじさは、そこらの恋人よりも甘さを感じますね」

とコウが笑うと、ウィルは、笑顔を消した。

恋人………？

恋愛事に一番疎い兄上が、恋？ 姉様ねえと恋人？ 私たちは兄妹なのに？

否、私たちは似てない。母が違うからと言って、こんなに違うなんてことはありえない。少なくとも何か通ずる部分があってもおかしくないのに。姉様ねえと姉上だつて似ていない。あそこは母が同じはずなのに……

どうして気がつかなかった？ こんなに分かりやすい事を？ 父上が亡くなられてから疑問が増えた。兄上が精神的にも強くなられた。……今までは、ただ同じことの繰り返しの仕事だったのに。外の事は姉様に任せて。

そして、積極的になられた。王として相応しくなった。

姉様の雰囲気が変わった。……前までは、消えてしまいそうな、儚い人だった。泡沫のように消えてしまいそうな人だった。

しかし、綺麗に笑うようになられた。兄上の仕事を手伝うようになった。兄上の傍に居る事が増えた。

そして、二人が揃う時、お互いに安心して居る顔をしている。お互いがお互いを支えにしているように見えた。

そこに、自分の入る隙間なんてなくて。疎外された感じで――

「なんか、出来上がっている感じでしたね？ 王弟殿下。私の心を奪って置きながら出来上がっているのを見るのは面白くないのですが、私は、私の幸せを見つけることが出来たので、まあいいですけど」

気がついたら、隣に居たコウ殿の姿はなく、リュオン・キノシタが立っていた。そうとう考えていたようだ。そこにはもう兄上も姉様ねえもいなかった。

初めてコウ殿に連れられてここに来た時、兄上の追っかけだったこの人は、今までの間に成長して、大人になった。自分が踏みとどまっている間に。自分より年上なのに、精神年齢が同じだったこの年上の少女は、大人になってしまった。

そうして、自分が見たくないと一度拒否した現実を突きつけようとしている。好奇心と趣味なんだろうが。

「禁断って言うのも面白いですよ？ 兄妹愛とは違う、血のつながりを知っていながらも、異性として愛してしまう。誰にも許されぬ関係。やはり、ここには私の夢が詰まっていますわ」

最後に、少しずれた発言をしたリュオンには何も答えずに、睨んだ。そんな私を気にもしないように「本当に、お互いを大事にしているのが分かる光景だったわ」と言った。

確かにあの時は、見ていて羨んでしまう様な光景だった。兄上が心配そうな顔で姉様の顔を覗き、姉様ねえは、呆れながらもうれしそうな顔をしていた。そして、姉様ねえも心配げな顔をして、兄上は笑って

頷いていた。お互いに心配をして、笑いあう。

そしてまた、リュオンに話しかけられる前に思ったことを、また感じた。

疎外感

兄上にも、姉様^{ねえ}にも、自分が必要ではないのかと。これからは姉上から姉様^{ねえ}を兄上がきっちり守ってください。姉様^{ねえ}も私に相談なされなくなる。私の、存在意義は――？

「一度そう思ったら、終わりですよ？」

「え？」

「一度でも、負の感情を受け入れてしまったら、ずっとそれに縛られてしまいます。それをまた、そう思う前に戻すには時間がかかる」

「……………」

「気がついたらもう、何かを失った後かもしれません」

「……………」

「そして、その人が苦しんでいても、救えるのは貴方ではないと言う事は、覚えておいたほうがいいのかもしれない。自分が行えば、相手に気を使わせるだけだと」

一度、リュオンはそう言葉を切った。そしてもう一度、息を吸って言う。

「未練がましくその人に縋るのか、諦めて祝福するのは貴方しだけです。貴方があの方の事をどう思っているのか分かりません。仲のいい姉が変わってしまったからなのか、そこに誰かを重ねているだけなのか。……私は幸せになるために、この国のお偉い様方の事情には深入りはしません。ご安心を」

途中で、顔色が変わった私を見て、リュオンは言葉を付け足した。そして、

「何であろうと、決めるのは貴方ですよ。後悔なされませぬよう。自分で決めた道ならば、後で諦めもつきましよう」

「どうして、私にかまうのですか？」

「貴方が、昔の私に似ていたからですよ。王弟殿下」

そう言って、リュオンは去っていった。

自然に彼女の横に、男が来た。きっと、護衛にっていた兵だろう。その二人も、幸せそうに笑っていた。

「自分で決めた道ならば、後悔はしない……か。決められた道よりも、決めた道のほうが、諦めがつく。確かにそうだな」

そう小さくつぶやくと、姉様とコウ殿が再編成のために向かった
と思われる騎士舎に足を向けた。
ねえ
レタ・ウォーレンハイム

王弟殿下の心情（後書き）

久々に登場！！　なウエリ阿斯とリュオン。

皆様覚えていらっしゃいますか？　あの当て馬的存在のリュオンです。

見切り発車真っ只中の最中に急に出てきたリュオンです。当初の予定では出てこなかったよ……この人。

次回も、ウエリ阿斯視点で進みます。

姉様と王弟殿下（前書き）

引き続き、ウエル視点です。

姉様と王弟殿下

何か見てはいけないものを見てしまった気がする……

見渡す限りに生きた屍が転がっている。戦ってすらいないのに失神してしまった人も居る。

たとえ、あのお二人が鬼のようで、笑顔で、力の差を見せつけながら圧倒的に潰していったとしても、情けない。

綺麗だった壁は（それでも、多少の傷はあった）、焦げて黒ずんでいるところがあれば、壁が壊れてしまったところもある。

“不合格者”とお二人が決めた、貴族ボンボンの子息のただ粹コネがついていた男。権力コネで入ってきた者。和を乱すものは端に並べら………積み上げられていた。

かろうじて“合格”になったらしい男達は、目を覚ますとガクガクしながら息を乱していない二人を見つめていた。お二人はいい笑顔である。まさに「いい仕事したー」とでも言いそうである。

この異様な光景を、私は用意された観覧席から見ていた。

事は、^{30分}一刻前にさかのぼる。

「これから試験を始めます」

「はい？」

私が騎士舎レタ・ウオーンハイムに着くと、姉様のお声と戸惑ねえっている騎士団長の声が聞こえた。

私は二人の邪魔にならぬよう、姉様の魔力で作られた即席の観覧席に入った。

戸惑う騎士達に対して、姉様は笑顔のまま話を続ける。

「民から苦情がありますの。仕事をしない、何もしくせに偉そう、民を侮辱。そして、あるうことか流れ者の傭兵に負けたものが居るそうではありませんか」

「そ、それはその者がいけないだけでっ」

「沢山いないと？」

「……」

姉様の独壇場は続く。普段の笑みを湛えている姉様しか知らない彼らは、笑顔ながらも何かを放っている姉様に口元を引きつらせている。

コウ殿は目を閉じて、黙っていた。しかしよく目を凝らすと、口元が引きつっているようにも見える。

「それで、話を続けますが、騎士が傭兵に負けるようでは我が国の軍事力が弱いと他国に知らしめす事になります。ああ、失礼。もうなった後ですね」

騎士達は何も言えない。対極的に姉様は楽しそうだ。あれは、兄上に付きまとっていた貴族の息女を追い払う時の目と同じだ。「少し、行ってきますね」と、笑顔で出て行かれたときと同じ顔だ！！いったい何をしたのかその息女達は兄上の追っかけを止め、姉様の信者になっていた。（それも何故か盲目的な）

姉様曰く「お茶会を開いて、楽しくお話しただけですわ」のこと。会話は平和的解決だと思います。しかしそれはどんな方法を行ったかによるのですよ、姉様……。

「今後、そういうことは困りますのでこの国の膿を出そうかと思います。それを見極める試験です」

「失礼ながら、陛下の許可無しではそのような事は出来かねますが……？」

脂汗を滲ませた騎士団長は、逃げ道を探そうと必死になっている。まあ、あのお腹では……ね。

「これは陛下の御命令です。王弟殿下がいらしている事が証明では？」

「……」

なるほど、私は兄上の正式な命であることの証明でもあるのか。てつきり暴走を止めるだけかと思っていましたよ。兄上。しかし、きつと心配な気持ちのほうが多かったんでしょうけども。

「それでは、魔法は私。剣技はコウ殿が相手をします。魔法師と剣士で組んできても良いですよ？」

「そんな事はいえませんか。では新人からでお願いします。我々はどちらで見たいればよろしいので？……」

「何を仰っているのですか？貴方方もやるんですよ？……無能はいりませんかね」

姉様が笑顔のまま付け足した最後の言葉に、団長達、戦わない人間が顔を赤く染めた。

「神子姫様っ。恐れながらお言葉が過ぎますぞっ」

「これは、我ら男の仕事」

「さよう。貴女には理解できますまい。こちらにはこちらの……」

「では、貴方方の言う『男の仕事』とは何ですか？」

よく分からない男達の反論は、姉様の質問で止められた。そもそも反論する時点で、無能を認めていることに気がつかないのであるのか？ この男達は。

「それは……」

「大して説明も出来ないのに、偉そうに逃げないで下さい。上の職務についている方々はずいぶんと、逃げ腰なのですね？」

姉様の顔には、明らかに侮蔑の色が滲んでいた。口元は笑ったままだが、目が笑っていなかった。

「姉様っ！！」

魔力反応を感じて、慌てて姉様を呼ぶ。放ったのは、仕えない上官の下で甘い汁を吸っていたであろう魔術師の男。

姉様はそれを片手を振るだけで、弾いた。

炎の塊を、純粋な魔力だけで消し去ったのだ。これは膨大な魔力をもつ者だけが出来る技。その中でも魔力の精密コントロールが出来るものだけの、どの属性ですらも弾く特別な魔法。

「『神子姫』を、なめないで頂きたいですわ」

姉様がそう言うと、結託（悪い面では）していたらしい魔法師団^{マンジユ}の団長が姉様に攻撃を放った。姉様はそれを難なく避ける。武技団^{マーチャル}の団長は、コウ殿が割って入って止めた。他の騎士達は、それを呆然と見つめている。役に立たないような上司でも、王族である姉様に、陛下の命に逆らったことが信じられないのであろう。いや、きつとあの姉様のことも信じられないのだろうけれど。

コウ殿は姉様に気を使ったのか、その場から離すために武技団長を遠くに跳ね飛ばした。バーンツと壁に飛ばされる。コウ殿の目も相当に……楽しそうだ。

姉様は魔法師団長の魔法を軽くかわす。大きく動いたりせず、ここに来るのが分かっているかのように自然に避けるのだ。放たれた魔法はもちろん、広域魔法もそれが発動する前に、反対の属性を使い相殺していた。

魔法師団長は余裕のない顔をしている。その点姉様は息一つ乱さない。

そんな中、姉様は不意に団長に質問した。

「何故、神子が各国で丁重に扱われるかご存じですか？」

「っはっ……。そんなのっ、予言がっ、出来るからであろっつ。くそっ……」

「それだけですか？」

「それ以外につ、何が、あると言っのだっ。……………何故当たらぬっ」

「神から与えられた膨大な知識を有しているからですよ。王族ですら知らぬ、秘密すらも」

その言葉に、団長は動きを止めた。その顔には信じられないと書いてある。

その隙を、姉様は見逃さなかった。

「ガッ……」

姉様は初級魔法の火で、団長を急所を突いて気絶させた。

「致死性や攻撃力が高い魔法を使えば勝てるのも思ってたのですか？ 残念ですね。嘘か真かわからぬ敵の言葉に翻弄されるようでは、貴方は軍師には到底向いてないでしょうし、戦場に行ってもすぐに命を落とすでしょう。相手の隙を覗えば、初級魔法で倒せる相手もいるというのに」

そう言った姉様に、団長派の男達は逃げ出し始めた。が、姉様がそんなことも許すはずがなく、あっけなく気絶させられた。

他の男達は、顔色が悪くなっていた。たとえ仕事をサボっていたと言っても団長。魔力質も、経験も上な団長が、一国の姫君（と言っても神子姫）に気絶させられ、暗に大した事ないと言われたのだ。恐怖の対象にならないほうがおかしい。

コウ殿のほうもそうになっていた。もっとも武技団長は傷だらけのボロボロでしたが。

「さあ、これで邪魔者は居なくなりました。始めましょうか？」

そう言った姉様の笑顔は、実に綺麗な笑顔でした。

涙ながらに始まった試験は、何千といった人間をさっさとつぶして進むという姉様とコウ殿の鬼っぷりが発揮され、屍がどんどん増えていき、最初の人から1時間経たずに終わった。一人数秒という単位である。

そして、冒頭に戻る。

「合格者の発表と、その処遇、騎士団のこれからについては、また明日報告します。今日はしっかりとお休みください」

そういうと、腰につけていた袋から群青色ラピスラズリの石を取り出し、宙へと投げた。その石はカツと光ると鍛錬場の疵を跡形もなく直した。魔力の残像の粒子がキラキラと舞った。

「これから騎士団は、実力社会となります。持続性のないもの、精神力がないもの、和を乱すものはここにはいりません。騎士は飾りではないのですから」

そう言つと、姉様は報告のためか、さっさと出て行こうとした。騎士舎が綺麗なだけに、屍が沢山ある、この異様な光景に口元を引きつらせていると。「ウエル。いきますよ」といつもの優しげな、

姉様の声が掛けられた。

異様な場所から去るときに強く思ったことが1つ。

「兄上に絡んだ事については、姉様は非道になれる」

そのつぶやいた言葉に、コウ殿は遠い目をしながら同意をしてくれた。

そしてその日、二人の中で共通な考えが浮かんだ

——姉様（神子姫様）を怒らすことなかれ

ウエルは初めて、コウは改めて

女が恐い事を実感した。

フレルの恐さを、ディディアスはまだ、知らない。

そしてウエルは、フレルの言った「神から与えられし知識」について聞くことを忘れてしまっていた。

姉様と王弟殿下（後書き）

うん。フレルは怖い。

ディディアスが知らないのは、彼女が猫をかぶっているから。

好きな人には嫌われたくないという精神。

女って、恐ろしいですね？

発覚

「———」———とすることで、試験は終了しました。全体の3分の1が不合格。今後の入団試験も考え直したほうがいいかもしれません。技能向上については、コウ殿と私が交互に訓練を施し、定期的に試験を行う事に決めました。報告は以上です」

試験の翌日、ディディアスはフレルからそんな報告を受けていた。ディディアスは心配で仕方がなかったが、昨日怪我がないか体の隅々まで調べ、少しホッとしていた。不安が行動にでてフレルを疲れさせて、叱られてしまった。しかし、真っ赤な顔で「やりすぎですわっ。腰が痛いじゃありませんかっ」と怒られても、ディディアスは全然堪えなかった。むしろ真っ赤な顔が可愛いなあと話聞いておらず、もちろん反省もしていなかった。

目の前のフレルは自分の前しか見せない素の表情をしていた。疲れた顔をしているのがその証拠だ。人前ならば、そんな顔は見せない。

そんなフレルをみて、ディディアスはにんまりと笑うと抱き寄せて、己の膝の上に座らせた。

「へっ、陛下っ！ 何をなさっているのですかっ?!」

「ん？ 愛でてるだけ。………嫌ならやめるよ？ 嫌われたくないし」

「べ、べ別に嫌というわけでは………」

声を裏返させて、真っ白な肌を真っ赤に染めるフレルは普段は見せない年相応の顔をしていた。誕生日を迎えたといってもまだ16歳である。王宮の建て直しが最優先で、簡素なお祝いしかしていないが、本人は喜んでいた。孤児院に行った際も、祝ってもらったらしい。さすが『神子姫』と言うところだろうか。

「じゃ、俺がいてほしいからここに居て？」

そう言うと、フレルは真っ赤のままコクリと小さく頷いた。誰も居ないのに相当恥ずかしいらしい。つい苛めたくなる。そしてディアスの手は明確な意思をもって動き始めた。それに気がついたフレルは慌ててそれを押さえ、話を変えた。

「もう1つ、報告がありますのっ！　ですから、この手を離してくださいっ」

その攻防を少し繰り返したあと、動きを止める事を条件にそのままの状態にいる事になった。

フレルは顔を赤くしたままブツブツと不平をもらしているが、腰に回した手に手を添えるという行為で恥ずかしがっているかわかるので、笑いながらフレルを見ていた。

「報告とは？」

あんまり放っておくと出て行かれそうなので、話を戻した。その言葉にフレルはハツとなり、真剣な顔をした。

「貴方が王に即位した際、言おうと思っておりました」

そこで言葉を切ると自分の近くに椅子を持ってきて、ディディアスの前に座った。離れた事に不平を言おうとしたが、フレルの真剣な顔に、口をつむった。

「今まで不思議に思わなかった事が、急に不思議に思うようになった事はありませんか？」

その言葉にはつとめる。父上の変化の事、フレル、サラの事。……そして、真名のこと。真名は知られてはならぬと言われているのに、王族は名を出している。ならば何故名があるのか。

「それには全て理由があります。代々私たち『神子』がその秘密を隠し、守ってきました。それは国々の秘密から世界全体の秘密までこの国は真名、王族について、です」

ディディアスはフレルの真剣な、深い紫の瞳から目が離せななか

った。フレルは何かを決意したように話し続ける。

「真名については、王族が名を出しても平気なのは加護があるからです」

「加護？」

「はい。精霊神グリアルレーイの加護の特徴であるその碧ミドリの瞳を持つ限り、王族はそれに縛られる事はありません。

そして呪をかけるほうも、契約を結んでいるものにかける場合は相手より己が強くなければできないのです。それに呪は禁術。侯爵家以上の地位を持つていなければその呪を我が物できません」

「何故、地位が必要だった？」

「何代も前の事です、その本を管理していたのが侯爵家でした。その時代は人格で貴族を継がせていました。選んでいました。それを妬んだ輩が、後継者を殺すまでは。そうまじないをかけたのはその時代の神子でした。歴代最強と言われ、戦乙女とも言われた方が掛けられました。私には、恐らくそれをとくことはできないでしょう。居場所も、誰が所持しているのか分かりません」

「全ては、己の欲望のため。か。それならば民にはまわらぬな」

そう言えば、フレルは同意するように頷いた。

はつきり言ってしまうえば、何故そのような呪が創られたのか理解できない。名で縛り、人を人形のようにするなど。

そう顔に出ていたのかフレルは言いにくそうに言った。

「歴代の王が、命じたそうです。……手に入れられなかった女性を、手に入れるために」

「……恥だ、な。手に入れようと足掻くのは素晴らしい事だが、時には諦めるということもしなければ取り返しをつかない事になる」

そう言葉にして思う。自分は足掻いていないと。レーシュを失ったと思ったときは、自分は何もできなかった。いや、しなかった。レーシュに、自分に向けられていたものと同じものを向けていたと気がつくと、自分の愚かさにとゾツとした。それから、ただ相手を傷つけないように静かに、自分を押さえ込んで生きてきた。自分のほしいと思っただけは近くに舞い込んできた。ただ、自分はそれをとつたに過ぎない。

自分はまだ足掻く事の辛さを、知らない。

フレルは視線も、表情も動かさなくなったディディアスを不審に思いながらも、話を続ける。

「それと、先王とサラお姉様の事です——」

「取り込み中失礼します。先王の件で、報告がございます」

フレルの話の途中で割り込みがあった。後にしろと言いたいが、父上あんなさつの件についてだ。蔑ろにするわけにはいかなかった。フレルを

見ると、別にかまわないと言うように頷いた。

入ってきた使者は、フレルがいた事に少し驚きながらも、報告を始めた。

「陛下、先王陛下の件ですが、黒幕が分かりました」

使者はそうやっていったん言葉を切った。一緒に入ってきたコウにいったん視線を向け、もう一度こちらを見た。

「首謀者はコウと呼ばれし男。本名ロークウェル・リヴェムンド伯爵です」

その言葉に、その部屋に居たものは驚愕を表した。コウもちろん驚いていたが、予想していたようで冷静に見えた。

ディディアスはコウに視線を向けると、コウは口を開いた。

「襲撃の日、陛下の怪我を心配なさる殿下達をアレが見ていたんです。あれは嘲るような目でした。悦に入っているというような。あの時から、疑問に思っていたのです。確信がなかったため、使者殿にしか言いませんでしたが」

「私も、言われるまで気がつきませんでした。あの時はそこまで気が回りませんでした。何故分かったのですか？」

報告をしに来た使者が不思議そうな顔で聞いた。その時間く事をしなかったのは、俺の前で話させるつもりだったのだろう。犯人はコウの兄なのだから。

「陛下や殿下を見る目が、私を見る目と同じだったので」

そう言って嘲るようにコウは笑った。ディディアスが鋭い視線を向けると、大丈夫と言うように手を上げた。コウの事情を、過去を知らないフレルと使者はわけが分からないと言うように首をかしげた。

ディディアスは一度深呼吸をして前を見据えた。そして、低く鋭い声を出した。

「では、緊急会議を開く。グラウディアも呼べ。フレル、すまないが話は後だ」

「はい。お気遣いなく。私も準備して、すぐに向かいます」

そう言うと、ディディアスは使者とコウを連れて先に執務室を出て行った。フレルはそれを軽く手を振りながら見送った。

完全に出て行ったのを確認すると、フレルは微笑を消した。パタリと、振っていた手を下ろす。そして、誰も居ない執務室で呟いた。

「もう、ロウと言うことが分かってしまいましたか。でも、まだ見

つかってはなりませんよ、ロウ。貴方にはまだ、していただきたい事があるのですから。……もちろん貴方の主にも」

そういつてフレルは不敵に笑った。

扉の向こうから、バタバタと焦ったような足音が聞こえたが、フレルは気にしなかった。

「この事を貴方が伝えても、あの方が信じるでしょうか？ 愚かな反逆者殿？」

誰もいない執務室に、フレルの楽しげだが控えめな声が響いた。

外を見れば、まるで空にいる精霊神グリアルレーイが泣いているかのように、ポタポタと雨が降り始めていた。

発覚（後書き）

1
0 / 2 2
2 2 : 5 6
加筆修正。

不穏な言葉

会議が開かれる場所となった部屋では、ぞろぞろと人が集まっていた。ディディアスは自分が先程言った人物がいるかを確認を取らせ、自分の下に来させるように言った。先程振り出した雨はだんだんと強くなり、霧がかかったように白く見えるほど、強く降っていた。ディディアスは呼んだ人物が来るまで、雨の圧力で落とされる葉を見つめていた。

「グラウディア」

「はい。先程陛下の“使者殿”と確認をしました。“使者殿”の話と、私が集め、目で見えた事と全く同じでした。この議に来る事が適わぬような身分の者も中には多く、全ての人数を確認したわけではないので、その筆頭を連れてまいりました」

「わかつているその他の者は？」

「我が家に招待する振りなどをして捕らえ、現在牢にて拘束中です」

「ご苦労」

グラウディアの言葉から、なかなか大きな組織という事がわかる。この組織がロウに繋がるかが大きな鍵となる。この者達がロウと結託し（もしくは唆されて）俺と父上の暗殺、王城襲撃を行ったのなら、今行方が掴めないロウの手がかりとなる。リヴェムンド家はもぬけの殻……正確に言えば、生きたものは居なかった。前当

主夫妻の行方もわからない。そこに居たのは、あつたのは使用人の屍であつたから。そこは何日もたっていたようで、腐敗臭がすごかつたと聞いた。ご丁寧に、遮断結界が張り巡らされて時間を稼がれたらしい。

もし結託していなかったとすれば、貴族の中に王に敵対する、もしくは廃位させようとしている派閥が存在していると言う事だ。それは由々しき事態だ。まったく、色ボケしている暇はないと言う事か。

しかし、結託していないのだとしたら、何故ロウは姿を消したのか。襲撃者に指示を出したのが貴族達ではなくロウだとしても、理由がない。あいつは理由がなければ動かない。だが、逆を言えば、理由があれば動くと言う事だ。ロウは、感情のままに動く。しかしその行動は単純ではない。綿密に計算されて上で行動する。この事態を考えれば厄介すぎる。

理由としては、ロウが執着している人物が何かを願ったのか、はたまた、自分が執着している人物の為に動いたのか。しかし、その“執着しているもの”が何なのかがわからない。

昔は当主の座だった。あれの執着したものをとるための行動は、周りの人間に被害を与えすぎる。手段を選んでいない、と言ったような感じだった。その為に誰が傷つこうが関係ないという態度だった。……それが血の繋がった家族だったとしても。その中では、一番の被害者はコウだ。もう少し俺の行動が遅かったら、コウは壊れてしまっていただろう。今、癒えてきているといっても、まだ心の傷が残っているはずだ。両親はコウを助けなかったからな。そしてその時、無意識に抑えている力を使って、この国を、貴族を滅ぼしていたのかもしれない。それも、恐らく“変革”であつたのだろう。

それはともかく
閑話休題、今は、その狼藉者達の処罰の話だ。ディディアスはグラウディアに目配せすると、先に議場に入っていた。

ディディアスの名が呼ばれ入る事が伝えられると、ざわついていた部屋の中は一瞬のうちに静まり返った。ディディアスは外向きの声——感情の籠らない声——を出して、話し出した。

「先王陛下の暗殺、及び城襲撃の容疑者等が分かった」

ディディアスがそう言った瞬間、またそこに居る貴族の重鎮達はざわめき出した。しかし、そのざわめきは、ディディアスが入ってくる前と変わっていた。入ってくる前は、突然の召集に困惑した雰囲気
気が混じっていたが、今のは動揺が混ざっている。

そのざわめく男達をディディアスの“使者”影達は観察していた。その言葉に表情をなくす物、表情は変えないが、体のどこかに変な力を入れた者などを。

「グラウディア、入れ」

「はっ」

その場に居た、重鎮達はディディアスがグラウディアを呼び、グラウディアとグラウディアに拘束されたまま入ってきたアラン・イデオティン侯爵に驚いていた。

「イディオン侯爵?! その拘束はいつたい…… グラウディア公爵様、どういう事ですか?」

「アラン・イディオンは先程の話の筆頭だと思われる」

コウがデイディアスの横で答える。皆はイディオンに注目している。そして、連れてきたグラウディアにも。連れてきたグラウディアはいったいどういう立場に居るのか。公爵といえども、一貴族を捕らえる権限など持っていない。相手が侯爵ならば尚更だ。その場の男達は動揺した。発表されない宰相の地位。侯爵を捕らえたグラウディア。それが意味するものは――

「言っていないかったな。リディア・グラウディアは宰相だ」

「なつ……何故発表なされなかったのですか?」
なにゆえ

「一緒に頑張りましょう」だ」

「え?」

黙っていたデイディアスが急に口を開いた。その顔には笑みを浮かべている。しかし瞳はあまりにも冷たかった。侮蔑を含んだ目。人を見下すような目。たとえ地位を持たぬ庶民であっても、人との関わりを大事にするこの国の王族のそんな目は、誰も見た事がなかった。特に、位の高い貴族達はそんな目を向けられた事はなかった。

自分が見下してきた民をも見下さなかった王が、イディオンを見下している。その光景にその場に居たものは、イディオン侯爵は陛下の中で力を持たぬ民より下に見ていることを理解した。イディオンはそれがわかったのか怒りで顔を赤くしていた。

それを見て笑みを深くしたデイディアスは「その時こう思ったはずだ」と続けた。

「甘い考えだ。そうだ自分が乗っ取ろう。そうすれば自分の地位が確固たるものとなる。欲深い誰かが考えそうな事だろう?」

誰も反論できずに、その言葉を聞いた。この場で声を発する事ができるのは、この考えを持たぬものか、ただの馬鹿だろう。そんな空気の中、デイディアスの横でコウが「お前の指示で全てやったのか」と言った。

「ち、違うつ。 “この計画が成功すれば、欲しいものが手に入る” と言われたからだっ。私が考えたのでは……」

「そこに、先王陛下の死が含まれていましたか?」

「そ、それは」

「ふむ、ではそれは誰の指示で?」

「……」

コウが次々に言葉を発して聞いていたが、誰の指示かは言わなかった。コウは言わない男を鋭い目で見ていた。無言の圧力をかける。それでも、イディオンは脂汗を滲ませながらも黙っていた。それを見ていたコウがクツと笑い声をもらした。

「我が家の当主」

コウがそう声を漏らした。男は首を傾げる。いきなりコイツは何を言い出したのかと。

「糞兄貴。人を人とも思わない外道。貴方は何を犠牲にしましたか？」

その言葉に、イディオンはサツと顔を青くさせた。周りはその様子を静かに見守っていた。影がさつとイディアスの後ろに付き、視線をよこすがイディアスは『待て』と手を上にあげただけだった。

声を出さないイディオンをコウは笑いながら見つめる。しかし、コウの瞳は光を映していなかった。

「最近、奥方を見かけないようですが……………貴方は奥方をどうしました？」

それは疑問というより確認だった。その言葉に周りの男達はざわ

めき出した。部屋の中に「まさか……」という眩きが漏れた。

「知らぬっ！ 知らぬ知らぬっ！！ アレがどうなったかなど……私には関係のない事だっ。私を知るのはロウ殿に差し出した時まで……?!」

「フッ……ロウ？ へえ………」

「ち、違うつ。ロウ様は関係な——があっ」

イディオンがロウの名を出した瞬間、体が腐敗し始めた。その部屋には腐敗臭が漂う。いきなりの出来事に、動いたのは“影”の面々だけだった。“影”はディディアスの周りに立ち、その内の一人はイディオンに近づいた。

「陛下、これは呪の一種です。魔法師団【マンジュ】の上部にしか知られていないはずでしたが、外部に漏れていたようですね」

「呪、ねえ。アレの好きそうな事だ。知っているかい？ ロウは自分の駒に全てそれを掛けているんだ」

“影”の報告に、コウはそう答えた。もうすでにコウの顔には感情というものが見られなかった。

その感情の籠らない冷たい声を聞いて、不自然な動きをしたものは恐怖で後ずさった。行動に出たものはすぐさま“影”に捕らえられた。

ディディアスはそれを見ながら威厳のある低い声で言った。

「このもの達に関係するもの、もしくは同じ企みを持っていた者はいますぐここで名乗り出よっ！！」

逃げられないと思うな、とディディアスの視線が語っていた。後ずさった男を捕らえた者達は最初から知っていたと思わせるような早い動きだった（実際知っていたわけだが）。それを目の前で見せられ、腐っていくディオンを見て、冷静でいられるような胆力を持つものはここには居なかった。その中にいた一人が身動きが取れない状態で、ディディアスを見つめた。

「陛下は。陛下は王となられた時から、私達を排除するつもりだったのですか？ あのと時の台詞は、私達をおびき出すために言われた言葉なのですか？」

その言葉に、ディディアスは笑った。その無言の肯定に、男は愕然とした。優男だと思って、甘く見ていたら足元をすくわれた。というところだろうか。その男は自分の負けと愚かさを認識した。

「我々は、貴方様に騙されていたという訳ですか……。人畜無害を装い、公の場でのあの言葉で……」

「騙してなどいない。全て真実だ」

「はっ?!」

「民と協力したいと思ったのも事実。俺が優男であるのも真実であった。しかしそれは俺の一部でしかないと言う事だ」

「一部……?」

「所詮人は少ない情報で人を判断し、差別していると言う事だ。自分がわかっている自分と、相手に見られている自分もまた違うと言う事。それが理解できていなければ、人を信じる事はできん」

そう言い切ったディディアスに誰も何も言葉を発しなかった。コウはその言葉に目を見開き、仕方ないなあと言うように苦笑した。その目には光が戻っていた。

その時、イディオンのほうから、何かが破裂するような音が聞こえた。そちらを見れば、イディオンの腐敗を遅らせようとしていた“影”の魔法師が周りに倒れていた。意識を飛ばしたらしい。

「フフハハハハ、あははははははははははははははあぁ!!」

何かが壊れたように、イディオンは笑い出した。ところどころ腐敗していてもう怪物のようになっていた。“影”がディディアスの安全を確認し、数名がこれ以上は危険と判断してその命を狩るために走った。それを見ながらイディオンは叫んだ。

「王よっ！！ いい事を教えてやろう。貴様の敵はもつと身近にいるぞっ。私のような下っ端が一人二人消えたところで、我々の計画に支障は出ないのだからなっ」

「計画、だと……？」

“影”達の射程範囲に入った男は炎の付加が突いたナイフを投げられ、その体を炎に包んだ。その中から最後に叫び声が聞こえた。悲鳴ではない、何かの執念が感じられるような声が。

「お前のその優^{やさ}しさが仇になるのだあっ！！」

それを最後に、イデオンは死んだ。炎が消えた後には何も残らなかった。そして何人か捕らえたところで、今回の会議は終了した。その場に居た重鎮達は皆、顔色が芳しくなかった。それはあまりにも反逆者が多かった事の不安か、腐った貴族を目の当たりにしたせいなのか、それとも――。

先王陛下の暗殺は、ロウの問題を残して終了した。しかし、イデオンの残した不穏な言葉が、ディディアスの心^{なか}に渦巻いていた。

不穏な言葉（後書き）

うん……シリアス？

難しい……。

閑話?…宰相閣下の仕事。
…前（前書き）

少し時系列戻します。

閑話？：宰相閣下の仕事。：前

陛下に宰相を任命されて早数日。新宰相となったレディア・グラウディアは陛下が新しい王となった時に不穏な言葉をもらした一人の侯爵——アラン・イディオン——について調べていた。

「何だこれは……………」

調べれば調べるほど、いろいろな罪が出てきた。息子の学院の裏口入学、他貴族への賄賂、又はその受け取り。不当な税の徴収、一部の民に対する奴隷よりも酷い扱い。この国の【奴隷】とはリヴェムンド侍従長の奥方の世界で似たような意味を持つ似たような言葉があった為使っているが、人権は存在する。ある程度の自由も存在する。しかし、強制労働の面では変わりがない。買われた【奴隷】は其処に永久就職（断じて婚姻ではない。しかし、その場合もある）した事となる。賃金は通常の5分の1、又は無し。最低限の衣食住を保障すればいいのだ。【奴隷】は自らを買った主人によって、幸か不幸が分かれる。その場で死んで逝くか、同じ場で働く【奴隷】同士で婚姻を結んだり（主の許可が必要）、はたまた主に見初められたり、まさに運である。

それより酷い扱いと言う事は、リベムンド侍従長の奥方の世界にある言葉のままと言う事だ。人権を認めず、十分な食事も休憩も衣服も与えず、女は己の快樂の為に性奴隷にして。

欲にまみれたものなど腐るほど居る。腐るほど居るからといって、それらが行っている事を許してはならない。欲望を、欲求を、己を律する事が出来ない者が他人に文句を言うなど言語道断である。：

……陛下や神子様のように、自分を抑えすぎるのもまた、考え物だが。

水が沸くように出てきた罪状をどうやって確かめようかと考えていると、ドアがノックされた。

「父上、よろしいでしょうか」

「入れ」

入ってきたのは、この家の長男であるレファル・ティス・グラウディア。次期公爵家当主である。レファルは騎士団に所属しており、剣技にも、魔法にも長けた珍しい若者である。歳は20。ディディアスの1つ年上である。この世界では珍しく童顔な為、もつと年下に見られがちである。そして、グラウディア家は代々藍色の髪を持っている。当主であるレディアは空色の瞳、息子のレファルは群青色の瞳である。色を見れば息子の方が魔力が高い事がわかる。ただ、髪も瞳も青系統の色なので、あまり目立たないのが難点である。両方とも似た色と言う事はある意味印象には残るが。

「領地についての意見書が……ってこの書類の山は何ですか、父上？ ……ああ、黒歴史ですか？ 父上にもそんな悪にまみれた時代が」

「ちょっと待てレファル。お前は私のことを勘違いしていないか？ 私はやましいことは何もしていないぞ」

「冗談に決まっているではありませんか。父上はお人よし過ぎない程度に人情にもろいですから、そんな事ができない事はここの者は皆分かっていますよ」

レディアが口を引きつらせながら弁明しようとするれば、レファルは意地の悪い顔で、彼を良く知らぬものが見たら清々しい、キラキラした顔で笑っていた。そんな息子の反応に、レディアは口を引きつらせる事しかできない。

「……いつたい誰に似たんだ……」

「今は亡き母上です」

「本当か!？」

「……」冗談ですよ。そんな事はわかりません。性格は環境がものをいうそうですからね。案外父上かもしれません」

「冗談が好きだな、お前は……しかしそれ、本気で言っているのか?」

「さあ?」

「……」

息子に玩具にされているとわかっていてもつい普段と同じようにしてしまふレディアにと、そのやり取りを楽しんでいるレファルを

使用人たちは生暖かい目で見守っていた。そのお茶目（？）さが、レディアの好かれる理由である。

「それはまあ、置いといてください。気にしないほうがいいですよ？」

「何だそれは……」

レディアは脱力していた。息子と話すとレディアはものすごく疲れるのだ。その様子をレファルは声は立てなかったが心底面白いといったように笑っていた。しかし、窓からの風でレディアの机から落ちてきた紙を見て、レファルが笑うのをやめた。その変化に気がついたレディアは真面目な顔になった。やわらかい雰囲気は一気に払拭され、ピリピリとした空気が漂った。

落ちてきた紙を拾いそれをチラッと見てから、自分の持ってきた紙を見て、レディアのほうを向いた。

「南の領地は急激に人口が増えているようです。そのせいで治安が悪くなったと」

「増加の原因は？」

「皆、夜逃げするように着の身着のままの者が多いとのこと。後、その者達はみな同じ領主の下から逃げてきたようです」

「誰のところからだ」

これ以上問題が増えてしまえば厄介だ——陛下は私のことを試し

ていらっしやるし——と思いながら、仕事の顔をした息子を見つめた。その息子はその紙を私に差し出して言った。

「父上の探ってらっしやる人物です」

「……………イディオンか」

「はい。騎士団では、魔法師団の上層部と繋がりがあるとか、武技団を蔑ろにしているとか、という噂が最近流れておりますが」

「……………流しているのは？」

「そこはまだ調査中です。父上のほうは何かありましたか？」

レファルのその言葉に、レディアは机にある資料を簡単にまとめた物を見て苦虫をつぶしたような顔をした。

「権力と金で握りつぶされた、いや、握りつぶされ続けている罪が沢山出てきた。不審に思われぬよう行動しているからか、こちらから調べなければわからなかったが、案外簡単だった」

「簡単、とは？」

「その領地から情報が外に行かないようにしているが、そこに行けば簡単だったそう。情報統制がしっかりなされていないから、近辺の村々からは似たような話が聞けた。もっとも、村人の話など聞く者は居なかったそうだが」

レディアのその言葉に、レファルも嫌悪を表した。身分制度は必要だと思っではいるが、情報を集めるのに、『村人だから』、『地位を持たぬから』と言った、無駄に地位を持った貴族の変な考えは、この家の者は嫌いだった。

レディアは溜め息をつきながら机をコンツと鳴らして、執事を呼んだ。そして来た執事に「イディオン侯爵に連絡をとれ」と言った。そして執事が出て行ったのを確認すると、また溜め息をついた。それを見たレファルは同意するように小さく頷いた。何に同意したかは言わずもがな、イディオンのことである。

「面倒な事ですネ、父上」

「ああ、だが陛下の頼みだ」

「頼み……では、私は神子様に残されたサクのところへ行つて来ますよ。新しい家族となるこのところへ」

「レファル……」

「恨めしい目をして駄目です。今日は剣術の日なんです。では父上、失礼します。健闘を祈っておりますので」

そう言つて、レファルは出て行つた。レディアはそれを忌々しそうに見ていたが、また溜め息をついて、「面倒だな」とつぶやいた。それから外出するために、身なりを整え始めた。

その様子を見ていた使用人は、「黙っていたり、仕事の話をして
いる姿はお二方は美しく格好よろしいのに、普段がアレでは……な
んて我らが主様は残念なのでしょう」と思っていた。それはこの家
に仕えるものたちの、共通見解でもあった。

使用人たちはそんな主を仕事ではしっかり支え、プライベートで
は生暖かく見守る事を決めていた。

閑話?…宰相閣下の仕事。…前（後書き）

決して、ネタに詰まったわけではありませんから。はい。

ただ、グラウディアさんの頑張りを伝えたかっただけなんです。

…宰相閣下の仕事。…後（前書き）

父は仕事。子供達は親交を深めている。ハズ。

…宰相閣下の仕事。…後

ある孤児院——メグラナ孤児院——ではバシツ、ビシツと木がぶつかり合う音が響いていた。そこでは、群青色の瞳を持ち、男性にシテは長めの藍色の髪を横でゆるく結んだ青年と、こちらと同じく群青色の瞳を持ち、肩までのびた金色の髪を後ろで結んだ性別が分からない子供が木刀を構え、打ち合っていた。孤児院にいる子供は、巻き込まれないように遠く離れたところで見守っていた。

「二人ともカツコいいね」

「俺も、あれ位強くなる!!」

「お前じゃ無理だ」

「なんだと!!」

と子供達がギャーギャー言っている間、その話の登場人物であった青年と子供——レファルとサクリガーテ——はというと。

「なるほど。王宮ではそんな臭い話があるんですね。女の戦いだけではないのですか……。王宮とは面白……。いえ、怖いものですね」

「まてまてまて。お前はいつたどこからそんな事を聞いた。お兄様は悲しいぞ。もっと可愛げがあった方が得だ」

「秘密です。ちなみにまだ貴方は私の兄上ではありませんよ、グラウディア時期公爵様。それに、私に可愛げを求める方が間違っているのです。いまさらそんな事をすれば、気味が悪いでしょう?」

「ま、それもそうだな」

「即答されるのも傷つくのですが……。貴方がそのような言葉遣いをしているのを貴方の父上はご存知なのですか?」

「知ってるさ。僕が言葉を直すときは、人をからかうときだけさ」

「もしくは馬鹿にする時、でしょうね」

「ああ。お前だって、リイリイが相手のときは違うだろ?」

「いいえ。私はこのままですよ。未来の兄上殿のように言葉責めはしていませんから」

「言葉責めとは、なかなか言うな。あと御伽噺に出てくる頭がおかしいとしかいいようがない男が言う「未来の花嫁」のような言い回しで言うな」

「その話知っていたんですね? 意外です。「未来の花嫁」って言う事は、花嫁になりたかったのですか?これは失礼しました。貴方がそんな特殊な性癖の持ち主とは露知らず、ご無礼を」

「ブッ!!」

あまりにぶっ飛んだサクの台詞に、レファルは吹いた。それでも腕は、足は止まらない。もちろんサクのも。そんな会話をしながら、お互いが隙を作り相手呼びよせてつぶそうとし、弾き返され。相手の隙に突こうとすれば間一髪で避けられる。そんな高レベルな模擬戦を行っていた。

今の会話で、レファルは大きな隙を作ったがサクの攻撃をバックステップで避けた。また、お互いに探り合いながら試合を続ける。

「僕にそんな趣味はない。なんて事を言うんだ。お前こそ嫁もらえよ」

「まだ成人してませんよ。ですがそうですね、主婦か主夫が欲しいですね。私は家事が苦手なので」

「うわ……コイツ本気だ。あれだな、お前と話していると『敬語責め』されている気分だ」

「敬語責め、ですか……」

「おっ？ お前今何考えた？ よっ、変態」

「そのノリは何なんですか……。詰問しているようだ、と考えただけですよ。貴方様みたいな加虐嗜好を持ったスケベと一緒にしないでください」

「加虐……スケベ……。そんな返しが来るとは思わなかった。お前やるなあ」

「加虐嗜好は否定なさないんですね。まあ、育てたのは私が敬愛

する兄上（仮）ですから」

「（仮）はなんだ……。お前はどんな風に僕をみているんだ？」

「私は好意には好意を返しますし、悪意には悪意を返していますよ」

「だから？」

「だから、貴方が私をどう見ているかですよ」

「それで、僕のサクに対する評価を聞くんだろう？ お前、卑怯だな」

「卑怯とは酷いですね。策士と言ってください。まあ、人はレッテルを貼りたいがるイキモノですからね。仕方がありません」

「何だそれは……。初めて聞いたぞそんな話は」

「私の持論ですから」

「そんな事ばかり考えて……。父上が嘆くぞ」

「それを見て笑っているのは貴方でしょう？」

「違ういな」

クツクツと二人は腹黒い顔で笑った。遠くにいる子供達には表情が見えなかったのだ、ある意味良かったのかもしれない。ただそれを一人見てしまった少女がいた。長い間打ち合っている二人に、夕

オルと飲み物をもってきたリイリイである。リイリイは「なんて会話してるのよ……」と小さな声でばやいたが、地獄耳の持ち主だったらしい二人は彼女に気が付き、笑った。黒いままで。

その笑顔を見たリイリイは無意識に後ずさった。しかし二人は笑顔のままリイリイに近づいた。爛々とした笑みを浮かべたレファルと、たおやかな笑みを浮かべているサクは精神年齢が反対なのでは、と思うほど違うのだが、一つだけ似て繋がるものがあつた。

……その笑顔の黒さ、だ。

タオルでもなく、飲み物でもなく自分に手を伸ばす二人に壁際まで追い込まれたリイリイは目が潤んでいくのを感じた。リイリイは心の中で叫ぶ。

——泣いては、瞳を潤ませたら相手の思うつぼなのにつ！——と。

「リイリイの困り顔って、僕は好きだよ」

「それには私も同意見です。リイリイは可愛いですからね。愛でたくなります」

「その行為は愛でているとは言わないっ！——」っというリイリイの意見は却下された。

そしてこの朝、孤児院にリイリイの悲鳴が上がった。いつもの事なので、誰も気にしなかった。群青色を持つ二人の笑い声が響いていた。

その頃、父上レディアの方はというと。呼ばれた反逆集団（イディオン達）のパーティに出ていた。

そして、そのパーティが始まる前からウンザリとしていた。

見渡す限り、領民からの評価が悪い貴族でいっぱいである。そして、その間であるのは賄賂。賄賂賄賂賄賂。ウンザリである。レディアは頭を痛くしていた。彼の頭痛の種はそれだけではなかった。ここに来る前に、録音が出来る魔石【レギトウン】を借りる為に王城に行ったのだが、そこで王族の二人に出会ってしまった。血筋で見れば娘で、他を見れば娘ではない【神子】と、真の王族で自分を宰相にした現レイサラス王。出会うのはまだいい。そこは彼らの居場所なのだから当然だからだ。ただ、内容が悪かった。と思う。

神子様に出会えば、ずっと頼まれていた事の確認をさせられ、それが自身の不利になると分かっている、後悔をなさらないと仰った。相談をなさらず全て決めてしまわれるのはあの方の悪い癖である。それに頭を痛めたと思ったら、ゾクリと寒気を感じた。そこには不機嫌な陛下の姿。どこからどう見ても大人気ない嫉妬した様子だった。嫉妬するのが悪いとは思わないが、アレは目線だけで人が殺せるくらい鋭いものだった。レディアはそれで気絶しないようにするので精一杯だった。逃げるようにそそくさと帰りここに来たのだが……。

うまく情報を引き出そうと思ったのだが、周りはすでにそんな話ばかりだ。周りを信頼しすぎ、とも言っただろう。『壁に耳あり』という位なのだから、もっと慎重になるべきなのだが、ここの者達は

頭が軽いらしい。おそらく、その頭の中には己の欲望でうまっているのだろう。

こんな事をして露見しないとも思っているのだろうか……。なんて頭の軽い奴ばかりなんだろうか。寄ってきたイデオンを軽くあしらいつつ魔石に魔力を注ぎ、会話を全て記録する。これを見ていると、調べさせる事なかったのではないかと思う。

自分が望む地位が手に入れると信じて疑わず、すでに手遅れになっているとも気付かず。ただのうのと民を奴隷のように扱って、贅沢を極めた彼らにはそんな事を見抜ける力なんて残っていないのだろう。過去にどんな功績を残したとしても、今は今だ。過去の栄光にすがり付いていては前に進む事はできない。

ある程度情報を収集すると、仕事を理由に退出した。

とった記録を、家にやってきた【王の使者殿】と集めた資料と照らし合わせながらそれが正しいかを確認し、断罪した。悪事を働いていた貴族は内密に、周りに気付かれぬように捕らえ、牢に収容した。

捕らえた貴族のそれぞれが、同じような人物に会っていたという事はわかったが、それが誰かは特定できなかった。それは、イデオンを捕らえて捕まえていった先の議場で明らかにされるとは、このときのレディアは知る由もなかった。

サクと楽しい(?)模擬戦をして帰ってきたレファルがみた父は、ものすごく疲れた顔をしていた。一気に老けてみえ、からかえなかったという。

：宰相閣下の仕事。：後（後書き）

父は仕事。子供達は親交を深めている。ハズ。

とか言いながら、子供達のターンの方が長いという。

まあ、とりあえずこれで終わりです。次は本編に戻る予定です。

安和は風邪をひいてしまいましたが、皆様はお気お付けください。

なまえ（前書き）

本編よ。おかえり。

なまえ

イディオンの死から数日。ディディアスは、フレルと昼の休憩をしていた。フレルの方でもイディオンの周辺を調べているらしいが何も出てこないらしい。そして今日の休憩は仕事の話は抜きにして、この国の真名について聞く日だった。

「王族が真名を出しても、加護があるから大丈夫だと先日お伝えしましたが、民は違います。私や父が貴方と契約を交わしたときに、名と家名の間にもう1つ名前が入っていたでしょう？ それが真名となります」

「その名は正式な時にしか名乗らないのか？」

「知る事ができるのは伴侶になる相手だけです。もちろん名づけた親は知っていますけどね。しかしこれが多いのは貴族だけです」

「他の民はどうなっているんだ？」

「もともと、真名による支配はお互いを良く知らないとできないように、大量の魔力を消費します。禁術とされているだけに燃費が悪いのです。そして、知る事ができるのは一部の貴族だけ。学校に行かない限り魔力の使い方を知らない民にとって意味はありません。それ故に民の中で廃れていきました。伝統を重んじている家などでは今でもつけている方はいらっやいますけどね」

苦笑いするフレルにディディアスは頷いていた。需要がなくなれば

廃れていくのは理に適っているからだ。

ふんふんと頷いていたディディアスだが、ある事に気がついてニヤリと笑った。

「家族ではない他人に真名を教えるのは伴侶だけなんだよな？」

「……？ はい。そうですね……？」

「では俺はそう受け取っていいわけだ」

フレルはいったい何のことを言われているのか判らなかったが、それに気がつく顔と顔を赤くさせた。

ディディアスはニコニコと——ニヤニヤと笑っている。フレルは慌てて、興奮しているのか、何故か立った。

「お、教えたのには特に意味なんて、ないんですからねっ」

「ないんだ？」

「そ、そそそんな顔しても駄目ですっ。うう……」

「嫌なのか？」

「そんなわけないですっ！！ ……ハッ」

「言質はとつたな」

逃げ回るフレルを捕まえて、膝に乗せた。ディディアスの最近のお気に入りはフレルを膝に乗せる事らしい。そのたびにフレルは顔を赤くする。全く慣れない。ディディアスはそれを愛でている。傍から見たら、静かにいちゃいちゃしているように見えるだろう。二人が並ぶと美男美女なので嫌味っぽくはならないので通常よりはイライラは感じないだろうが、やはりイライラするだろう。異性からの僻みとはそういうものだ。ということを二人は自覚していない。

この状態を意識しないために、フレルは真名関連で違う話を始めた。

「じ、実は、精霊王様方や、緑神様の名は私達しか知らないのですよ」

「そうなのか？」

ディディアスはあんまり苛めるとかわいそうだと思ったので、その話に乗ってあげる事にした。それにしても、興味深い話である。

「ええ。あの方々の名は、方々がお許しになつた人にしか名を呼ぶ事をお許しになっていません。ですから、私達が名を呼んでも、許可を頂いていない方々には聞こえないのです」

「ほお……」

「【神の愛子】とされるレイサラス王家ですら、神である緑神の名を知っている者はごく少数です。そして、緑神の名である【グリア

ルーレイ』と呼ぶ事を許可された歴代の王の時代に、必ず何かが起こっていました」

「怖い事言っな……。それがプラスのことであればいいが」

二人はこの国の将来を思って、顔を見合わせた。その瞬間、慌しげにドアが開いた。

「あ—————!!」

叫ばれたその言葉に、二人は驚いてドアのほうを見る。そこには若い文官が立っていた。その顔には焦りと恥ずかしさが混ざっていて面白い顔になっていた。ディディアスは噴出しそうになるのを耐えた。

「どうした？」

「ああ。やはり噂通りでしたか……」

「何がだ？」

「お二人が恋仲であると言う事です。禁断のっ！」

「っ！ ゲホッげほ」

『禁断の。』その言葉でディディアスはむせてしまった。フレルは苦笑している。フレルがレディアの子と言うことを知らず、ディディアスの膝の上に乗って見詰め合っていたとなれば、どれも否定できなかった。

「禁断。ではないわね……」

「そうなのですか？」

フレルが困ったようにそういったのを入ってきた若い青年はホツとした。そして、キリツとまじめな顔になると、言った。

「大臣方が陛下をお呼びです。何でも大至急にお話したい事があるとか」

「ああ、わかった。内容はわかるか？」

「はい。ええつと……」妹に現を抜かす暇があるのならば、正妃を決めてお世継ぎを。王妃候補はできております。それを決めましょう』と言われました」

妹に現を抜かすつて……とディディアスが思った瞬間、空気が固まった。「正妃、ですつて？」つと眩きが聞こえ、部屋は異様な雰囲気包まれた。その発生源はいわずもがな。ディディアスの膝の上に居る人物である。

「陛下」

「な、なんだ」

「私も、その議会に出席しますわ。いいですよよね？」

変な威圧を放出しているフレルにディディアスは断れなかった。別に、断る理由もないのだが。

これは波乱な議会になりそうだとディディアスは心の中で小さく溜め息をついた。

その頃、メグラナ孤児院の医務室でサクはリイリイの治療を受けていた。何故治療を受けているといえば、先程までいた宰相レディアの息子、レファルによる剣術稽古が行われていたからである。

リイリイは自分の魔力をコントロールしながら、弱い治療魔法を展開した。傷に合わない大きな治療魔法は逆に相手を傷つけるからだ。

サクの傷を治しながら、リイリイは呟く。

「先のつぶれた木刀をどう使ったらこんな切り傷ができるのかしら……」

「技術の差でしょうね……。手加減されていてもまだ勝てませんねえ、情けないですが」

リイリイの呟きに、サクは律儀に答えた。情けないと言いながら笑みを浮かべたままだ。言葉と表情があっていない。これはいつもの事なのでリイリイは流す事に決めている。しかしリイリイは驚いていた。サクの台詞に。

「あれで手加減してるのっ?!」

「っ……痛いです。リイリイ……」

「あっ。ゴメン……」

興奮してコントロールがおろそかになり魔力が多く注がれてしまった為に、サクは痛みを感じ、声を出した。

訓練という名の決闘は騎士であるレファルの勝利で終わった。途中まではサクも対抗できていたのだが、まだ体力も技術もレファルの方が上だった。レファルが最後を決めたとき、サクは息が上がっていたというのに、レファルは涼しげな顔をしていた。リイリイはそれを見たとき化け物かと思ったのだ。何だこの体力馬鹿は、と。木刀での戦いなので、打撲が多くなる事はわかってはいたが、上の服を脱がせてみれば尖った剣先で切られたような傷があるのだ。服はなんともないのに。それを見たリイリイは「普通じゃない」と口を尖らせて言った。それにサクは苦笑いをした。

「…『普通』の定義は人それぞれだね」

「そうだけど……。でもおかしいよっ」

「リイリイ…。あの人は見かけ通りではない事は知っているでしょう？ 見かけはモヤシのくせに中身は――」

「それは知っているっ！！ そこじゃないのっ」

リイリイが声を張り上げたのに、サクは驚いて目を丸くした。普段のサクを知っているのならば、この表情は珍しいと言えるであろう。サクが目をパチパチさせてるのを見て、リイリイはサクにしている治療を止めるとサクに向かってビシッと指をさした。リイリイは仁王立ちである。

「おかしいのは木刀を生身の体で受け止めておいて怪我がこれだけなのかって事よっ。骨折していてもおかしくないのに」

「丈夫ってことですよ」

サクは苦笑いを浮かべながら、リイリイの勢いに押されながらもそう答えた。リイリイはその答えに不満そうに顔をしかめた。

「だからっ」

「…ふう。こういうのは魔力の――」

サクが不自然に言葉を切った。そして苦笑が不機嫌そうな顔になった。と言つても、親しい者にしか判らないほどの不機嫌さなので、傍から見れば無表情であつたが。その変化にリイリイは不思議に思ひ、サクを見つめた。部屋が静かになり、聞こえてくるのはコツコツというヒールの音。その音と共に、職員の「お待ちください」と悲鳴のような制止の声が聞こえた。その制止の言葉を無視して「用があるのでここには私以外入れないで下さい」と言つて、ノックもせずリイリイたちの居る医務室に入ってきた。その瞬間、サクはリイリイを庇うように立った。

入ってきた女性は、サクを品定めをするようにジロジロと見つめると見下すように言った。

「あなたが、フレルが目をかけているという子？」

「その御名を我々民の前で出す事は許されておりませんよ」

サクはジロジロ見てきた、無礼な行為を行った相手に、硬く冷たい声で答えた。挨拶も無しという無礼に無礼を返したサクにリイリイは驚いていた。サクは相手がどんなに無礼でも礼儀正しかったからである。女性はその言葉に嫌そうな顔をした。

「その台詞はまるであの子の特徴ね。目を掛けていると似るのかしら……。そう思いませんか？ サクリガーデさん」

「似ていると仰って下さるのなら、恐悦至極に存じます。一の姫様」

サクの言葉に相手の女性が誰だかわかった瞬間リイリイは悲鳴を上げそうになった。そして思い浮かんだのは、民と関わらず高慢でひとりよがりだということから決めた一の姫様につけた『独善姫』どくぜんひめというあだ名。いったい何しに來たのだろつと、震える体に叱咤して平静を貫いていた。

その一の姫であるサラは、自分のいった嫌味を笑顔で返され、不快感をあらわにした。その表情のまま、サラは上から視線を崩さず言った。

「あなた、騎士を目指しているんですつてね？」

「はい。そうですが。それがどうかいたしましたでしょうか？」

「孤児では騎士になれないということをご存知？」

「……………何が仰りたいのでしょうか？」

サクのその言葉に、サラはニンマリと笑うと、意地の悪い顔で言った。

「私の手足となりなさい。そうすれば、私の力で騎士にして差し上げますわ」

その言葉にサクが表情を動かすことなく、リィリィの方が驚きで固まっていた。

なまえ（後書き）

そんなに進んでない気がする。どうしよう。なかなか折り返し地点まで行かない……。

お后様

カツカツと廊下を歩く足音が響いている。他にも足音が聞こえるのに、その一人の音だけが良く響いているように感じられていた――

ディディアス達は護衛を連れて、大臣より急に出された『正妃決め会議』に行くため移動していた。王を支える王妃が決められるかもしれないと思えば、緊張するかもしれないが、この雰囲気は異常だった。護衛の兵士達はビクビクしながら無礼にならない程度に様子を伺っている。

ビクビクしているのは普段近づけず、人気高い緑恵アヘムの王である陛下の傍にいるから――ではなく、いや、もちろんそれも入って入るだろうが、その恐れ多いと思う気持ちを上回るほどの何かに彼らはビクついていた。それはディディアスの後ろを歩くフレルから発せられる何かである。

兵士達は可哀相なほど怯え、ディディアスとコウは見た感じは通常通りでも、内心は冷や汗がダラダラと伝っていた。

ディディアスは口元を引きつるのを耐えながら、いつも通りの口調を心がけて話しかけた。

「フレル、どうかしたのか？」

「何でもございせんわ。何か不審なことでも？」

「無いなら良いんだ。そう思ったただけでな」

「そうでしたか。すみません。気になる事をした覚えは無かったのですけれど」

――私はね。

そう言われた気がして、デイディアスは内心悲鳴を上げた。表面上は優しく、これこそ聖女のように微笑んでいるが、目は笑っておらず剣呑に光っていた。これを見たデイディアスは目を逸らしながら、聖女は実は腹黒いだけだったのではないかと現実逃避をした。残された文献が真実なら腹黒い人間が利益にならない、ましてや自分が不利益になる事を行わないとわかっていながら。

フレルの目の鋭さに耐え切れなくなったデイディアスは助けを求めるように、コウを見た。見られたコウは、無理、と言う様に目を逸らした。デイディアスは眉を顰めた。そして男二人は目に見えぬ攻防を始める。

――陛下がすっかりしていなかったからこうなったんでしようがっ

――俺に押し付ける気かっ?!　そこまで頭はまわってなかったんだ!

――色ボケがっ!　俺を巻き込むなっ!　お前がちゃんと説明しろよっ

――何をだ!　というより、この状態で何を言えとっ

男二人が念話でギヤーギヤー言っていると、周りの温度がいくらか下がった気がした。そして二人は会話をやめて、回りに不自然に思われないように後ろを伺う。どこから見ても挙動不審だったが、周りはフレルの気に飲まれすぎて気が付かなかった。フレルは相変わらず微笑んでいる。それが恐ろしかった。

「フレル」

「はい。お兄様」

震えそうになる声を抑えながら名を呼べば、『お兄様』と返ってきた事に、ディディアスは心が折れそうになった。ここにリュオンが居ればちょっとした惨事がおきていただろうが、幸いな事に辺りに居なかった。

ディディアスはギュツと口を結んで、前を向いた。そして、はっきりした声で言った。

「俺は、『俺』を通すから。……何があっても」

その言葉に、フレルは驚いた顔をした。そしてその意味を正確に受け取ると笑んだ。冷たい笑みではなく、暖かい笑み。その言葉一つで、その場を支配していた異様な空気は拭払しよくふつされた。

恐怖をあたえる何かが無くなった兵士達は他に分からない程度に

長い息を吐いた。デイディアス達はそれに気が付いていたが、何も言わなかった。これ以上は可哀相であつたからである。デイディアスは護衛をしている兵の隊長に、すまないと言う様に目配せをした。隊長も、その意図を正確に読み取り、若い兵士の肩を叩いた。その兵士がビクついて我らが主であるデイディアスの方を見れば、デイディアスは苦笑していた。その姿にまたビクツとなり、威圧のようなものに当てられて忘れていた緊張を思い出してガチガチになつてしまつた。

また、デイディアスに慣れ、そこまで緊張しなくなつた兵でも、すれ違つたウエルに「ウエルも参加した方がいいですよ」と言つたフレルの言葉に顔を強張らせていた。普段の3人そろつたときの警備は“影”が担当している為、それぞれ専属が居るとしても一人だけなのだ。王家を敬愛する兵が多いこの国で、緊張するなど言うのが無理のある話だつた。そんな光景に慣れている一部の兵や、見守る“影”はあたりを警戒しながら、生暖かく見守つていた。

議場に着いたデイディアス達は、話し合いを始めた。と言っても話すのは大臣たちなのだが。デイディアスは上座に、フレルはその斜め後ろに、ウエルは横の壁の方で全体を見ていた。

「何故、急に正妃の話など出たのだ？」

デイディアスは意味が分からないというニュアンスを含ませて聞いた。その言葉に、大臣達は口々に言い出した。

「先王陛下が早くに崩御なされたからです」

「齢50を超えずに……。陛下が長寿であろうとも何かが起これば

――」

「犯人が捕まっておらぬ故、警備が厳重でも絶対とは言い切れませぬ」

「早めにお世継ぎを、と思っただけにございますれば」

世継ぎの話は早いだろ。と思っただのディディアスだけであつたらしい。ディディアスの周りの人間は表情を変えていない。驚いた雰囲気も感じられなかった。予想していたらしい。ディディアスがそこまで重要に思っていなかったのは、もう自分にはフレルが居るということで考えていなかったのだ。さて、なんて答えようかと考えていると、後ろに立っていたフレルが前に出た。

「皆様がお集まりいただいているこの機会に、報告したい事がございます」

「……何でしょうか、神子姫様」

空気読めよと言いたげな雰囲気の中、フレルは誰もが魅了されてしまいそうな笑顔で、ディディアスが予想もしなかった事を、彼らにとっては爆弾を落とした。

「実は私^{わたくし}、王家の血を引いておりませんの」

「なんですとつ?!」

「生家に迷惑を掛けたくありませんので、どこの家かはお教えすることは出来ませんが王家と血がつながっていない事は確かです」

神子姫の爆弾発言に議場は動揺に包まれた。ウエルは横で目を見開いているがそこまで驚いている様子は見られなかった。大方予想でもしていたのだろうか。フレルが謀っていたということが分かってても、神子姫という事実は変わらない。【神子】と言う立場は不可侵である。一国の王にできる事は、何かを要求する事はできない。つまり、大臣達は敬わなければならない事に変わりはないということだ。だが、何故それをここで発表したのか、このタイミングで。その事に気がつけたのはごく小数だった。その筆頭は、ディディアス達と長く共に居た、弟。

「まさか、お二人はそういったご関係なのですか……………」

大きい声ではなかったのに、その声は議場に響いた。ディディアスは表情を変えることなく真面目な顔で、フレルは微笑んだままだった。動揺の全くない二人の表情は、それが真実であると雄弁に物語っていて、ウエルはそれ以上言葉を発する事ができなかった。大臣達はそれでも、ディディアスに言葉を求めた。沈黙ではなく、言葉で真実を教えて欲しいというように。

「そうだ」

簡潔に言ったデイディアスに、皆体を強張らせた。息を吐いて、余分な力を抜く事ができた大臣のうちの一人は、入ってきたときから正妃決めに乗り気ではなかった王に問うた。

「それ、は、神子様を、正妃に、お迎えするという事なのですか？」

「そうしたいと思っている。俺は彼女が居ればそれでいい。側室も要らん」

その言葉に大臣達はおのは慄き、フレルは頬を赤くしていた。ウェルは表情が抜け落ち、瞳をゆらゆらと揺らせていた。大臣達は急いで向き合い、感情のまま議論を始めた。

「私は反対ですぞっ！ 血が繋がっておらぬと言っても兄弟であらせられるではないか」

「何を言うかつ！ 長年他の国が成し得なかった神子を王家に入れられるのですよっ」

「それを国民にどう説明すると言っのだった。混乱を招いて暴動など起きたらどうするっ」

「ありのままを説明すればいいのですつ。神子様がその経緯をお話なされば、納得するはずです」

「物事はそんなに上手くいかぬつ。神子の力が強すぎ、世継ぎができなかったらどうするのだっ！」

「それは――」

「そんなのでは――」

「柔軟な思考を――れば」

「こうすれば――ではないかっ」

喧嘩つぼくなりながらも、大臣達は討論をしあった。そして、待っていたフレルとディディアスに向き合い、自分達の総意を伝える。

「我々は、神子様を王妃にする事には反対です」

その瞬間、議場の雰囲気は一気に変わった。

お后様（後書き）

う、うむう。

何か変なところがあればお教えくだされば幸いです。日本語とか、正しい日本語とか……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7078t/>

一人の世界で

2011年11月27日09時47分発行